

# 「信大茂菅ふるさと農場」における教育実践研究

－JAながの・長野市茂菅地区農家との連携－

2005年2月

信州大学教育学部  
教師教育学研究室



# 「信大茂菅ふるさと農場」における教育実践研究

－JA ながの・長野市茂菅地区農家との連携－

2005年2月

信州大学教育学部  
教師教育学研究室



## まえがき

「信大茂菅ふるさと農場」が発足して5年が経ちました。JA ながのの皆様、そして長野市茂菅地区農家の皆様の温かいご理解とご指導によって、おかげさまで教育実践研究を少しずつですが積み重ねていくことができました。これまで応援して頂くばかりで、農場における教育的成果についてのご報告をすることもないまま5年間で過ぎてしまいました。5年目の様々な試練を無事乗り越え、新たな決意で6年目の農場に立ち向かう勇気を与えてくださったのも他ならぬ JA ながのと茂菅地区農家の皆様であります。この機会に5年間の「信大茂菅ふるさと農場」における教育実践研究を小冊子にまとめて、応援してくださっている皆様にご報告したいと考えました。

5年前に大学のキャンパスの中だけでの教員養成ではなく、地域社会の中で地域の子どもたちや地域の皆様と共に農作業に汗する教員養成に取り組むたいと一念発起しました。この願いを聞き入れてくださったのが JA ながのであり、長野市茂菅地区農家の方々でありました。この5年間に「信大茂菅ふるさと農場」の運営に携わった学生は125名ほどになります。また、「生活科指導法基礎」の授業で田を起こし、田植えをし、稲刈り・草刈り、稲刈りなどを行った学生は875名になりました。5年間で約1,000名の学生が茂菅の田んぼに入り、農作業を体験したことになります。

この中から卒業論文や修士論文に「信大茂菅ふるさと農場」を取り上げる学生が生まれてきました。また、長野県教育委員会から内地留学生として海沼正典先生と志村昌之先生が参画してくださいました。こうして多くの方々のご努力とご協力に支えられて、「信大茂菅ふるさと農場」をフィールドとする教育実践研究が少しずつ積み上げられてきました。本小冊子はこれらの論考を集めたものです。

読者の皆様には忌憚のないご指導をいただきたくお願い申し上げます。(土井進)

## 目次

まえがき	1
1. 「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」の創設	3
－「生活科」と「総合的な学習の時間」の研究開発をめざして－	
2. 「信大茂菅ふるさと農場」における「生活科指導法基礎」の授業実践	8
3. 環境教育としての総合演習	11
－「信大茂菅ふるさと農場」における「米づくりと人作り」の実践－	
4. 学校や地域社会における農作業体験学習の意義	19
－「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して－	
5. 農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ支援	29
－「信大 YOU 遊プラザ」に見る学生の実践－	
6. 土から人へ－小・中学校における農作業体験活動の実態と課題－	39
7. 「信大茂菅ふるさと農場」における自然体験が子どもの人間形成に及ぼした影響	44
8. 人間関係、そして「信大 YOU 遊広場」	50
－出会うことができた人から学んだこと－	
9. 農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力	56
－「信大茂菅ふるさと農場」の実践分析－	
10. 教材としての農業	61
11. 農業体験から学んだこと－子どもたちとのコミュニケーション－	66
12. 素敵な自分になるために－茂菅ふるさと農場での思いから－	70
13. 教育学部学生と地域の高齢者との継続的な交流体験活動の実践	74
－「信大茂菅ふるさと農場」における学生と高齢者との協働によるカリキュラム 開発－	
14. 5年目の「信大茂菅ふるさと農場」の実践記録	85
15. 食の安全と教育	99
16. YOU 遊フェスティバルと学生シンポジウムに参加して	101
出典一覧	103
掲載新聞	104
執筆者紹介・あとがき	106

# 1. 「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」の創設

—「生活科」と「総合的な学習の時間」の研究開発をめざして—

教育学部 土井 進

## 1. 「総合・生活科教育分野」の誕生と新しい授業科目の開設

平成 11 年度に教育学部は、「臨床の知」の理念を核とする新しい教育体制に改組され、学校教育教員養成課程に「総合・生活科教育分野」が新設されることになった。この分野への所属は、教育実践科学専攻、社会科学教育専攻、そして理数科学教育専攻に入学した学生の中から、希望に基づいて 2 年次に配属される。この新設分野を選択した第 1 期生 18 名が、平成 12 年度に意気揚々として長野キャンパスに進学してきた。この学生たちに用意されたカリキュラムは次の通りである。

○総合・生活科教育分野科目として開設される授業

「自然体験研究特講」「自然体験研究演習」「生活科指導法基礎」「生活科・総合学習思潮論特講」「生活科・総合学習指導法特講」「生活科・総合学習指導法演習」「授業構成法・総合学習特講」「感性教育論・総合学習特講」「教育方法学・総合学習演習」「地域環境と生活・情報Ⅱ」「地域研究演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「特別活動の理論と実践」「社会基礎」「理科基礎」「家庭生活基礎」「木材工作実習」「栽培基礎」「情報教育方法基礎」「異文化理解基礎」「小学校英語」「野外活動概論」

○総合・生活科教育分野選択必修科目として開設される授業

「生活基礎」「自然体験概論」「地域環境と生活・情報Ⅰ」「教育方法学・総合学習概論」「自然体験実習」「社会体験実習」「教育実践史概論」「教育課程概論」

## 2. 「自然体験研究特講」と「自然体験研究演習」の開設

前期に開講した「自然体験研究特講」には 39 名が受講し、後期の「自然体験研究演習」には 42 名が受講した。この授業は、学生が地域の子どもたちと一緒に農作業を体験することを通して、生活科や総合的な学習の時間の実践力をつけていくことをねらいとしている。授業時間は、農作業の特性を考慮して、通常的时间割には位置づけないで、放課後や土曜、日曜日に集中して行った。

休耕田を授業用に斡旋して頂くために、平成 11 年 8 月に初めて JA 長野中央会を訪問した。その後、二度、三度と相談を重ねることによって、平成 11 年 12 月に「JA ながの」の営農指導員が担当者として決まった。この営農指導員にお願いしたことは次の 2 点であった。

- ① 農場の場所は、学生が放課後（4 時半ごろ）から作業を行うことができるように、大学キャンパスから自転車で通える距離にあること。
- ② 農場のある地域の子どもたちと一緒に農作業に取り組みたいので、できるだけ機械を使わないで、手作業で仕事をすすめる方法をとること。

この願いを満たしてくれる遊休農地を斡旋して頂いたのは、平成 12 年 3 月であった。大学キャンパスから自転車で 10 分ほどの距離にある、長野市茂菅地区の水田 3 アールと畑 3 アール



で、この土地を我々は「信大茂菅ふるさと農場」と命名した。農園ではなく農場としたのは、農場を人間形成の道場と捉えたかったからである。また、この農場での作業に汗を流した学生や子どもにとっては、この場所こそが人間形成の核となる原体験の場所となり、ふるさとになると考えたからである。数年間放置されていたため、雑草や雑木が生い茂った荒地が、学生たちの開墾によって生活科と総合的な学習の時間の研究開発の農場として蘇生したのである。また、この農場が国際協力田となったことにより、アフリカのマリ共和国ともつながることになった。この農場で学生たちは稲、じゃがいも、さつまいも、トマト、トウモロコシ、かぼちゃ、すいか、大根、野沢菜などを栽培した。

### 3. 教育学部と JA（農協）との連携

教育学部は、生活科や総合的な学習の時間のためとはいえ、地主から直接農地を借り受けることはできないので、JA（農協）を介して借りることになった。4月当初に教育学部長名の次のような依頼文書を届けた。

JA 長野中央会総務企画部企画開発課長 殿  
ながの農業協同組合代表理事組合長 殿  
牟礼村ふるさと振興公社常務取締役 殿

信州大学教育学部長  
藤沢 謙一郎

「自然体験実習について」（依頼）

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素から、本学部の教育・研究につきましては、種々ご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、本学部総合・生活科教育分野では、自然体験実習を取り入れた「総合的な学習の時間」の指導ができる力を身につけるために、田・畑・山林を活用したさまざまな農業体験を経験する場として、貴施設での自然体験実習を計画しました。

つきましては、下記のとおり実施したいのでよろしくお願いいたします。

敬具

記

1. 参加学生      自然体験研究特講（前期 集中）  
                    自然体験研究演習（後期 集中）  
                    上記科目履修学生    約 50 名
2. 指導教官    和 田 清（総合・生活科教育分野 主任・教授）  
                    土 井 進（附属教育実践総合センター・教授）
3. 実施期間    平成 12 年 4 月～平成 13 年 3 月
4. 実施場所    貴指定の圃場（信大茂菅ふるさと農場、信大牟礼ふるさと農場）
5. 問い合わせ・連絡先    〒380-8544 長野市西長野 6 の口  
                                信州大学教育学部  
                                担当教官（土井進）  
                                TEL/FAX 026-238-4245

#### 4. 農作業体験の子どもさん募集！

—信大のお兄さん・お姉さんといっしょに楽しもう—

我々の農場が茂菅地区に誕生することになったので、この農場での具体的な活動や体験は地元の子どもたちに還元するのが一番ふさわしいと考えた。茂菅の子どもたちにとって、身近な田んぼや畑で大学生とともに農作業に取り組んだ経験は、必ずや「自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせる」きっかけになるに違いない。

そこで地元の子どもを農作業に誘うにはどうすればよいか、学生代表とともに茂菅子ども会育成会の役員が集まっている会場に相談に出向いた。保護者は子どもたちに農作業体験をさせることに異口同音に賛成してくれた。そこで各家庭に育成会を通して次のような呼びかけのチラシを配布した。

.....

私達は、信州大学教育学部に学ぶ学生です。私達は田んぼや畑に入る機会の少なくなった現代の子どもたちといっしょに農作業に汗を流し、地域の方々と世代を超えた交流をする場をもちたいと考え、茂菅地区に水田と畑をお借りして3月から準備を進めてきました。

農業知識の乏しい私達ですが、このたびJAながの、JA 長野県青年部協議会のご指導ご協力により、『信大茂菅ふるさと農場』を開設することになりました。この農場で私たち学生といっしょに農作業体験に汗を流して下さるお子さんを募集しますのでよろしくお願い致します。

##### (1) 活動の主旨

- ① 我が国では、子どもたちが農作業の手伝いをしている姿や田畑で遊んでいる姿が見られなくなって久しくなりました。私たちは、子どもたちどうし、また、お兄さんお姉さんと子どもたちが、外での農作業体験を通してふれあっていく機会を作りたいと考えました。
- ② 大地に働きかける農作業に取り組み、自然の中で作物を育てることの苦労や喜びを実感したいと思いました。また、地道な土づくりの大切さを通して、人づくりに関わる教師としての力量形成に取り組みたいと考えました。

##### (2) 参加申し込み

- (1) 対象…茂菅子ども会育成会に加入しているお子さん
- (2) 年会費…300 円(郵送代) 初回の参加時に納めてください。
- (3) 傷害保険…育成会で加入している保険が適用されます。作業中は、信大生スタッフがお子さんの安全には十分配慮します。

.....

この呼びかけに対して 38 名の育成会員のうち 20 名（保育園児 5 名，2 年生 3 名，3 年生 4 名，4 年生 4 名，5 年生 2 名，6 年生 2 名）が応募してくれた。

9 月 30 日の稲刈りに参加した 1 年生の母親から、「6 月に田植えをしてからというもの、娘は稲のことが気になって気になって、外出の帰りには必ずといっていいほど田んぼや畑の様子を見に来ていました。楽しみにしていた今日の収穫、とても良い経験ができました。」というはがきが届いた。



## 5. 「信大牟礼ふるさと農場」の開設と地元の子どもの募集

牟礼村は長野市の北に隣接する人口約 7800 人の農村である。村では高齢化などにより農作業ができない方にかわって耕作したり、農産物の加工・販売を行う機関として、牟礼村ふるさと振興公社が数年前に設立された。学生代表とともにここへ3度足を運んで「自然体験研究特講・演習」の授業の趣旨を語り、じっくりと聞いていただいた。3度目によりやく受け入れて頂き、飯綱東高原（海拔 803 メートル、信州大学教育学部から車で約 35 分）の現地へ案内していただくことができた。そこは雑木林を開拓して開かれた 80 アールもある広大なそば畑で、地主さんの高齢化により振興公社に委託された土地であった。学生たちと広大な土地を目の前にした時、感動がこみあげてきた。そして、ここから学生とともに生活科と総合的な学習の時間のための研究開発を始めるぞ！という闘志が湧いてきた。しかし、80 アールという広さは手作業で行うにはあまりにも広過ぎたので、とりあえず初年度は 20 アールをお借りしすることにした。

「信大牟礼ふるさと農場」に地元の子どもたちを迎えるための協力をお願いするために、平成 12 年 5 月に牟礼村教育委員会教育長、牟礼東小学校と牟礼西小学校の校長先生に牟礼村ふるさと振興公社にお集まりいただいた。そこで検討していただいた次のチラシを2つの小学校を通して家庭に配布した。

「信大牟礼ふるさと農場」開設！―農作業体験の子どもさん募集！―

主催：信州大学教育学部「自然体験研究特講・演習」

共催：牟礼村ふるさと振興公社 後援：牟礼村教育委員会

### (1) 開設の主旨

「信大牟礼ふるさと農場」の内容と共通するので省略する。

### (2) 活動のねがい

畝づくり、そばの種まき、草取り、収穫、そば打ちなどの継続性を持った農作業を活動の中心とし、これにオリエンテーリング、ウォークラリー、バーベキューなど牟礼村の特性を生かした体験活動を取り入れていきたいと考えています。そして、この活動が新しい友達と出会う場となり、3世代の人々のふれあいの場となることを願っています。

### (3) 活動や体験の内容

第1回目 7月13日（木）15:00～17:00 畝作り、そばの種まき

第2回目 9月10日（日）9:30～12:00 そば畑の草取り、花見

第3回目 10月14日（土）9:30～14:00 そばの収穫、野外ゲーム

第4回目 12月16日（土）9:00～12:00 そば打ち、試食会

.....

この呼び掛けに対して牟礼東小学校と牟礼西小学校の児童合わせて約 500 名の中から 23 名の応募があった。内訳は1年生4名、2年生7名、3年生2名、4年生2名、5年生3名、6年生1名、そして幼稚園児4名であった。

そばの種まきをした後に、2年生の女子から「このまへは、いっしょにたねまきしてくれてありがとうございました。こんどきれいな花のさくころまたあえるのをまっています。」というはがきが届いた。また、草取りの後には2年生の男子の母親から、「先日のそばの花見と草取りでは大変お世話になりました。とても楽しかったようで、帰るなり『そばとお米とどっちが



古いでしょう?』と質問攻めにあったのに始まり、『50メートルも草取りをやったよ』『競争して速かったよ』『なしをもらったよ』等々、真っ黒い身体のままうれしそうに話してくれました。

『10月には刈取りするんだよ!また行くんだ!』と次回も楽しみにしています。またよろしくおねがいたします。」というはがきが届いた。

## 6. 土づくりによる人づくり

我が国は、これまでの30年~40年の間に産業構造が劇的に変化し、便利で豊かな社会を迎えている。その反面、人間形成にとって大事な原体験となる「自然体験」と「社会体験」の場が、子どもたちの生活から遠のいてしまった。「総合・生活科教育分野」の科目として誕生した「自然体験研究特講、演習」の授業では、教官と学生が「師弟同行、師弟共育」の精神で、土づくりによる人づくりの実践に取り組んでいきたいと願っている。



▲脱穀作業を終えた「自然体験研究演習」の受講学生

## 2. 「信大茂菅ふるさと農場」における「生活科指導法基礎」の授業実践

教育学部 土井 進

### 1. はじめに

本学部の改組にともなって平成11年度に「総合・生活科教育分野」が誕生した。それにともない平成12年度に「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」を創設し、生活科と総合的な学習の研究開発をめざすことになった経緯については、本共同研究報告書の創刊号において述べた。本稿においては、平成13年度から15年度までの3年間の「信大茂菅ふるさと農場」における「生活科指導法基礎」の授業実践について報告することにした。

筆者は、平成12年10月1日付で信州大学教育学部附属教育実践総合センターから同学部教育科学講座に移籍し、「生活科指導法」の授業を本務とすることになった。これまでは実践センター専任教官としての職務を本務として「総合・生活科教育分野」にも参画していたのであるが、今度は教育科学講座において「生活科」を本務として「総合・生活科教育分野」に参画することが求められることになった。この時から筆者の授業スタイルは、背広ネクタイから作業服・長靴へ、授業方法は教室での講義から田畑での活動へと一変した。



### 2. 生活科の目標の核心にふれる体験的授業の必要性

社会教育主事補として4年間、中学校社会科教師として14年間の教育実践研究を基盤として、平成5年度～8年度に「生活科教育法」の授業を3コマ分担する機会を得た。これが筆者の「生活科」との出会いである。この時に実施した授業内容は、生活科の年間指導計画の作成、生活科マップの作成、生活科の授業実践例の紹介等であった。このような机上の講義では、学生に生活科に関する知識を与え、優秀なレポートを作成することができる学生を育てることはできても、自ら汗を流し、泥まみれになって生活科を実践してみようという意欲のある学生を育てることはできなかった。そこで、生活科を本務とすることになったのを契機に、従来の座学中心の指導方法を改め、学生とともに田畑に出て様々な活動に取り組み、生活科で身につく力はこれだ！と実感できる、生活科の目標の核心にふれることのできる授業へと一大転換を図った。



### 3. 大地自然に関わる活動を通して人と人とがつながる喜び

我々は、小学校低学年の国語の漢字学習において、子どもたちが今、漢字を身につけることは生涯の基礎になるという強い確信をもって指導に臨むことができる。同じく、算数の足し算引き算の学習においても、生きる力の基礎になるという確信をもって指導にあたることができる。このような確信を生活科の指導においても抱くことができれば、我々の生活科実践への情熱は尽きることはない。生活科を本務とする覚悟を決めたとき筆者の脳裏に浮んだことは、「もっこかつぎ」の場面であった。

小学校低学年の頃であったと思われるが、水はけのよくない田んぼの改良に取り組んでいた父に頼まれて、「もっこ」に石の載せ、天秤棒の前をかついで手伝ったことがあった。この作業体験したとき、父の気持ちが天秤棒を伝って電流のごとく流れ通ってくるのを覚えた。

そうだ！まず学生たちが教室を出て長靴に履き替え、鎌や鍬などの小学生が扱う道具をもって、身近な大地自然に働きかける。その活動のなかで学生どうしがふれあい、気持ちと気持ちが伝わりあう喜びを実感することができれば、その喜びのなかに「生活科とは何か」「なぜ重要なのか」「なぜ自立への基礎となるのか」等の問いに対する答えを自得することができ、生活科は生涯の基礎になるという確信をつかむことができるのではなかろうか。

このように考えて、学生とともに3年間にわたって「生活科指導法基礎」の授業において、「信大茂菅ふるさと農場」の田起こし、田植え、田の草取り、縄ない、鎌研ぎと草刈りなどの活動に取り組んできた。活動に支障をきたさないように長靴や鎌、鍬、三又、軍手などの道具は、一人ひとりの学生に行き渡るように50ずつ取り揃えた。また、50人ずつのクラスを前期に3コマ、後期に3コマ開設して学生のニーズに応えようと努めた。

### 4. 自然体験、社会体験の共有による社会形成力の育成

「生活科指導法基礎」の授業の最終回となる15回目に、この授業を通して体験した様々な活動のなかで、最も心に残ったことを一つ取り上げ、その人間形成的意義について考察させることにしている。学生が取り上げる最も印象深い活動のひとつに「信大茂菅ふるさと農場」での活動がある。例えば次のような考察がなされている。

「私は新潟県出身のため田んぼは見慣れていたが、実際に田んぼの中で活動するのが今回が初めてだった。田起こしの作業はとても大変だった。まず、田んぼまで20分近く三又をかつぎ、長靴を履いて歩かねばならなかった。田んぼに着くと三又を振り上げて固い土を掘り起こした。10分間もすると息があがり、汗びっしょりになった。この田起こし作業は大変な労力であったが、その大変さに意味があったのだと私は思う。今は、ほんの少しの距離でも車で移動し、田んぼの仕事もほとんど機械ですまされているため、私たちは自分で苦勞するということがとても少なくなっている。そのために我慢ができなかったり、物を大切にできなかったりすることが若い世代の問題になっている。私は農場まで20分自分で歩き、40分間鍬を振り下ろして田を起こし、そしてまた20分間歩いて帰ってくるという体験を通して、忍耐力と集中力の大切さを痛切に感じた。」

「最も心に残ったのは田植えです。一緒に田植えをしている人を見たときの感じ方が違ってくるのです。自分と関係が少なかった人とも世界が近く感じられるようになり、自然とあいさつや話が出てくるのです。たくさんの人を理解できるようになるというか、心が広くなるというか、そんな感じです。また、実際に田植えをしてみると、普段何気なく食べているお米が、



実は大変な苦勞を重ねてできているものだと知り、お米に対するありがたみというか、大切に  
する気持ちが生まれてきました。」



「茂菅での活動で何が印象に残っているか」というと、地域の人々の働く背中である。隣の田んぼで一人で黙々と草を刈るおばあさんの背中が、本当に印象深い。あのおばあさんが生きてこられた長い人生のなかで、多くの日をあのようにして過ごしてこられたのだろうと思った。そして同時に、今いっしょに暮らしている自分の祖母のことを思った。私が成長するなかで、祖母はいつも変わらず、私に背中を見せて作業をしてきた。その場面に言葉は一つも介在しないが、言葉以上のものを私は学んでいたのだということを、茂菅の農場で初めて気づいた。人生の大先輩が日々コツコツと仕事をする姿を見て育つことは、子どものこれからの長い人生において、きっと影響を与えらると思う。私の場合も、祖母から「鎌の扱い方」という身近な技術から、「毎日続けること」「生きがい」という人生の重大事に至るまで、多くのことを学んでいるのだと思う。」

このように「信大茂菅ふるさと農場」での活動を通して、人と人がつながる喜びを味わうことができる場所に、生活科の目標の核心が凝縮されているのではないかと考える。この喜びを味わった学生は自分なりに生活科を実践していく意欲と自信を身につけているのではなかろうか。生活科の活動は、人間関係を築き、社会形成力を培う上で重大な可能性を秘めているといえよう。

#### 【参考文献】

- 土井 進「学生が生活科の目標の核心にふれる大学での体験的授業をめざして」『信州の生活科実践誌 ふるさと大地』第7号 pp.6-7 信濃教育会 平成16年1月
- 鹿子木愛「農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力—信大茂菅ふるさと農場の実践分析—」『第2期信大YOU遊広場の実践—臨床の知を求めて—』 pp.198-202 信州大学教育学部 平成15年3月
- 相磯素子「信大茂菅ふるさと農場における自然体験が子どもの人間形成に及ぼした影響」『第1期信大YOU遊広場の実践—臨床の知を求めて—』 pp.175-180 信州大学教育学部 平成14年3月

### 3. 環境教育としての総合演習

#### —「信大茂菅ふるさと農場」における「米づくりと人づくり」の実践—

信州大学教育学部 土井進

#### 1. 「信大茂菅ふるさと農場」での体験学習を取り入れた総合演習

小中学生が農作業を手伝っている姿や田畑で遊んでいる姿を見ることがなくなってから久しい。現在の大学生も例外ではなく、大地を耕し、種をまき、作物を育て、収穫の喜びを実感したという体験をもっている学生は皆無に近いといっても過言ではない。

そこで、信州大学教育学部では授業科目「社会体験実習」（通年，2単位）において、JA ながのから休耕田を借り受け、「信大茂菅ふるさと農場」（水田3アールと畑3アール）を2000年4月に開設した。この農場で大学生と小中学生が農作業体験の苦勞をともに味わいながら、思いっきり働き、思いっきり楽しんで、地域社会に根差した「生きる力」を発揚する人間形成の場としたいと考えた。この考えに賛同した学生たちが主体的に参加して「信大YOU遊世間（ワールド）」運営委員会が発足した。この学生組織とJA ながの、そして地元農家の3者の協働によってこの農場を運営していくことになった。

この農場を現代の学生たちの自然体験、社会体験の貴重な場とするために、運営方針として次の5点を掲げている。

- ① 草刈や稲刈りは鎌で行い、田起しは鍬で行う。手作業による労働に打ち込むことによって、学生が農作業の苦勞を体感する。代掻きと脱穀には地元農家から耕運機と脱穀機の応援をしていただく。
- ② 完全無農薬、有機肥料栽培を実践することによって、農場に生態系を取り戻し、ビオトープをつくる。有機肥料を得るために刈りとった草を堆肥化する。また、大学生協の食堂からでた生ごみも堆肥化する。
- ③ 米づくりのための田植え、稗とり、稲刈り、脱穀作業とじゃがいも、さつまいもの植え付けと収穫作業は、学生、子ども、保護者、JA ながの、地元農家が協働で仕事をする。
- ④ 「信大茂菅ふるさと農場」を国際協力田に位置づけ、お米60キログラムをJA ながのを通してアフリカのマリ共和国に送る。この実践を通して環境教育の本質を端的に表現した“Think Globally, Act Locally.”（地球規模で考え、足元から行動する）を実感する。
- ⑤ 農作業に汗を流した子ども、大学生にも大地からの贈り物としてお米を少しずつ配布する。残ったお米は、クッキング隊の学生によっておむすびにし、農作業の日の昼食にあてる。

このような運営方針のもとに大学の授業における自然体験、社会体験の場として活用してきたのであるが、この取組は農場という土壌環境と作物栽培労働との関係を認識さ



せる環境教育の一領域としても捉えることができる。そこで、平成 16 年度の「総合演習」として環境教育の視点から「米づくりと人づくり」の実践に取り組むことにした。

## 2. 農作業体験のもつ人間形成的意義

「信大茂菅ふるさと農場」での 5 年間の実践を通して、農作業体験が子どもや学生の人間形成にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることは我々の大きな関心事であった。農作業を終えた後に子どもたちが描いた絵日記と保護者へのアンケート結果をもとに、農作業体験のもつ人間形成的意義には、次のようなことが考えられると思う。

### ① 土とのふれあい、生き物とのふれあいによる豊かな感性の育成

田んぼや畑には、子どもたちの興味や関心を引き出す様々な生き物が生存している。子どもたちは自然のなかで出会った生き物に心を動かし、興味や関心を抱いた生き物に積極的に関わろうとする。田植えをしながら水生昆虫を捕まえる姿、稲刈りが終わったあとの田んぼで蛙やバッタを夢中で追いかける子どもの姿が、生き生きとしていた。天地自然というものは確実に何かを感じさせてくれる。子どもたちが夢中になって、五感で土とふれあい、生き物とふれあい、田んぼの風景を感じることで、豊かな感性が培われていくと考えられる。言い換えるならば、土とのふれあい、生き物とのふれあいによって、子どもたちは天地自然のもつ力強さ、エネルギーを体感していると考えられる。

### ② 様々な人々とのふれあいによる人と人がつながる力（社会力）の育成

「信大茂菅ふるさと農場」での作業には同年齢の子どもはもちろん、異年齢の子どもや大学生、地域の方や JA の方が参加している。このような多世代の人が一緒になって行う農作業の場面では、年上の子が年下の子の面倒をみる姿や、年下の子が年上の子に追いつこうと真似をする姿が自然に見られるようになる。また、地域社会の人たちも若い者を育てようという温かい目で見守り、関わってくださる。絵日記にはその子に関わってくれた人が複数描かれていることが多い。また、保護者から寄せられたアンケートによれば、子どもたちは友達や大学生と会えることを楽しみにしていて、家庭でもそのことを親に話しているようである。子どもたちは様々な人たちとの協働で成し遂げられていく農作業を通して、人と人がつながって物事を成し遂げていくことの喜びと充実感を味わっているものと考えられる。また、一つの鎌をみんなで使うことを通して我慢することや譲ることの大切さなどの社会性も自然のうちに学んでいるものと思われる。

### ③ 米づくりに関わることによって食べ物への感謝の念が生まれる

子どもたちは 5 月から 10 月まで継続的に米づくりに関わったことによって、お米に対する意識に変化がみられた。保護者のアンケートによれば「ご飯のとき、白い米だけの味を味わうようになった。ふりかけなどをかけずにおいしそうに食べるようになった」、「食事のとき、おちゃわんについている米粒を残さずきれいに食べるようになった」など、38 パーセントの保護者が子どものご飯に対する意識に変化が見られ、食べ物への感謝の念が生



まれてきていると述べている。

#### ④ 克己心の陶冶

わが国最初の農学博士となった新渡戸稲造はその著『農業本論』（明治 31 年）において、貝原益軒など近世の農学者が農の徳について述べていることを総括して、「天地偽らず、農は天地に交わる事近し。故に農は偽らず。」<sup>(1)</sup>とまとめている。我々が天地自然を相手にする農の営みに参画するということは、いや応なしに天候に合わせ、作物の成長に合わせて毎日黙々と取り組まざるを得ず、そこに自ずと勤勉さ・謙虚さ・忍耐力などの克己心が陶冶されていくのではないかと考えられる。また、天地自然の恵みである食物への感謝の念も深まると考えられる。

### 3. 総合演習「米づくりと人づくり」の実践計画

本学部では教職科目「総合演習」を 2 年次の前期、水曜日の 3 コマ目に開講し、教員が 1 年ごとに交代する方法で実施してきている。平成 16 年度は 21 コースが開設されることになり筆者もその一人となった。そこで、この機会に前述の「信大 YOU 遊世間」運営委員会、JA ながの、地元農家と連携して運営している「信大茂菅ふるさと農場」を、「総合演習」の場としても活用し環境教育の視点から取り組んでみたいと思い「米づくりと人づくり」をテーマとして掲げた。筆者が受講学生と共に師弟同行で米づくりに取り組む体験的学習を通して、学生が将来「総合的な学習の時間」（以下「総合的学習」という）の授業づくりに立ち向かう基盤となるものを習得してもらいたいと願った。このコースには最も多い 29 名が受講した。

15 回分の授業内容は次の通りである。

- 1 時間目・2 時間目 「総合的な学習の時間」のねらいと授業づくりについての講義
- 3 時間目・4 時間目 長靴を履き鍬を担いで「信大茂菅ふるさと農場」まで徒歩約 20 分、農場開設に至る経過説明を聞いたあと鍬による田起こし作業
- 5 時間目・6 時間目 JA ながのへ出かけ苗代作りの手伝い
- 7 時間目 地域の農家に耕運機による応援をしていただき田んぼの代掻き作業と田植えの準備
- 8 時間目 田植えを行う。7 班に分かれ班ごとに毎日稲の観察記録ノートをつける。
- 9 時間目 食の安全性向上への対策について、JA ながの営農指導員による講義
- 10 時間目・11 時間目 田んぼへ出かけ稲を観察しながら気付いたことを「課題」として受け止め、その解決のために自ら具体的に行動する。
- 12 時間目 飯山市の完全有機米農家に出かけ、稗とり作業を手伝いながら化学肥料を用いない農業哲学をお聞きする。
- 13 時間目 班ごとに各自が気付いた「課題」について報告しあい、発表会の計画をたてる。
- 14 時間目 茂菅のお米とじゃがいもによるカレーライスの昼食会と発表会の予行練習

#### 15 時間目 7 コース合同の「総合演習」発表会

本実践プログラムにおいては、総合的学習の生命である体験を通して、学生に栽培環境と作物の成長、ならびに人間労働を関係的に認識させることが期待できる。言い換えるなら体験と認識の融合をめざす「知の総合化」を図ることが期待できる。また、学生が「米づくり」という作物を育てる体験を通して、近年注目されている「食農教育」の本質に迫り、「米づくり」が「人づくり」につながっていることを自得してくれることが期待できる。以下に示す学生の観察記録ノートやレポートには、栽培環境である農場に対する思いや稲に寄せる愛情、そして労働の大変さへの実感が遺憾なく記述されているといえよう。

#### 4. 学生の観察記録ノートに記された「課題」へのコメント

総合的学習においては、体験活動を通して子どもたちが自ら「課題」に気づき、それを解決するために自ら考え、判断し、「課題」を解決していくという学び方を身につけることが重要である。米づくりに取り組む総合的学習においては、「田植え」と「稲刈り」という始めと終わりの体験だけでなく、途中の稲の生育過程に関わる様々な体験を継続的に取り入れてこそ子どもたちが自ら「課題」を発見するチャンスが訪れてくる。「総合演習」の授業においても学生が米づくりに関わる様々な体験を通して、どのような「課題」に気づき、どのように考え、どのように解決していこうとしているのかを教師が把握していけないと授業を深めていくことができない。そこで8時間目以降は29名を7つの班に分け、班ごとに観察記録ノートを1冊ずつ配り、毎日田んぼと稲の様子を観察させ、そこから「課題」を発見させようとした。観察記録ノートは茂菅の田んぼにあるロッカーの中に保管し、筆者が毎日1回7冊のノートに目を通してコメントを書き、学生の意欲的な学びを励ますように努めた。

##### (1) ホウネンエビの発見と草刈りの実行

6月24日(木) 晴れ 雲一つない空 稲の背丈 35.8cm 1日で1.5cm 伸びていてビックリ!! 稗の取り残しがまだ目立つ。輝かしい日に照らされて旭山の緑は昨日より濃く見えた。朝の空気は澄んでいて、日差しは強いが涼しく感じた。そんなさわやかな一日のスタートだ。稲に語り掛けていると田んぼの中に不思議な生物発見! カブトエビやホウネンエビと呼ぶそうだ。クリクリお目目でワクワク、ヒョロヒョロと泳ぐ。赤い尾がcute! 工事現場のおじさんたちとのあいさつがすがすがしかった。

来週の課題は稗退治! 今日の一句「朝の空 ホウネンエビが 泳いでる」

(コメント) 実にすばらしい観察と表現力です! 稗退治をがんばってください。

6月25日(金) 雨 肌寒い 稲の背丈 37.2cm 今日久しぶりの雨でノートもびしょびしょ。旭山は霧が出て中国の山奥みたいだった。稲は一日ですさまじい成長を見せている。田んぼの中は濁っていてホウネンエビは見れなかった。田の周りのあぜの草がだいぶ伸びてきたので草刈りが必要。



今日の一句「しずく落ち 波紋広がる 稲田かな」

(コメント) 草刈りを課題として発見しましたね。

6月26日(土) 曇り 稲の背丈 39.2cm 今日気づいたこと。ホウネンエビが卵をもっていた。昆虫の交尾がさかん。稗がまた増えちゃった！二つ星てんとう虫がいっぱい。今日は草刈り実行！二人では大変だったけど曇りでやりやすい天気だった。楽しくできた(歌をうたいながら)。長野商業高校の野球部が近くのグラウンドで練習していて、夏の大会が近いなと高校時代を思い出した。ガンバレ高校球児！気づいたら 13 時だった。一日いても飽きない感じ。これからラーメンを食べに行こうかな。

(コメント) 一気に草刈りの課題をやり遂げたんですね。ご苦労様でした。ありがとうございます！

## (2) 稗とり大作戦

7月7日(水) 気温 36 度 水温 39 度 稲の背丈 65cm 今日日差しが強く、とても暑い。ジリジリしている。裾花川の水の音がいつそう涼しげに聞こえた。いつもは楽しみながら稗とりをしているが、今日は皆で徹底的に取ろうと決意してとても頑張った。頭が熱くなって、汗がだらだら出て、手がふやけてしまった。田んぼの水はお湯のようであった。3アールの田んぼ全部の稗を取るのには本当に大変な仕事だと実感した。取り終わったあとには通路ができていた。

(コメント) 本当にご苦労さまでした。皆さんの団結の勝利ですね。稲が大喜びしたことでしょう。ありがとうございました。

## 5. 総合演習「米づくりと人づくり」を受講した学生のレポート

筆者はこの実践によって初めて総合演習の授業づくりに取り組むことができた。米づくりに関わる様々な体験活動を通して学生が主体的に課題をつかみ、その解決に取り組む学習をどのように展開していけばよいかと試行錯誤しながらの授業展開であった。学生は環境教育としての総合演習を通して、将来「総合的学習」の授業づくりに立ち向かう上で基盤となるものを学ぶことができたのであろうか。授業後に提出されたレポートを通して考察したい。

### (1) 農作業の大変さを知る

「私はこの授業を通して初めて体験することが多くあった。私たちにとって身近な食物である米を、自分たちで一から育てることで稗と稲の見分け方など、様々な知識も学ぶことができた。また、大学の外に出て農作業をするだけでなく、JA や飯山市に行って農業に携わる方から直接はなしを聞いたり、そこで一緒に作業をしたりと、大学の中では学べないことを学ぶことができた。私は教育学部に入學してから授業で農作業をやるとは思ってもみなかったのが楽しかった。また、農作業は予想以上に体力を消耗し、農業の大変さを知った。また、毎日の稲の観察を通して、日によって田んぼの水温や水の中の様子が違っていることがわかった。稲がぐんぐん成長していく様子にも驚いた。私たちは普段稲が育

っている田んぼや精米されたお米を見ることはあっても、裸足になって田んぼに入ったりはしない。目で見ること大切だが実際に体験してみることはもっと大切だと思った。」

「私はまず、ありきたりですが農業の大変さを学んだように思います。今まで私は農業系のことをほとんどしたことがなかったので、夏の暑い日差しの中、草取りや田んぼの水の管理など、こんなにも大変なことだとは思ってもみませんでした。今は、農業も機械化の時代で以前よりは大変ではなくなったのかもしれませんが、それでも農家の皆さんは毎日作業をされていることがどれだけ大変なのかが分かりました。」

#### (2)生態系を作っている田んぼへの見方が変わる

「私はこの授業に参加して様々なものの見方が変わった。そして、「総合」の意味が少し理解できた気がしている。私は今、「米づくりと人づくり」の授業と一緒に参加した友達と出会えたことに大変感謝している。私は多くの友達と出会えたことで農業が好きになった。私の家は兼業農家なので農作業はどちらかというとやりたくないと思っていた。しかし、友達の意見を聞いているうちに農業の新たな一面を見ることができるようになった。当たり前前に思っていたことが当たり前ではない驚きを味わった。私にとって飯山での経験は、自然と人間関係を考える大きなきっかけとなった。私は飯山に行き田んぼそのものが生態系を作っているという考え方に初めてであった。人間のためだけの田んぼではなく、生き物全体の田んぼであると考え、田んぼの価値観が大きく変わった。」

#### (3)知の総合化の深さ、すばらしさを知る

「総合的学習の「総合」の深さ、すばらしさを知ることができた。「米づくりと人づくり」を通し、環境のこと、農業のこと、農協の役割、農業を営む人々、そして、自分についてなど幅広く学ぶことで生きる力になった気がしている。この体験は総合的学習でなければできない気がする。明日は実家に帰り、じゃがいも掘りの手伝いをしようと思う。楽しみにしている自分に少し驚いている。ありがとうございました。」

#### (4)作物栽培に継続的に関わることによって「課題」が発見できる

「この授業で何を学んだか。それは米づくりに限らず体験活動というのは、継続的に関わっていかないと課題を発見することも学ぶこともできないということが分かったことである。結果と過程の両方を学ぶことが大事なのだと今回の総合演習を通して気づいた。今後、学校教育の場で結果と過程の両方を学ぶ学習方法をどのように開発していけばよいかという課題を発見することができた。」

#### (5)農業とは大地という自然環境に人間が合わせること

「田んぼに何度も足を運んだ。稗とりをした。友達と話をした。先生が教えてくれた。雨が降った。竜巻による大雨に襲われ皆で肩を寄せ合って小屋に避難した。じゃがいもを収穫した。みんなでカレーライスを作って食べた。茂菅の田んぼや畑で私たちは何を学んだのだろう。先ず第一は、私達が稲や天候に合わせて動かなければならない。人間の思うようにはいかない。自然を相手にするというのはいかにということなのだと学んだ。第二は、自



分で問題解決をする生きる力とともに自然や他人と向き合い共に生きて行く力の必要性を学んだ。第三は、信州茂菅の自然の豊かさ、美しさをこの手とこの目で実感できた。」

#### (6) 稲に対する責任感が生まれる

「最初は米づくりと人づくりは結びつかないものだと思っていましたが、一緒に作業をしていく中で今まで顔は知っていても全く話したことがなかった人たちとも話すようになっていきました。これは「人の輪」をつくっていくことだと思います。普段私はほとんど同じ専攻の人たちとしか話す機会がありません。しかし、一緒に農作業をしていく中で共通の意識みたいなものが芽生えてきて、自然と仲間だと思えるようになりました。人づくりという面でもう一つ大きな成長もしたように思います。今まではどの授業があっても、授業中だけしか活動していませんでしたが、今回は授業時間以外でも田んぼを見に行ったり、稗を取りにいったりした、責任感のようなものが生まれてきたように思います。」

#### (7) 人と人がつながる社会力の向上

「私は総合演習を通して、人とのつながりを学びました。先生が授業の出欠をとっていたときに、「授業に来ていない人と連絡の取れる人はいませんか」とおっしゃいました。私はこの時なぜ大学生にまでなってそのように先生が学生が授業に来ていないことを気にするのだろうと思いました。大学生にもなれば授業に出る出ないは自己責任だと思います。しかし、先生は「このように連絡を取ってもらったのは、不登校児にも同じことが言えるからです。子どもが不登校になる原因の大半が教師の責任だと思います。学校を休むことは誰にでも少なからずあることです。学校を休んでもクラスの人たちとつながってさえいれば、学校を休んでいてもまた学校に来ることができます。仲間とのつながりが大事なのです」とおっしゃいました。私は先生のお話を聞いて、納得と感動と驚きを覚えました。このことは不登校にだけ言えることではなく、人間社会で生きていくうえでも必要なことだと思います。学校とは人間社会を凝縮し縮小したところであると思います。これから学校の先生になろうと勉強している私たちですが、人とのつながりという当たり前のことのようで、実はほとんどの人があまりその重要性に気づかずに教師になろうとしていると思います。教える側がこんなことでは不登校児は増える一方です。先生は総合演習での農作業を通して、人とのつながりをどのように築いていくかを実際に示したのではないかと私自身感じています。完全無農薬で化学肥料を使わない有機農法を営んでいらっしゃる飯山の農家やJAの方々など、地域社会の人たちとのつながりも持つことができました。」

「私がこの総合演習で最も印象に残っていることは、人の優しさです。5月の終わりごろから6月にかけてなんとなくやる気が出ず、授業に行かないことが多くなりました。そんな時、周りの友達に授業に来るように言ってくれました。このことがきっかけで、毎回きちんと授業に行こうと思えるようになりました。しばらく行っていなかったのが初めはなんとなく気まずかったのですが、次第に慣れ、目いっぱい農作業を楽しむことができました。あの時授業に来るように言われていなければこのような結果にはならなかったと思

ます。」

## 6. 総合演習「米づくりと人づくり」の成果と今後の課題

上述の学生の学びの様子から本実践プログラムの評価できる点として、学生が長野市茂菅の農場環境に対峙し、働きかけながら、自らの内的成長を促し、「ひと・もの・こと」への共感的理解を深化させていることがあげられる。また、学生が労働過程において「もの」や「ひと」に優しく関わりとともに労働生産を工夫し知恵を発揮するなど人間力を培っていることがあげられる。さらに学生は本実践プログラムにおいて、農作業の連続過程に関与することによって農場のもつエネルギーを実感するとともに、農場から計り知れない学習力や発見力、自己実現力といったパワーを触発されていることが成果としてあげられる。これらの成果は、学生が農作業を終え、道具の後片付けが終わってから農場に向かって一礼してから帰る姿に象徴的に表れていると思われる。

本稿においては総合演習に取り組んだ 29 名の学びを中心に考察したが、今後はこの 5 年間に「信大茂菅ふるさと農場」の運営に関わってきた学生 125 名、「生活科指導法基礎」の授業で農作業を体験した 875 名の学生のレポートを分析することによって、「信大茂菅ふるさと農場」における教育実践の人間形成的意義と効果について検証していきたい。

(注 1) 新渡戸稲造「農業本論」『新渡戸稲造全集』第 2 巻 p.325 教文館 昭和 44 年  
参考文献

佐島群巳著『環境教育入門—総合的学習に生かす—』 国土社 1999 年 9 月

土井進「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設—生活科と総合的な学習の時間の研究開発をめざして—」『学部・附属共同研究報告書』pp.211-215 信州大学教育学部 2001 年 3 月

海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義—信大茂菅ふるさと農場での実践を通して—」『教育実践研究』 pp.123-132 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 No.2 2001 年 7 月

志村昌之・土井進「農作業における子どもの体験と学びを結ぶ支援—信大 YOU 遊プラザに見る学生の実践—」『教育実践研究』 pp.97-106 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 No.3 2002 年 7 月

相磯素子「信大茂菅ふるさと農場における自然体験が子どもの人間形成に及ぼした影響」『第 1 期「信大 YOU 遊広場」の実践—臨床の知を求めて—』pp.175-180 信州大学教育学部 平成 14 年 3 月

鹿子木愛「農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力—信大茂菅ふるさと農場の実践分析—」『第 2 期「信大 YOU 遊広場」の実践—臨床の知を求めて—』pp.198-202 信州大学教育学部 平成 15 年 3 月



〈実践報告〉

4. 学校や地域社会における農作業体験学習の意義  
－「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して－

海沼正典 更埴市立八幡小学校

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

A Consideration on the Vision of Agriculture Education  
in Elementary and Junior High Schools

KAINUMA Masafumi: Yawata Elementary School, Koshoku City

DOI Susumu: Faculty of Education, Shinshu University

In order to assist educators in improving or developing contemporary, comprehensive curricula in the field of agricultural education, we will introduce part of our experimental agricultural education program at Mosuge School farm. Agriculture teaches student not only how to grow plants, but also how to cooperate in groups. The practice of integrated studies is widely spreading now in Japanese schools, so there is more call and time available for agricultural studies than ever before. As educators, we need to assist students in better understanding agricultural concepts and their application to agriculture. It is our hope that educators can, with the aid of this plan, achieve this purpose.

【キーワード】信大茂菅ふるさと農場 農作業体験学習 オーナー制 グループ制

1. はじめに

筆者は平成12年度に長野県教育委員会から内地留学生として信州大学教育学部に派遣され、農作業体験学習を「総合的な学習の時間」に取り入れるためのカリキュラム開発について研究した。本稿では農作業体験学習のもつ人間形成的意義と実践にあたって配慮すべき点について、「信大茂菅ふるさと農場」での初年度の実践を通して考察する。

2. 農作業体験学習

2.1 農業と教育

先ず、農業及び農業教育の学問上での広がりを見てみたい。我々の住む自然界においては、太陽のエネルギーを利用した光合成によって成長した植物は植食動物の餌となり、植

食動物は肉食動物の餌になる。そして、植物、動物の死がいや排泄物は土壌微生物の餌になり、土壌微生物の分解作用でできる無機養分は再び植物に利用される。即ち、太陽の光エネルギーを土台にして様々な物質が規則正しく循環している。農業は本来このような循環の中で行なわれる営みのことであって、また英語の“agriculture”は、作物に不可欠な養分や水分を供給する土を中心として発展した学問である。従って、我々の命を養う根源的な使命を背景に、この分野の論文やレポート類はこれまでに数多く発表されていて、教育関連の最大データベースを有する米国連邦立 ERIC (the Educational Resources Information Center)でも、様々な角度から農業についての資料を探ることができる。

一方、農業教育“agricultural education”は比較的未開拓の分野であるためか、ERIC シソーラス上に大きな広がりは見られない。しかし、関連した論文や記事が同名の学術雑誌からデータベースに取り上げられている事実もあり、その重要性は十分認知されていることがうかがえる。

## 2.2 国策としての農作業体験の推進

では、国のレベルで農業教育はどのように扱われているのだろうか。次はインターネットで各省庁のホームページより該当する箇所をピックアップしたものである。

【文部省（現在の文部科学省）】

中央教育審議会答申

21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）

平成 8 年 7 月 19 日

### 第 3 章 これからの地域社会における教育の在り方

#### (1) これからの地域社会における教育の在り方

##### (自然体験活動の推進)

子供たちに、自然の中における様々な生活体験や自然体験などの機会が不足している現状を考えると、農作業体験、野外活動や環境保護活動など、子供たちに豊かな自然に触れさせ、自然に対する理解や愛情を育てるような子供・親子向けの事業を充実させることは、今日極めて重要なことである。

2000 年 12 月

新しい時代における教養教育の在り方について

（中央教育審議会 審議のまとめ）

#### 1. 生涯にわたる教養教育

少子化や都市化の進行、また、高度情報化の影の部分としてのいわゆる仮想現実感（バーチャルリアリティ）の肥大などの中で、人間や社会、自然を直接体験する機会が減少してきていると言われる今日、そのような機会を社会全体で教育的配慮の下に人為的に作り出していくことが必要である。子どもが自らの血となり肉となる教養の基本を身に付けていくことができるよう、学校、家庭、地域の連携の下に、自然体験や社会体験、奉仕体験



を含めた様々な体験活動を充実しなければならない。

【農林水産省】

平成 11 年度 食料・農業・農村の動向に関する年次報告

平成 12 年 4 月

第 1 部 食料・農業・農村の動向 概要

第 I 章 食料の安定供給確保

第 1 節 我が国の食料消費・食生活

(3) 子ども達の「食」を考える

④ 心身の発育段階にある子ども達にとって、毎日の食事は、栄養摂取の面で重要であるばかりではなく、将来の食習慣の形成や健康維持、食文化の継承等にも大きな影響を与える。子ども達の「食」に関する関心を高め、知識を深めるため、農作業体験や調理体験等、子ども達自身の経験として身に付けられるよう各般の取組みが必要。

⑤ 子ども達に対する食教育については、関係省庁間の連携や関係機関、家庭、地域等との連携により学校教育の場はもちろん、それ以外の場においても積極的に推進することが重要。

また、栄養や健康面、「食」についての学習だけではなく、農業や「食」に関係する流通・加工業の大切さや、農業体験・生産体験といった実際の体験をととして働くことの大切さ等を教えていくことが必要。

第 III 章 農村の振興と農業の有する多面的機能の発揮

第 3 節 農村の総合的な振興

3) 都市と農村との交流等の促進

ア 都市と農村との交流

① 国民の意識が「物の豊かさ」から「ゆとり」や「やすらぎ」といった「心の豊かさ」に重きを置くようになるなか、都市と農村との交流が活発化。

しかし、目的と効果にギャップがみられるなど、交流活動の運営には多くの課題が存在。

② 都市と農村との交流については、国民の農業や農村に対する理解を深め、健康的でゆとりのある生活の実現に資する取組みとして、一過性ではない長期的観点に立った活動が必要。今後は、都市住民のニーズを踏まえた魅力ある地域づくりに向け、ソフト・ハード両面からの条件整備が必要。

イ 農業体験及び農業体験学習

① 人格形成期にある子ども達の自然体験は、豊かな心を育み、道徳観・正義感を身につけさせるものとして教育の場においても情操教育の面から注目。

② 農業体験は、貴重な自然体験となるばかりではなく、子ども達の農業に対する理解の醸成や将来の担い手確保の観点からも重要な取組みとして期待。文部省や関係機関との連携のもと、積極的な農業体験機会の設定や体験内容の工夫等、取組みの一層の充実が必要。

以上見たように、当然のことではあろうが、文部省（文部科学省）より農林水産業のほうが一歩踏み込んだ表現を用いて、農業・農作業体験を奨めていることが分かる。しかし、いずれにせよ生命の尊さを忘れてしまったかのような殺伐としたニュースが、目新しく思われなくなっている現在の状況では、この種の体験の必要性は一段と高まっていると考えられるのである。

日本では、近代教育の夜明けともなる明治維新を経て、政府の最大の課題は、当然のことながら欧米列強の外圧に対抗できる国力を早急につけることにあった。そのためには国家の体制を整えつつ、鎖国によって立ちおくれた文化や技術を急激に押し上げなければならず、必然的に十分な準備をする間もなく、水門を開いて水を呼び入れるように、産業革命の波を受け入れたのだった。学校においては、工場での生産性を高めるための労働者の輩出が第一義となる。児童生徒は、生活のリズムを工場のリズムに合わせることを強制され、利潤を追求することが至上の目的であることを教え込まれた。また、それまで農業の収穫物で生計を立てていた大多数の農民は、都市部に出て工場の労働者となり、賃金で生活するようになっていった。このような過程を経ていくなかで、地域社会においては、家族、地域共同体の解体が進み、必然的にこれらが持っていた教育力は失われていったのである。現在、不登校の子供などを対象とする、従来の学校の枠に入らない学びの場は、全国で約 500 か所あるが、行政による支援はほとんど受けていない。また不登校の小中学生は全国で 13 万人以上になる。しかも、その数は小児化が進んでいるにもかかわらず、この 25 年間増え続けている。即ち、この不登校の問題に代表されるような教育の諸問題は、我が国においては明治維新を迎えた当時から、学校はその根源を抱えていたと考えられるのである。

### 2.3 小中学校における農作業体験学習の実情

小中学校における農作業体験学習は、これまでも教科や特別活動の枠の中で様々な形で行なわれてきている。ただ、それは大変限られた時間内のことであって、内容は断片的、一斉的、そして筆者自身の反省点も含めて、かなり強制的に進めざるをえない実情がある。このため農業に親しむ心情を育てるところか、農業離れを促すような結果を招いてきたのではないかということが懸念されるのである。実際、「信大茂菅ふるさと農場」での農作業に関わってきた学生からは、次のような感想が出された。

- ・サツマイモを育ててみて、つると葉がこんなにも強く地を這っているのを見て驚いた。小学校のときは苗を植えておいたら、土の中から大きなイモが出てきたという感じだった。
- ・農作業をほとんど経験したことがなかった私は、野菜の作りかたも知らなかったし、どのように実るのかも漠然としかわからなかった。小学校のとき授業で習ったり、畑に実っている野菜を何度も見たことがあるはずなのに、覚えていないのだ。やはり受身的な姿勢で聞いていたり、何となく見ているだけでは全然身につかないということを感じた。
- ・自分で畑を作るなんて初めて。クワを持つなんてもちろん初めてだったので、畝の作りかたなんて全然わからないまま農作業がスタートしました。「畝って何？」から始まり、



「種はどうするの?」「どれくらい蒔けばいいの?」といった感じで分からないことだらけ。友達に聞いてなんとか種蒔きまで完了しました。最近の若者って、本当にこういう事を知らないなと身を持って実感しました。

・僕は田舎育ちで、実際家の周りにも畑や田んぼがあるにもかかわらず、特に畑作業の手伝いを今まで一度もしたことがありません。今こうして親元を離れ、違う土地にきて（長野も実家のある能登も自然に恵まれている点では共通しますが）思うのは、やはりあれだけの自然に恵まれていながらどうして農作業のこと、花の名前、魚の名前などを知らないのだろうということです。…「どうしてもっと素晴らしき能登の自然、しかも家の周りにある身近な自然に目を向けなかったのか」という悔しい思いがあります。地元のことにについてあまりに無知なのは情けなく、恥ずべきことなのですが、その無知さをさらけ出す結果になるとしても、そういうレベルの話ではなく、実際に自分の手で作物を育てる体験をしてみたい、そういう気持ちでこの授業を受講しました。

これらの学生の感想は、今日の我が国の青少年がいかに家庭や学校で農作業の体験学習をしてきていないかを如実に物語るものである。

## 2.4 地域住民の農業への想い

信濃毎日新聞（2001年1月7日）の読者の欄「建設標」に掲載された、50歳の男性からの次のような投稿が目にとまった。長くなるが引用することにしたい。

「高齢のため父が畑で野菜作りをしなくなってからだいぶ経つ。その間、私は田畑に見向きもせず自分の仕事だけをしてきた。父にしてみれば、ご先祖様から引き継いだ田畑が荒れていくのを見るのは忍びなかったのであろう。年金の中から金を出し、人を頼んで、春、秋の二回、田畑が荒れないように耕してもらってきた。病気がちな私ではあるが、二十一世紀を機に、父に代わり野菜作りを始めようと思っている。今、野菜などは手間暇をかけて作るよりは、輸入ものの方が余程安価で見た目もよい物が手に入る。新聞などを見ても輸入野菜は増え続けており、自国の農産物に打撃を与えているという。このままでは日本の農地が荒廃の一途をたどっていくことは目に見えている。高齢化社会を迎え、今まで農業に従事していた人たちが手を引いてしまえば、日本の農地はどんどん減少してしまうのではないだろうか。私は自分の家だけでも野菜は自分の手で作ったもので賄いたいと思う。父が健在の間に、すべての知識を教えてもらおうと思っている。」

この記事は現在の我が国の田畑が置かれている状況をよく言い表しているのではないだろうか。農林水産省構造改善局の支援を受け（財）日本農業土木総合研究所を含めた粗放管理検討委員会が行なった調査によると、平成4年の農地法施行令改正時の構造改善局通達で管理のための耕作が提起されたにもかかわらず、農地の荒廃化はその後も平均5ha/年のスピードで急速に進行している。平成10年度では、生産調整以外の遊休農地は、12万ヘクタール程度にも及ぶと推定された。日本の農地面積が1960年代に約600万ヘクタールに達したのを最高に、その後30年間でほぼ100万ヘクタールが減少し今後も同様の傾向をたどることが予想され、現段階の農地面積は、実に明治初期の水準に近いという。

同委員会は更に次のような指摘をする。農地（特に水田）は、適切な管理によって初めて機能を維持し続ける。農地を放置した場合、荒廃農地を復旧するには耕起、伐木、草刈り、これに水田では畔作り、水漏れ対策、水路の修復等の手間がかかることになる。水田の復旧費用は年を追って開墾費に近づく。また、農地荒廃率が3割を越えると集団的な基盤整備を伴う復田化はほとんど不可能となる。こうしたことから、我が国において農地資源を保全するには、継続的な維持管理を地域的なまとまりを持って行なうことが不可欠の条件となる。

この極めて単純明快な結論は、将来の日本の姿を考えるうえで、2つの貴重な視点を与える。一つ目は、継続的な維持管理を可能にする人材を育成し続けていくこと。二つ目は、地域社会の活性化である。「信大茂菅ふるさと農場」での実践は第二の視点に立脚しているものといえる。

### 3. 「信大茂菅ふるさと農場」での初年度の実践

#### 3.1 農場オープンまでの経過

平成6年度から、学生の自主的な活動として始まった「信大 YOU 遊サタデー」の一環として、平成12年度より地元のJAながのを通じて、長野市内茂菅地区に遊休農地（水田3aと畑3a）を借り、農作業体験に挑戦することにした。それまで単発的なイベントに終わりがちだった通称“YOU サタ”に、大自然の中で継続的に行なえる活動を取り入れたいという願いを持ち、前年度のうちにJA長野中央会を3度訪ねて実施に漕ぎ付けたものだ。また、このチャレンジは、現在多くの小中学校で試行されている「総合的な学習の時間」について、学生に学ぶ場を提供することにもなった。「信大茂菅ふるさと農場」での農作業体験を通して、「総合的な学習の時間」を構想する力を身につけることをねらいとして開講された授業科目「自然体験研究特講」(前期)には39名、「自然体験研究演習」(後期)には42名の学生が受講した。

大学の時間割の中には位置づけない集中講義方式のこの授業では、ミーティングを昼食時間や授業後の集まりやすい時間帯に取らなければならないといった変則的な面もあり、教室での一斉授業に馴染んだ学生には、当初不安や戸惑いの様子が見られた。

#### 3.2 農作業体験学習の実際

##### (1) 問題の所在

この活動を通じて畑の作業方法が問題として浮かび上がってきた。前期は、学生が何を栽培したいと思っているかをアンケート調査し、希望する作物の種類ごとに班分けし、各々のグループで責任者を決めて自主的に作業を進められるグループ制を取り入れた。すると活発な活動が初期の段階で見られたものの、熱心に畑に通う学生が徐々に限られてきたり、一部の学生に負担がかかりすぎてしまったりした。そこで、後期は作業方法を一変してオーナー制に変更し、一坪程度の土地を初めから学生一人ひとりに分配する方法をとった。これら2つの方法を試みたことは、図らずも学生が農作業体験学習の意義について考える



きっかけとなった。農作業をグループ制で行うか、それともオーナー制で行うかは、小中学校での実践においても考慮しなければならない課題である。

## (2) 研究の目的

学校のカリキュラムに農業を取り入れるとき、作物によるグループを作り、責任者を置いた小集団で取り組む場合と、作物の選択から収穫まで、全て個人の責任で行なうオーナー制を取った場合とでは、経過や結果にどのような違いが生じたかを明らかにする。また、農作業体験学習によって学生の意識にどのような変化がみられたかを明らかにする。

## (3) 研究の方法・内容

「信大茂菅ふるさと農場」での農作業体験学習に参加した学生のレポートを分析し、作業方法の違いによって生じたと考えられる部分を抽出し、一覧表にまとめ比較検討する。

### ① 前期と後期に栽培した作物の種類

#### グループ制（前期）

稲班：うるち米（コシヒカリ）、もち米

豆・トウモロコシ班：トウモロコシ（一般、ポップコーン用）、大豆

いも類班：じゃがいも、サツマイモ

その他の野菜班：トマト、ミニトマト、キュウリ、ナス、ピーマン、しし唐  
しそ、かぼちゃ、スイカ、レタス

#### オーナー制（後期）

大根、二十日大根、ラディッシュ、ほうれん草、春菊、いちご、チューリップ、  
ねぎ、れんげ草、野沢菜、スナックえんどう、チンゲンサイ、エンドウ、たまねぎ

### ② 授業者及び学生の立場から見たオーナー制とグループ制の特徴（表1を参照）

### ③ 授業後の学生の感想

・作物栽培の大きな利点は、時の経過とともに様々な問題点を知ることができ、またその一つ一つが自分の実生活とも深くつながりがあるということ。

・この体験が、子供たちに「自然から学ぶ」ということ意外に重要なことを教えてくれると思います。私が感じたそれは「自然から感情をいただく」ということです。こういった体験で得られる様々な感情(雑草取りに苦労したこと、雨を願ったこと、収穫を喜んだこと、他人に畑を荒らされて怒ったこと、自然の素晴らしさを感じたことなど…)は、刺激となって子供や私たちの生活に大きく影響するでしょう。

・作物を育てるようになってから私自身が変わったことがもう一つある。それは、「いただきます」「ごちそう様」という言葉の重みだ。今までは何気なく言っていたこの言葉だったが、農作物を作るようになって、楽しさだけでなく、その大変さも知り、食事をする時は何かしらそういうことを考えるようになった。

・この授業を受講して、私は生まれて初めて自分たちの畑を持つことになった。(中略)何より先ずあの肥料(堆肥)の臭いと、肥料に触れてそれを土に混ぜ込むという作業に慣れなくてはならなかった。最初はどうしても肥料は汚いものだと思ってしまい、抵抗があった

表1. グループ制とオーナー制

対象	方式	メリット	デメリット
授業者 (評価者)	グループ制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作物の種類、成長段階がわかりやすい。</li> <li>・援助がしやすい。</li> <li>・収穫がしやすく、利用方法について意見を反映しやすい。</li> <li>・カボチャやスイカなど、広面積を必要とする品種が作れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の、作業内容、作業時間が分かりにくい。</li> <li>・個人の課題に対応した支援がしにくい。</li> <li>・個人の評価がしにくい。</li> <li>・作物によっては資材の購入を考えなければならない。</li> </ul>
	オーナー制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の興味、関心を把握しやすい。</li> <li>・適性を含めて個人の評価がしやすい。</li> <li>・個人に支援しやすい。</li> <li>・収穫物の利用について、考慮しなくてよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・線引きなど事前準備に手間がかかる。</li> <li>・丈夫な名札を作る必要がある。</li> <li>・道具の管理がしにくい。</li> <li>・作れない者への手立てが必要になる。</li> </ul>
学生 (被評価者)	グループ制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話をしながら楽しく活動できる。</li> <li>・気軽に相談できる。</li> <li>・友達と協力できる。いっしょに畑に行ける。</li> <li>・当番制で作業できる。</li> <li>・収穫物を使った企画ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に頼ってしまう。</li> <li>・他のグループの作業に関われなくなる。</li> <li>・属するグループの作物しか収穫できなくなる。</li> <li>・人間関係で不満が溜まりやすい。</li> </ul>
	オーナー制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きなものを、好きな時に植えられる。</li> <li>・収穫物を、個人で利用できる。</li> <li>・好きな作物の育て方を研究し、実行できる。</li> <li>・人の畑と比較できる。</li> <li>・作物に愛情が持てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業が、楽しく思えない。</li> <li>・情熱が冷めやすい。途中で放れる。</li> <li>・失敗した時のショックが大きい。</li> <li>・助け合えない。</li> <li>・不安が大きい</li> </ul>

が、だんだん回数を重ねていくうちに慣れることができた。

・一回、畑に手をつけた以上は途中で止めてはいけない。全てを収穫し、次にすぐ使えるように畑をならすところまでが続きの作業であると思う。今回、皆でやるはずだったのが、班を決めてしまったことで、いつのまにか担当の作業だけをやるようになってしまった。“その他の野菜班”と、トウモロコシ・豆班で同じ日に水遣りを別々に行なってしまうことがあった。田んぼばかりが大変な作業になったり、“その他の野菜班”ばかりが収穫物を得ていたり。班では、作業内容を決めるだけで作業自体は皆でやりたい。

・私にとって、稲やソバ、野菜を育てることは未知の世界である。(中略)農業体験を通して大変有効な方法に気づいた。それは、“その道における達人から教えを受けることである。私たちが田植えやそばの種蒔き、その準備などをするとき多くの達人が力を貸してく



れた。この方法の良さはただ単に情報、知識を授かったり、技を指導してもらえるだけではない。何よりも、教える側と教えられる側のコミュニケーションを産み、人間関係を築くきっかけとなる。これこそがこの方法の一番の魅力ではないか。

・ 自分で、何から何まで世話しながら育てることで、今まで知らなかった事実や陰の労力を知ることができ、本当によかったと思います。「ものを作る」大変さを学びました。大体は順調に育ち、美味しいものが収穫できた中で、失敗したものがありました。スイカとレタスです。原因は雨にあったと思います。大事に育てて、成長を心待ちにしていた作物が断念せざるをえない状況になって、とても大きなショックでした。私たちでさえ、こんなにも悔しい思いをするのだから、生きるための糧として農業をしている人たちならば、それはそれは大変なことだろうと感じました。今回の実践を通して本当に天災の恐ろしさがよく分かりました。

・ 子供たちとの触れ合い活動を通して、比較的におとなしいイメージ持ったのですが、それは、子供たちが、学年差を越えて共に仲良く活動することがなかなかできていなかったためであろうと思います。特に高学年が兄弟以外の低学年の世話をすることが少なかったように感じました。この状態を打破するには、私たち信大生の子供たちへの関わり方を変える必要があります。「リーダー」役から「見守り・補佐役」へと「異学年交流」を成功させることを次の課題としたいと思い、子供たちの「学ぶ力」に貢献していきたいと思います。

・ サツマイモは6月10日、茂菅の子供たちと一緒に植えた。苗の先端を斜めに切っておくこと、植え方にも色々な種類があること、植えてから根が張るまで水をあげなければならないことなど、こちらも知らないことばかりだった。小学校や中学校でもサツマイモは植えたはずなのに、植え付けと収穫のことしか記憶にない。これはその間の過程を先生がやっていたということになるだろう。

・ 収穫の時がきました。トウモロコシは50本以上の収穫ができ、しかも粒ぞろいで実がぎっしりとつまったものでした。先生方にも大変好評で、私も4本貰ったうち3本を実家に送りました。祖父から電話があり、「とても美味しかったよ。自分たちで作ったものとは思えんくらい。また美帆が作ったもんやと余計に美味しいわ」といわれました。(家庭に)コミュニケーションも生まれ、子供たちが作ったものだからと思えば粗末にすることもないと思います。

#### (4) 考察

表1. では、両方法ともにメリット、デメリットが出ているが、二者を選択させると学生は圧倒的にグループ制を支持した。それは何故なのか。

後期のオーナー制は、個人個人の目的意識がはっきりしていて、メンバーがそれほど人との触れ合いを求めている場合に有効であった。このことは前期、その他の野菜班の中にも認められ、「収穫物を使って地域の人たちと関わりたい」とするメンバーと、栽培自体が目的であって地域のことは考えないとするメンバー間で意識のずれを生じていた。

一方、前期のグループ制では開始時の確認事項として、作業はグループの枠を越えて行

なって、収穫物も皆で分配するとなっていたにもかかわらず、感想にも表れているように次第に所属する班の作物しか面倒を見なくなったり、責任を感じて自主的に作業する者と畑に出向くことすら億劫になる者とに分かれてしまったりする等、問題が露出した。ところがいざ方法を選択させると、このような不満や問題は隠れ、皆で作業したときの楽しかった思いだけがクローズアップされてくるのである。次年度の新プロジェクトを企画する話し合いでも、畑の利用方法としてオーナー制を希望する意見は皆無で、今回の結果を裏付けている。即ち、農作業体験学習を通じて学生が会得したものは、農業の知識そのものより人と協力し喜びを分かち合う心根であったと言える。

多くの矛盾や不満を感じながらも、集団での活動を農作業体験学習に期待する学生の姿は、農業をカリキュラムに取り入れる場合、友達や地域の人たちとのふれあいを含んだ活動が大きな魅力になることを教えてくれた。

また残された問題として、個性重視という視点では、個々の児童生徒が独創性を発揮した作物づくりに挑戦していくことが望ましいと考えられるが、今回は集団的農業を志向する結果に終わってしまっている。そこで、例えばオーナー制でも活躍できる人材づくりを幼いうちから如何に進めるかといった、より基礎的な研究に取り組んでいくことはこれからの大切な課題であろう。

#### 4. おわりに

「信大茂菅ふるさと農場」という場に、学生や JA 関係者、地域の子どもたちとその保護者が集まり、土づくり、作物づくりを通して食文化を話題にしたコミュニケーションの輪が広がった。日本人の心からまだ土に親しみ自然に語りかける豊かな人間性は失われていないことを実感することができた。来年度から完全学校週五日制が実施されるが、遊休農地を活用した「教育農場」が全国各地に開設されるならば、休日ごとに親子が訪れて農作業体験を通して人間性を回復することが期待できる。また、既に崩壊しつつある地域教育力も蘇生することが期待できる。時間はかかるであろうが、百年の計として農業を地域社会の生活に取り込み、土づくりによる人づくりの道を一步一步切り開いていくことが重要であると考ええる。

#### 【参考文献】

- 小川清・武川政江（1993 年）『野菜づくり 40 種』主婦の友社（東京）  
柴田義松・竹内常一・為本六花治編（1977 年）『教育学を学ぶ』有斐閣選書（東京）  
土井進（2001 年）「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』  
山崎保寿（1999 年）「総合的な学習に関する短期集中型モデルの構成」『教育実践研究指導センター紀要』第 7 号 信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター

（2001 年 3 月 31 日 受付）



〈実践報告〉

## 5. 農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ支援 －「信大YOU遊プラザ」に見る学生の実践－

志村昌之 坂城町立南条小学校

土井 進 信州大学教育学部教育家科学講座

### Support of Connecting Experiences of Farm Work with Children's Learning

SHIMURA Masayuki : Minamijo Elementary School, Sakaki Town

DOI Susumu : Faculty of Education, Shinshu University

Through learning experience of farm work at “Mure School Farm ” and “Mosuge School Farm ” , I have found three points important : First, to consider the meaning of cooperation with community and the process of learning useful knowledge. Second, to learn fundamental knowledge and skills from the community. And third, to set a situation of learning related to experiences of farm work.

【キーワード】 農作業体験学習 知的好奇心 学習への意欲 地域連携 人間形成

#### 1. はじめに

子どもの育ちにかかわって自然体験や農作業体験の重要性が多くの方で言われている。筆者も、学校現場で学級園などを活用して、毎年のように農作業体験学習を行ってきたが、農業に対する知識不足、体験と学びの関係についての見通しの甘さなど、多くの問題を感じていた。今年度、内地留学という貴重な機会を与えられ、「信大YOU遊プラザ」の「信大年礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」において、学生や地域の方々と子どもたちの農作業体験にかかわってきた。ここでの筆者の立場は、これまでの経験を生かして農作業や子どもたちへのかかわり方などについて学生を支えたり、地域の方々の指導によって農作業についての知識や技能を学生とともに学んだりしていくという、いわゆる参与観察を念頭においたものである。本稿は、筆者が学生の活動にかかわりながら実践したことの中から、子どもたちの「体験」と「学び」の結びつきへの学生や地域社会の支援について考察するものである。

#### 2. 研究の課題

農作業体験学習を行う場合、農作業に関する基本的な知識や技能、体験を通しての子ど

もの学びについてのビジョンが不可欠である。これらが無いがために、「単なる“まねごと”だ」とか「体験だけして何も残らない」などの批判が出る。そこで、指導者としては、子どもの知的好奇心や学びへの意欲を引き出し、人間としての成長を促していく場や地域社会との連携をコーディネートしていく場の設定が大きな課題である。これらは、学校での「生活科」や「総合的な学習の時間」などの実践においても十分考慮していかなければならない課題でもある。そこで、「信大 YOU 遊プラザ」の「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」にかかわる子どもたちや学生の活動とその背景にある地域社会との連携について、具体的な場面を抽出し、子どもの体験と学びを結ぶ学生の企画や地域社会との連携の意義を探ろうと考えた。これにより、農作業体験学習を進めていく上で、体験にともなって子どもが知的な気づきをしたり学びへの意欲を持ったりしていく過程を明らかにし、学生や子どもたちの実態を踏まえて、農作業について専門的な知識や技能を持っている地域の方々と連携のあり方を明らかにしていく。さらに、農作業体験そのものや“学校知”的な学びの範囲に止まらず、人間関係の構築、人間性の向上、生きる力の育成という視点からとらえた「体験」や「学び」の意義についても明らかにしていく。

### 3. 「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実際

#### (1) 「体験」と結びついた子どもの「学び」の姿

筆者が学生と共同で、農作業体験と関連させながら子どもたちの学びにつながるような学習を企画した事例について述べてみたい。

1) 稲刈り 2001.9.29 於「信大茂菅ふるさと農場」参加者（子ども 30 名、学生 17 名、林部信造氏（地元農家）、大内清氏（JA ながの営農指導部）、丸山成志氏 JA（長野中央会農政広報部）、中村公弘氏（JA 長野中央会農政広報部）

##### ① 作業内容

- ・稲刈り鎌による稲刈りとはぜ掛け

##### ② 学習の企画「お米の収穫にかかわる学習」

- ・「米」という漢字の「八十八」への分解と作業工程の説明
- ・はぜ掛けから天日干しの米の味への効果の説明
- ・国際協力田とマリ共和国の位置や特徴の説明

漢字については、一つの文字を分解してその意味を探るというユニークな方法で、天日干しについては、自分たちが行った作業が米の味をよくすることにつながるということで作業の意味づけができ、子どもたちにとって興味あるものとなった。さらに、マリ共和国については、作業を通して体験したことと未知なる世界や国々がつながることとなり、身近な田んぼと世界、マリ共和国がつながったと考えられる。

##### ③ マリ共和国のクイズから国旗に興味を持った SA 児の姿から

「(前略) クイズでマリきょうわ国のことをやりました。アフリカにあってお米があんまりとれないところです。だから、ここのお米をすこしわけておくります。うちへ



かえって地図ちょうでもう一どみました。地図のまわりにいろいろな国の国きがありました。でも、マリきょうわ国の国きはありませんでした、国きを見ていたら、自分でもかいてみたくなりました。マリきょうわ国の国きもしらべてみたいです。」

稲刈りの後、S A児（小3男子）が書いた作文である、S A児は、稲刈りにおいて行われたマリ共和国に関するクイズをきっかけにして、世界地図や世界の国々、とりわけ国旗に興味・関心を持ち、その後、図鑑によりマリ共和国をはじめとして多くの国や国旗について調べるようになり、家庭で購入した事典で国旗を調べては家族に“国旗クイズ”を出して楽しんでいた。また、地区育成会でのお楽しみ会では、賞品の選択においても迷わず地球儀を選び、興味・関心の高さを示していた。そして、学校でも学年末の学習発表会で友達に“国旗クイズ”を出したり世界地図による国旗の紹介をしたりするなど、国旗に対する興味や関心を持ち続けていった。

2)脱穀 2001.10.20 於「信大茂菅ふるさと農場」参加者（子ども30名、学生15名、大内清氏（J Aながの営農指導部）、林部信造氏（地元農家））

#### ①作業内容

- ・脱穀（足踏み脱穀機による脱穀体験と機械による脱穀の手伝い）

#### ②学習の企画

- ・脱穀、精米について
- ・もち米と粳米の違いについて
- ・脱穀の道具と機械について
- ・雑草や糞に化学肥料や水を混ぜての堆肥作りについて

子どもたちの興味の中心は脱穀機だった。特に、実際に自分で稲を持って脱穀した足踏み脱穀機の経験は大きな感動を呼んだ。また、脱穀や精米についての学習では、米ぬかについてA Y児が「おばあちゃんが床磨きに使っていた」と答え、何気なく見ていた祖母の行為と脱穀や精米による“米ぬか”と結びついた瞬間であったと考えられる。

#### ③脱穀の方法の違いやもち米と粳米の違いに興味を持ったS A児の姿から

「(前略)足ぶみだっこくきを足でふみながら回してそこについたわらをそこにいれてお米だけをとっていきます。わらと米がまざったら、ざるで風がふいたらわらだけがとびました。もう一つの機械はエンジンで動いて米とわらをべつべつに分けてくれます。うるち米ともち米のちがいは、うるち米はとうめいで、もち米は白色です。ぼくは、どうしてちがう色なのかなあと思いました。これをごはんにしたらおいしいなあと思いました。(後略)」

脱穀という作業を初めての体験し、足踏み脱穀機と機械による二つの方法を知り、自分で体験することで、機械や道具の構造を実感することができた。特に、足踏み脱穀機について林部氏が説明してくれたことや自分で構造を確かめることができたことで、脱穀の過程をより強い実感を持って学ぶことができたと考えられる。日記

の最後には、二つの脱穀機の絵も描き、関心の高さが表れている。また、もち米と粳米の違いについて、林部氏の説明や自分でも手で剥いて確かめたことで、大きさや色という視点から客観的な認識を持つことができたと考えられる。こうしたことから、稲がお米として自分の口に入ることとつながり、「ごはんにしたらおいしいなあ」という自分なりの素直な感情を表現することができたと考えられる。

3)蕎麦の刈り取り 2001.10.13 於「信大牟礼ふるさと農場」参加者（子ども 28 名，学生 20 名，保護者 9 名，竹元清春氏（牟礼村ふるさと振興公社））

①作業内容

・蕎麦の刈り取り，サツマイモ掘り，にんじん掘り

②学習の企画「蕎麦にかかわるクイズ」

- ・蕎麦の名前の由来について（「稜」（「とがっている」の意味）→蕎麦
- ・栽培面積と収穫量の関係について（1a で 40 人分）
- ・蕎麦の刈り取りや脱穀（刈った後の実を落とす方法），蕎麦の実の保存方法
- ・蕎麦の脱穀（殻を取ってそば粉にしていく過程）

子どもたちは、稲刈り鎌を使って刈り取っては運ぶという作業を黙々と行っていた。中には、親子や友達、学生とで、刈ることと運ぶことを分担して行う姿も見られた。そして、最後に一人一袋ずつ蕎麦の実をお土産として配り、保存方法などについてお話していただいた。「来年までとっておいて、蒔いてみよう」と、親子で楽しそうに話しながら帰っていく姿が多く見られた。

③蕎麦刈りに集中し蕎麦と雑草の見分け方で自分なりの視点を持つ S A 児の姿から

「そばかりをしました。いねかりに使ったいねかりがまをつかいました。一回目に切ったらザックザックと切れてすごかったです。まちがえてざっ草まで切ってしまってこまりました。そばのくきの色は赤色です。そばのくきについているたねを手で引っぱってたねをとりました。その作業が一番楽しかったです。」

蕎麦と雑草の茎の見分け方について、茎の色の違いに注目していった様子を書いている。似たような茎の蕎麦と雑草をまちがえてしまうことから、蕎麦と雑草の見分け方という課題を持って、茎の色の違いに注目し、解決していった道筋がわかる。このことから、S A 児が真剣に集中して作業に取り組んだ様子もわかる。集中して「体験」したことで、間違ってしまう自分を見つめ直して、色の違いという客観的な視点を定めるという自分の「学び」を深めていった姿として注目したい。

4)蕎麦打ち体験 2001.11.24 於レストラン「山ぼうし」（牟礼村ふるさと振興公社経営）参加者（子ども 31 名、学生 12 名，保護者 13 名，竹元清春氏（牟礼村ふるさと振興公社），レストラン「横亭」（牟礼村ふるさと振興公社経営）の職人さん 3 名

①活動内容

・蕎麦打ち体験 「おもいでしゃしん」の返還（1 年間の反省）

②学習の企画



・蕎麦打ち体験（水加減，こね方，切り方など）

職人さんたちが，適宜グループを回り，水加減，こね方，切り方など作業のポイントを指示したり，手本を示して補助したりして活動を進め，学生や保護者がそれをフォローする形で進めていった．蕎麦打ちの後，試食し，どの子も満足そうだった．試食の後，学生がまとめた「おもいでしゃしん」を子どもたちに手渡し，子どもたちが農場での活動について楽しかったことやがんばったことを発表した．

③蕎麦のこね方や蕎麦切り包丁などの道具に興味を持ち，友達とかかわりながら作業を進めたSA児の姿から

「（前略）そばの作り方を教えてくれた人が、『水を半分のこしてまずこねるように』と言いました．それから少しずつ水を入れてこねていきました．耳たぶのかたさがいいそうです．ゆであがったそばを食べたらすごくおいしかったです．ほうちようは，ふでばこぐらいの重さでした．大きさはティッシュのはこぐらいでした．」

水加減，こね方，切り方などを職人に教わりながらグループで協力して蕎麦打ちをした．SA児にとって大きな驚きは蕎麦きり包丁の大きさであり，筆箱の重さやティッシュの箱の大きさという自分の経験の範囲内の知識と関連させて考えていた．また，SA児のグループでは，自然な流れですべての段階作業をすべての子が経験した．友達がやっている様子を見守り，「だんだん固まってきたね」「切り方がほそくてすごいね」などと，声を掛け合っていた．

#### 4. 子どもの「体験」と「学び」を結ぶ学生と地域社会の支援

##### (1) 学生の取り組み

子どもの「学び」の背景として，農作業体験を主催するに当たっての学生スタッフの取り組みについて述べてみたい．

##### 1) 学習の企画

表1 農場における学生スタッフの学習の企画

【信大茂菅ふるさと農場】

	活動内容	作業と関連した学習内容
4月21日（土）	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ（ジャガイモの原産地，ジャガイモの花）
5月12日（土）	れんげで遊ぼう	れんげの花のお話（れんげの花の紹介，花束の作り方） 草笛作り，田んぼの周りの草花調べ
6月2日（土）	田植え	お米クイズ（米の原産地，粳一粒から取れるお米の量，お米の花について） 土クイズ（海岸の砂，田んぼの土，何もしないの三種類の水の透過性についての実験）
9月29日（土）	稲刈り	お米の収穫について ・「米」という漢字の由来→八十八に分解→八十八もの（たくさん）の作業があるという意味 ・はぜ掛けの意味や天日干しの意味 ・マリ共和国の位置（クイズ）：国際協力田として送るお米について，マリ共和国の特徴についての説明

10月20日(土)	脱穀	脱穀、精米についての説明(粳→玄米→白米の精米の過程、粳穀、米糠の用途、脱穀の方法) もち米と粳米の違い 脱穀の道具と機械について
12月8日(土)	注連縄作り	注連縄の由来、意味の劇

#### 【信大牟礼ふるさと農場】

4月28日(土)	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ
5月26日(土)	サツマイモの苗植え	サツマイモクイズ(サツマイモの原産地、サツマイモの花、サツマイモのでき方)
7月14日(土)	蕎麦の種蒔き	紙芝居「カエルくんのお手紙」
10月13日(土)	蕎麦の刈り取り	蕎麦クイズ(蕎麦の名前(「稜」「とがっている」の意味)→蕎麦)の由来 栽培面積と収穫量(1aで40人分)

前述した学習の企画事例や表1にあるように、農作業活動においては必ず学生が学習の企画を行った。そのときの作業や季節などに関連させ、年齢的にある程度幅のある子どもたちが興味を示せるように、クイズ形式にしたり、紙芝居を行ったりして工夫していた。

#### 2)「農場パスポート」

農作業活動の1～2週間前に活動への出欠確認を兼ねてすべての子どもたちに往復葉書で送る。内容は、作業の日時、場所、活動内容、持ち物、出欠確認、子どもたちにメッセージを書いてもらう欄などである。すべて学生の手書きであり、一人ひとりに宛名を書いて送る。「農場パスポート」をもらった子どもたちは、出欠の返事とメッセージを書いて返送してくる、時には、保護者からのメッセージもあり、「普段は見れない笑顔が見れてとてもうれしいです」と、学生にとって励みになるものがある。

#### 3)活動計画の立案

子どもたちとのかかわりを中心に据えて、活動計画を立てていった。学年や男女のバランスを考えてのグループ編成をしたり、活動を有意義なものにしていくために時間配分を考えたりしていった。例えば、蕎麦の刈り取りとにんじんやサツマイモの収穫、脱穀とサツマイモやこんにゃくいもというように複数の作業を組み合わせでいった。

#### 4)考察(学生の動きから見えること)

子どもたちを支える学生の活動を支えているものは何かと考えると、地域の自然を生かして、子どもたちと触れ合いたいという熱意があると考えられる。授業の空き時間、昼休み、放課後、時には夜遅くまで打ち合わせをすることもある。こうした苦労は、実際に作業に臨んだ時、子どもの手をとってやり方を教えたり、泥まみれ、汗まみれになって作業をしたりすることや、子どもたちがいっしょうけんめい作業に取り組んだり、クイズを真剣に考えて学生とやり取りしたり、楽しそうに紙芝居を見たりすることで、大きな喜びに変わっていった。「心と心のつながりが持てたようでうれしい」「いっしょに活動できたとき、自分を信用してもらったような気がする」などの学生の声からわかる。学生が子どもに求めているものは、作業がうまくなるとか、何か特別なことをきち



んと覚えてもらうということではなく、作業を通しての人間的な触れ合いや人間的な成長を願ったり、学習の企画を通して、知的好奇心や学びへの意欲を持ってもらいたいということである。まさに、「生きる力」の育成ということになる。

## (2)地域との連携

(1)で述べた学生の企画や活動については、子どもの学びが効果的に結びついた背景には、地域社会との連携がある。牟礼村ふるさと振興公社、JAながの、JA長野中央会などとの連携によって、農作業の基本的な知識や技能の習得を図っていった。

### 1)学生の実態

現代の学生は、家庭や学校などで一般的に栽培する作物や使用する農具について知らないことが多い。こうした学生が、子どもたちにかかわっていかうとしても、子どもたちの好き勝手にやらせたり、安全への配慮が欠けたりするなどの問題が出てくる。そこで、筆者は学生たちと相談の上、農場の活動で連携している地域の方々をお願いして、作物の栽培や農具の使い方について指導の場を設定していくこととした。

### 2) 学生を対象にした指導

#### 【農具使用についての指導講習会】

- ① 日時 5月14日(月) 午後3時30分～5時
- ② 場所 信大茂菅ふるさと農場 ③ 参加者 学生17名
- ④ 指導者 林部信造氏(地元農家)
- ⑤ 活動内容・講習の様子

表2 三つ又、鍬、鎌の使い方(林部氏のご指導)

	三つ又	鍬	鎌
用途	田や畑を起こす	畝作り	
具体的な使い方・注意点	腰を入れて深く刺し、てこのように起こして土を持ち上げる。	紐で目印をつけて鍬の刃に合わせるように土を盛る。両側から盛る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手や指を切らないように草を逆手に持つ。</li> <li>・刃を滑らせるように右斜め手間に引く。</li> <li>・刃が45～60度くらいに傾けて置き、柄を膝で固定し、左手を刃のうら側に当て右手で砥石を刃の角度に合わせて研ぐ。初めは粗い砥石で、仕上げは細かい砥石で研ぐ。</li> </ul>

### ⑥ 学生の感想から

- ・ 三つ又と鍬は同じように使うものというイメージがあったが、目的によって道具をきちんと使い分けることがわかった。
- ・ 三つ又でてこの原理で起こすとスムーズに耕せるが、腰を入れて耕するのが難しい。
- ・ どうしても鎌を正面に引いてしまう。最初の段階できちんとしたやり方を身につけることが大事だと思った。
- ・ 鎌を研ぐときの押さえ方や刃に合わせた角度に砥石を滑らせることなどがわかった。林部さんが手を添えてくれたので体で覚えることができた。
- ・ 鎌の手入れや鍬やみつまたのほそのかいかた、ぬらしてから使うことなど道具を大事にすることもきちんとしなければならないと思った。

### 【稲刈りに向けての作業・講習】

- ① 日時 9月27日(木), 28日(金) 午後4時~6時
- ② 場所 信大茂菅ふるさと農場 ③ 参加者 学生14名
- ④ 指導者 林部信造氏(地元農家), 大内清氏(JAながの)
- ⑤ 活動内容・講習の様子
  - ・ 雀除けの網はずし, 網の収納:(横一列に束ね, 端から三つ編みにして巻いていく.)
  - ・ 藁の縛り方: 8株で1束を作る. 縛る藁は選っておき, 根元を水で濡らしておく.
- ⑥ 学生の感想
  - ・ 網の収納は理にかなっていてコンパクトに収納でき次回の使用にも出しやすく工夫されている. 先人の知恵に学ぶものがある.
  - ・ 一株一株丁寧に刈れた. 藁で縛っていく方法もコツがいくことがわかった. くるっとねじるだけだが, けっこう丈夫に縛れるものと思った.
  - ・ 天日干しは米の味がよいと聞いた. 手間はかかるかもしれないが機械に頼らないこういう方法の方がかえって有効なこともあると思った.
  - ・ 林部さんから差し入れていただいた柿がおいしかった. 別の用があっても私たちのために駆けつけたり差し入れしたりしていただいたとき, 本当にありがたい. また, 林部さんとお話をしていると, 自分の家族といえるような懐かしい気持ちになる.

### 3)子どもたちとの農作業での外部講師としての指導

#### 【サツマイモの苗植え】

- ① 日時 5月26日(土) 午前10時~11時30分
- ② 場所 信大牟礼ふるさと農場 ③ 参加者 子ども7名, 学生14名
- ④ 指導者 竹元清春氏(牟礼村ふるさと振興公社)
- ⑤ 活動内容・指導の様子
  - ・ 50cmくらいの間隔でテープを張りその両側から土を盛って畝にする.
  - ・ 30cmくらいの間隔で, 10cmくらいの深さの穴を掘って, 茎を寝かせるようにして植える. そのとき, 葉が土につかないように気をつける.
  - ・ 植え終わったら, たっぷり水をやる. 穴に水を入れて植える方法もある.)
  - ・ 寒さ対策として寒冷紗を掛ける.
- ⑥ 学生の感想から
  - ・ 畝作りで, テープを張って列をそろえて両側から鍬を使って土を盛っていくことが大変勉強になった.
  - ・ 畝の間隔, 苗の間隔, 植え方など基本的なことがわかった. 寒さや水分などデリケートなこともあることがわかって, それらに対する対処も経験できてよかった.
  - ・ 鍬は耕すだけのものかと思っていたが, 畝作りの場面で使うということがわかった.
  - ・ 鍬の使い方の上手な子どもがいた. 家庭や学校で農作業に慣れている子もいる.



#### 4) 考察

基本的なことをきちんと教わるということは重要なことである。また、先人の努力や工夫が生み出したすばらしい知恵や技術を実感している。このように、豊富な体験と専門的な技術を持っている方々から実際の体験を通して学んだことで、学生が自信を持って子どもたちを指導していくことができ、子どもたちの学びを引き出すことにもつながったと考えられる。さらに、地域の方々との触れ合いにも注目したい。単に知識や技術を教わるだけでなく、指導者の方々の人柄に触れたことも貴重な経験であり、「学び」の場と位置づけることができる。学生や子どもたち一人ひとりの手をとって教えたり、時間的な面で無理を承知でお願いしても快く引き受けてくれたり、時には差し入れをさせていただきみんなで輪になってご馳走になり、時間を忘れて語り合ったりするなど、人間的なお付き合いもさせていただいた。「全ての生命を愛する心とやさしさを学んだ」という学生の感想がそれを的確に言い表している。物心両面の支援も学生や子どもたちの心に残ることとなった。

#### 5. 総括的考察

第一点として、知的好奇心や学びへの意欲を引き出す場として、そのときの体験と関連づけた企画が有効であるということが言える。国際協力田とマリ共和国のクイズ、脱穀における、機械と足踏み脱穀機との比較体験、もち米と粳米の違いの提示、脱穀や精米の過程、蕎麦打ちにおける手順や道具など、様々な題材の提示が工夫されていた。子どもの実態を考慮して、興味・関心の持てそうな題材を取上げていくという実践的指導力が重要である。自ら課題をつかむことで、SA児やYA児のように主体的、意欲的に追究して認識を深め、他へ働きかけていくことなどで、人間形成の上でも注目すべき効果が見られた。

第二点は、地域の指導者の方々から生きた知識を学び、「生きる力」をつける場としての有用性である。学生が、地域の方々から農作業にかかわる基本的な知識や技能を学ぶことで、先人の努力や工夫が生み出したすばらしい知恵や技術を生きた知識として学び、子どもたちへの指導に生かす「生きる力」につながっていくものとなる。また、地域の方々から直接指導されたり学生を介したりして子どもたちに伝えられていくわけで、子どもたちにとっても生きた知識として蓄積され、「生きる力」として働いていくことになる。そうした意味で、地域社会との連携は重要であり、農作業体験学習では欠かすことができないものとなる。

第三点として、人間関係の構築、人間性の向上の場としての位置づけである。農場には子ども、保護者、学生、地域の人々など様々な立場の人々が集まり、作業を通して様々なかわりが生まれる。学生の立場から見ると、地域の方々から単に作業を教わるのだけではなく、その人柄から多くのことを学んでいった。こうした交流によってお互いの心が通じ合い、時には、無理も言い合える関係にまで絆も深まっていった。子どもたちや保護者の立場から見ると、友達の立場を考えて行動する姿や、子どもの成長の姿を温かく見つめ

ること、親子や友達、学生で作業の分担したり、友達のよさを認めて声を掛け合ったりしていく姿、作業の後、田んぼや畑に感謝して一礼する姿などがある。これらの姿から、自然や人とかかわる「体験」を通して人間形成の上で重要な「学び」が見て取れる。

以上のように、農作業における「体験」と「学び」の結びつきの場の工夫と効果が明らかになった。農作業において、それと関連した題材の提示や地域社会との連携により、子どもたちに知的好奇心や学びへの意欲を持たせ、人間関係の構築をはかり、人間性を向上図っていくことで、「生きる力」を育んでいくことができると考える。このような「体験」や「学び」は、教室や家の中では決して得られない。特に、「総合的な学習の時間」が本格的に始まる学校現場、学校週五日制が完全実施される地域、それぞれの場所で様々な活動が始まろうとしている今、農作業による子どもたちの「体験」を「学び」に結びつけ、子どもたちの「生きる力」を育んでいけるかどうかは、教師の実践的指導力の向上、地域の教育力や社会力の蘇生が大きなカギとなる。

#### 文献

土井進（2001）「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』

門脇厚司（1999）『子どもの社会力』（岩波新書）

佐野安仁 新茂之 芝野昭男 吉田健二（2001）『「総合的な学習」と人間形成』（晃洋書房）

嶋野道弘（2001）「空っぽの箱にあなたは何を入れるか 食農教育で「総合的な学習の時間」を創ろう」『食農教育 2001 年 10 月 No.16 臨時増刊号』（農山漁村文化協会）

高山博之（1995）「社会科における思考力・判断力の育成」（文部省中学校課・高等学校課編集『中等教育資料』No.657 pp.12-17 大日本図書）

佐島群己 奥井智久編（1992）『新訂 生活科授業研究』

（2002 年 3 月 31 日 受付）



## 6.

## 土から人へ

### —小・中学校における農作業体験活動の実態と課題—

杉山雅幸 野外活動専攻 4年

## From Earth to Human

### —The Circum Stances and Subjects for Agriculture Experience Activities in the Elementary and Junior High School—

SUGIYAMA Masayuki : Major: Outdoor Activity, senior

Children are short of real experiences now. In order to make up for its shortage, it is very important to be experienced in Agriculture in the Elementary and junior high school. Then I have inquired into the circumstances and subjects for agriculture experience activities.

【キーワード】 農作業体験活動、小・中学校、課題、協力者

#### 1. YOU遊広場によせて

私は、信州大学教育学部を卒業するにあたり、卒業論文のテーマとして「農作業体験活動」を取り上げることにした。その取り上げるきっかけとなったのは、「信大YOU遊サタデー」で行なってきた、『自然体験活動「土づくりによる人づくり」プロジェクト』である。

私は2000年度、このプロジェクトに携わり、農場を開設し、年間を通して茂菅地区と牟礼村の子ども達とふれあいながら農作業をしてきた。そして私は、子ども達と共に作物を育てる楽しさや大変さを自分の身をもって知り、農作業を体験することの大切さを実感した。その結果、農作業体験を通しての教育が子ども達にとって重要な意味を持つのではないかと考えるようになり、小・中学校で行なわれている農作業体験活動について興味が湧いてきたのである。

そこでここでは、卒業論文で調査した学校の現場における農作業体験活動に関する実態と課題を述べながら、来年度によせる思いを書き記そうと思う。

#### 2. 農作業体験活動の必要性と可能性

人類は、文化の中で生きているということは言うまでもない。そしてその文化 (culture) の語源は、耕す (cultivate) ことからきている。地を耕し、食物を育てるようになってから人類の文化が大きく発展してきたことは、日本の歴史においても明白である。文化人類学者の中尾佐助<sup>1)</sup>は、「文化という農業はもちろん生きている文化であって、死体ではない。いや、農業は生きているどころでなく、人間がそれによって生存している文化である。」「農耕文化は文化財に満ちみちている。農具や農作技術は、人類の全歴史をあらためて述べることになるほどである。」と述べている。つまり農業は文化の基礎的な要素であり、人類に

として最も根源的なものだといえるのである。では、現代社会においてはどうか。

今の日本は飽食の時代にあり、不自由なく食料品を手に入れることが可能になった。大手スーパーや大型ショッピングセンターに行けば、何でも揃っていて、しかも安価で手に入れることができる。それだけではなく、コンビニエンスストアでは24時間いつでも食べ物を買え、電話やインターネットなどでも食料品を入手することができる時代となった。それは昔に比べ、格段に便利で効率のよい世の中になったということである。しかし、その利便性を追求していく流れの中で、店頭できれいに並んでいる食料品を、汗水垂らして育てている人達の姿は、見えにくくなっているように思われる。そのため私達は、日常的に自分の生活と農業のつながりを意識することは少ないだろう。実際に、都市生活者に対して行われた調査<sup>2)</sup>によっても、約8割の人が「農業のイメージは縁遠い」(76.3%)、「農産物は、生産現場と消費者の距離がかけはなれていると思う」(85.5%)と感じているというデータが出ている。それだけではない。子どもの生活科学研究会が行なった小学生を対象に実施した「魚介・野菜等の名称に関する調査研究」<sup>3)</sup>によれば、1987年と1998年に行われた野菜の名称についての調査結果を比較すると、98年の方が87年に比べ正答率が低いと報告されている。このことから現代の子ども達は、食への関心が薄いことがうかがえる。人間は何かを食べなければ生きていけない。それ故に食への関心は、動物としての本能的な部分である。これらの報告は、人類としての基盤がゆらいでいることを示しているのではないだろうか。

日本の経済の発展から見ると、1950年代後半からの日本経済の急速な発展に伴い、農村部から都市部への人口の流出が始まり、1960年代には更にそれが激化した。この都市化の進展や就業構造の変化の中で、家族や地域共同体、会社の在り方及びこれらと個人との関係が大きく変化した<sup>4)</sup>。それによって人間関係が希薄化し、地域共同体のもつ子どもの教育力が失われたのである。農業を営む共同体の中には、様々な教育力が内在していた。多くの地域の人々とのかかわりや伝統的な行事の中に日本の文化を見取り、祖先の知恵を学ぶこともできたであろうし、自分が生きていくための植物にふれることは、気づかぬうちに自然を学ぶことにもつながっていたに違いない。そうしてみると、人類の根源的な農耕の文化にふれることによって、本来人間がもっている力、すなわち「生きる力」を再生することができると思われる。

これらのことから、自らの手で農作物を生産することは、農耕が社会の基盤にある人間としてきわめて重要であり、生きていく上で、とても必要なことを学び得るのではないかと思う。

### 3. 農作業体験活動の実施状況

小・中学校における農作業体験活動に関して、中国・四国・九州の学校にアンケート調査を実施したところ、次のようなことが見えてきた。

- ①農作業体験活動は、6割以上の学校で行なわれていて、小学校の方が中学校に比べ、圧倒的に農作業体験活動を実施している学校が多いことがわかった。これは、中学校には高校受験のための勉強もせざるを得ないという状況があるためで、なかなか時間がとれないようである。
- ②農作業体験活動を行なっている農園は、学校外に比べ、学校内に設けられることが多い



が、学校外に設けられることも少なくないことがわかった。学校外に農園をもつことは、それほど珍しいことではないようである。

- ③農作業体験活動で扱われる作物は、多種多様であって、その中でも「さつまいも」が、校外・校内ともに最も多く育てられていた。また学校内の農園では、「ミニトマト」、「じゃがいも」も多く、学校外の農園では、「稲」も多いという結果になった。
- ④小学校で農作業体験活動を実施している学年は、「小学校 6 年生」が多く、「小学校 3 年生」は少ない。また、低学年は、学校内で農作業体験活動を行なう場合が多く、中・高学年は、学校外で行なわれる場合が多い。これは、年齢による体力や能力の差を、学校側が配慮し、安全かつ効率よく、体験活動ができるようにしているためと考えられる。
- ⑤カリキュラム上の位置付けとしては、「生活科」、「総合」、「理科」、「特別活動」に位置付けられていた。校内では、「生活科」や「理科」、校外では、「総合」に位置付けられることが多く、ここでも学校側の配慮が見られた。
- ⑥農作業体験活動の実施には、多くの場合、学級担任だけではなく、協力者が存在していた。その協力者には、「学校内部の教職員」、「児童・生徒の保護者」、「地域の農業従事者」が多く、校内に比べ、校外で実施される方が、より一層協力者を得て、活動が行なわれていることがわかった。
- ⑦農作業体験活動によって収穫された作物の利用方法は、「児童・生徒が調理して食べる」や「児童・生徒に分配する」が多く、直接、児童・生徒に還元されている。

これらのことから、学校での農作業体験活動をより一層充実していくためには、4つの改善策が考えられる。1つ目は、中学校での農作業体験活動の実現である。問題解決能力や知識など小学生よりも能力が高いことから、より質の高い学習が行なえるのではないかなと思う。2つ目に、取り扱われる作物の検討である。いろいろなものを育てることで、また違った利用価値が生まれ、新たな学習へと発展していく可能性があるように思う。3つ目には、協力者の検討である。たいてい学校関係者か地域の農業従事者であって、農協の職員や老人クラブなどの協力者は、少ないという結果になった。これらの人々の力を借りれば、農業の理解にもつながったり、世代間交流といったものにつながるのではないだろうか。4つ目は、作物の利用方法の検討である。作った子ども達が、食べたりすることは、収穫の喜びを味わうことから、とても重要なことではあるが、寄贈したり、販売するなど、他の利用方法を考え、学習を発展させていくことも必要ではないだろうか。

#### 4. 農作業体験活動の問題点、教育的効果、課題

実施状況と同様に、農作業体験活動の現状の問題点、教育的効果、今後の課題についてアンケート調査を実施したところ、次のようなことが明らかになった。

- ①農作業体験活動の現状の問題点としては、「長期休業期間中の世話が大変であること」や

「児童・生徒のかかわる時間が少ないこと」が問題点とされ、時間不足が大きな問題となっていることが、明らかになった。

②教育的効果としては、「自然のしくみに気づく」や「自然の大切さに気づく」といった、自然理解にかかわる成果が期待できることがうかがえた。

③今後、農作業体験活動を充実させるために、教員は、「協力者の確保」や「時間の確保」が必要だと思っていて、さらに、実施していない学校では、「場(農園)の確保」、実施している学校では、「マニュアルの開発」が求められていることがわかった。

また自由記述欄から課題を、次のように見出すことができた。

- 大規模校では、児童・生徒が多いことから、学校や学年単位で一斉に農作業体験活動を実施することが難しく、実施形態の工夫が課題となっているため、学級単位でそれぞれ特色ある農作業体験活動を実施するなどの工夫が必要である。
- 悪天候により計画が変更されることは、学校教育の現場にとって、大きな問題となるため、あらかじめ変更となることを予測し、中止になった場合の具体的な準備をしておくことなどのカリキュラムの柔軟な運営が必要である。
- 農作業体験活動は、教科学習や学校行事などとの時間の調整が難しいため、時間が延長してもいいようにその日の最終時限に行なったりするなどの授業運営の工夫や農作業体験活動の中に教科教育の内容を組みこむなどの授業内容の工夫が必要である。
- 都市部や市街地では、土地の確保が難しいため、屋上などに畑を作ったり、都市校外で手のかからない作物を育てるなどの農作業体験活動の場の工夫が必要である。

このようにアンケート調査では、課題が出された。しかし、自由記述欄の中に述べられるように数字では見出されにくい課題が、多々あることに気づいた。そこで実践事例から課題を抽出することを試みた。

## 5. 実践事例からの課題

実践事例には、様々な課題が述べられていたが、その中でも次の6つの課題が多く挙げられていた。

### ①学習内容の改善

農作業体験活動を体験し、楽しむだけに終わらせるのではなく、子ども達の学習につなげていくためには、教師が子ども達の興味をひくような動機づけの仕方や学習の発展のさせ方を考え、自主的な活動にしていくことが望まれる。そのためには、他校での農作業体験活動の実践事例などを参考にして、各学校の児童・生徒に見合った魅力ある授業を創造していくことが必要である。

### ②地域との協力体制の充実・整備

協力者の確保については、アンケート調査の課題で示されていたが、それは、教師にとって大きな負担となっていることが実践事例からうかがえた。「発掘した地域人材を学校



支援ボランティア(サポーター)として登録、組織化をするとともに活用計画を作成し、教育活動の中で積極的な活用を図る。」<sup>5)</sup>と、いったように協力体制を整えることができれば、子ども達にとっても充実した学習が行なえると思われる。また地域の隠れた力を引き出すことにもつながり、協力者の供給も容易になる。

### ③年間計画の再検討

アンケート調査の課題でも、「時間の確保」は重要な課題として挙げられていた。この「時間の確保」と年間計画は、密接に関係している。まず、年間を見通して、綿密な学習計画を立てることが、不可欠であり、児童・生徒の興味・関心を持続させるためにも、作物の成長に合わせ、農作業体験活動の回数や頻度を配慮すべきではないだろうか。

### ④教師の指導能力と指導体制の強化

子ども達の学習に有効な支援をするためには、教師自身が、農業のことについて理解を深めることが大切である。そのためには、各学校で積み重ねてきた知識やノウハウ、地域とのつながりを、毎年引き継いでいけるように、教職員の間で連携をとっていくことが、必要ではないかと思われる。

### ⑤経費の確保

事例の中には、補助金の打ち切りによって、継続の危機に瀕しているところもあった。そのことからすると、作ったものを販売するなどして、自分たちで経費を工面することも必要ではないだろうか。また今後、少子化による児童・生徒数の減少が考えられる中で、これまで行なわれてきた農作業体験活動を継続すれば、児童・生徒一人あたりの労力や金銭的にも負担も大きくなろう。こうした場合、再度その規模に見合った活動形態を考え直す必要もあると考えられる。

### ⑥安全管理体制の整備

現代は、学校にも危機管理能力が求められる時代である。安全面への配慮に関しては、今後、農作業体験活動においても重要視されてくるものかと思われる。だから農作業体験活動の引率者は、児童・生徒数に見合った引率者の数を増やしたり、作業の説明を丁寧に行なったりして、事故や怪我が起こらないように、最善の注意を払わねばならない。さらには、万が一、事故が発生した場合の対処方法や、連絡体制を整えておくべきである。また、上記でも述べられているように、傷害保険に加入することも必要であろう。

農作業体験活動の今後の課題は、前記のように挙げられた。全ての課題を通してみると、実施する学校の人口密度や地域の文化や歴史などの社会環境や自然環境の違いにより、課題は異なっている。そのためそれぞれの個々に応じた支援していくことが望まれる。そこで、私は地域に住む人々の協力が、これらの課題解決の鍵になると考えている。2002年度から完全学校週五日制が、実施されることから、失われた地域の教育力を再び呼び起こす必要がある。その力を是非、学校教員の手で復活させていただきたい。また地域も学校に歩み寄って来て欲しいと思う。

## 7. 「信大茂菅ふるさと農場」における自然体験が 子どもの人間形成に及ぼした影響

相磯素子 幼児教育専攻 4年

### A practice of the effect of natural experience for the growth of children at Shinshu University farm “Mosuge-Furusato”

AISO Motoko : Infant Education, Senior

Agricultural activities at rice field are effective for the all-round growth including physical, mental and social aspects. We considered the following points from the practice;

1. Children who go to kindergartens or elementary schools are interested in and have concern for the nature through agricultural activities at the rice field,
2. The rice field is the great environment as stimulator for the all-round growth. The activities at the rice field include health, human relations, environment, language and expression, and;
3. The agricultural activities at the rice field are not only good for natural experience but also for human relations.

【キーワード】「信大茂菅ふるさと農場」 自然体験 田んぼ 興味・関心 総合的な発達

#### 1. 研究の目的と方法

「信大茂菅ふるさと農場」とかかわる活動の中で、子どもたちがどのようなところに興味や関心を抱き、何を学び、どのような育ちの姿が見られるのかを観察し、分析・考察することを通して、田んぼの持つ魅力と教育力を明らかにすることを目的とする。

- (1) 観察対象：「信大茂菅ふるさと農場」において学生と共に自然体験を行うという趣旨で応募してきた、保育園から小学校に通う幼児・児童を対象とする。対象人数は活動の度に異なるが、およそ10名から30名である。
- (2) 観察場所：主に長野市内茂菅地区にある「信大茂菅ふるさと農場」で行う。「みんなでつくろう！わらのおうち」の活動に限り、信州大学教育学部校舎で行う。
- (3) 観察方法：田んぼと触れ合う活動を通して、ありのままの子どもたちの心の動きや育ちの様子を、あらゆる発達段階の視点から捉えたいと考え、自然観察法を用いる。



(4) 観察期間：2000年10月19日から2002年1月20日までとする。

## 2. 事例と考察

### (1) 脱穀一藁の再利用について学ぶ(2000.10.19 信大茂菅ふるさと農場)

子どもたちは、学校が終わってから来たので、途中から脱穀を手伝ってもらう。最初は、稲を機械に通すときに、「わー」という歓声をあげながら恐る恐るやっている様子だったが、慣れてくるとペースも速くなってきた。

脱穀が一通り終わり、学生や先生が藁を燃やしていると、子どもたちも一緒に火を囲んでおしゃべりをする。活動に参加している先生から、「藁を燃やすと藁灰というとてもいい肥料になるんだよ」と教えてもらい、学生たちと一緒に感心する。稲から米が取られた後の藁は、一見、もう用のないもののように思える。しかし、これを燃やすことで、再び田んぼの栄養として活用されることを知り、子どもたちは自然界の循環系について学ぶことができたのではないかと考える。このことを今後社会科や理科などで扱う、生活用品のリサイクルや環境問題などにも結びつけて考えていけたらいいと思う。

そのうち、学生の1人が落穂を火であぶってポンポン菓子を作ってみせると、自分たちも落穂を拾ってきて一緒に作っていた。用具の片付けなどをした後、田んぼに戻ると、子どもたちは私に弾んだ口調で、「これ食べれるんだよ」と言って自分たちがあぶっていた落穂を分けてくれた。落穂からポンポン菓子を作ったことは、子どもたちにとって驚きと発見の場であったと思われる。こんな食べ方もあるのだということを知り、さらに米への関心と理解が高まったと考える。

### (2) みんなでつくろう！わらのおうち一遊びの素材としての藁

(2000.11.11 信州大学教育学部N103、N104)

Mさん(小2)とその友達(小2)は学生に、「ここにはテーブルが来るの」などと話しながら、藁とダンボール箱を使ってソファのようなものを一緒に作っている。大きなダンボール箱に藁をいっぱい詰め込むと、その上から2人でお風呂に入るような格好で座り、「気持ちいいーす」とピースをして見せる。そこへ、先ほどの学生が、「はい、テーブルです」と言いながら藁をMさんたちのひざの上に乗せ、さらに米粒の入ったお皿とスプーンを2セット持ってきて、「ごはんです」と言って2人に手渡す。すると2人はスプーンを動かして笑顔でこれを食べる仕草をしている。Mさんは、「これ、粳穀とったの」と言って、私にお皿の中の米粒を見せてくれた。そこには十数粒の精米が入っており、これは自分で剥いたものと思われる。私が、「おいしいですか」と尋ねると、Mさんは笑いながら、「まづいいーす」と冗談を言う。そして、Mさんは一緒にソファを作っていた学生に、「次ベッド持ってこようか、あそこの星の(模様がついている)…」と言って細長い大きなダンボール箱を指差す。学生が、「(ダンボール箱を)持ってこようか」と言うと、「うん」と言って頷く。学生がダンボール箱を取りに行くと、自分たちも藁で作ったソファから立ち上がる。しかし、学生が戻ってきて、「あれね、別のお友達が使ってた」という報告をすると、少し残念そうな表情をする。

これらMさんとその友達が遊んでいる姿を見ていると、藁を柔らかいクッションや、ごはんに見立てたり、こういった空想の世界を友達と共有したりすることを楽しみ、遊びに打ち込んでいるように感じる。この理由としては、友達と一緒に参加ということで、自

分の思いを受け止めてくれる存在があったことが良かったと考える。また、Mさんの父兄の方へのアンケートから、これまでの生活の中での薬とのかかわる経験（直接的に薬に触れて遊んだことがある、間接的に話を聞いたことがあるなど）が、遊びに非常に強く影響を及ぼすということが窺える。Mさんの場合、母親が農家出身であったことから、これまでMさんにも薬について話しをしてきたという。そのため、初めて出会う薬という素材に対しても親しみを持ち、また遊びに見通しを持ってかかわることができたと考えられる。

### (3) レンゲ畑で遊ぼうー子どもたちの興味や関心を引き出す春の田んぼ

(2001.5.12 信大茂菅ふるさと農場)

みんなで草花遊びをしていると、途中でUくん(小3)、Nくん(小3)、Yくん(小1)が田んぼで見つけた花の名前を知りたいと言ってきた。私は用意してきた『はるのたんぼ』と『学校の周りの草花』という本を2冊渡すと、すぐに自分たちで調べ始める。知りたいという欲求が強いようだ。調べていた花は『はるのたんぼ』の本に載っていて、名前はタネツケバナということが分かった。本の挿絵と実物の花を見比べながら、「これだよなあ」とうれしそうに友達と確認していた。一緒にこの花を見つけた学生にも後で報告していた。ここで見られた姿は、近年重要視されている問題解決能力と言われるものであるが、その根本にあるものは知りたいと強く思うことに他ならない。まず、興味・関心を持つ対象が田んぼにあったこと、そして、自分たちが疑問を抱いたときに解決する手立てがあったことがここでは有効であったと考えられる。また、友達や他の学生とも疑問が解決した喜びを分かち合うことができたことも良かった。

子どもたちは次にタンポポ笛作りに挑戦していた。これは私も作り方を知らなかったもので、試行錯誤しながら作るとようやく鳴った。子どもたちは、どうやって作るのか、どうやって鳴らすのか、真剣に私の口元を見ている。Yくんは真剣に私の口元を見ながら、どうにか鳴らそうと真似をしてみる。私は、「もっと(タンポポの茎を)口の奥まで入れて吹いてごらん」、「そんなに口元に力をいれなくてもいいんだよ」とアドバイスするが、音を出すことは難しいようである。そこで、私が鳴らしていたものなら鳴るかなと思い、自分のタンポポ笛を貸してみるが、それでも鳴らなかった。Iさん(小4)とAさん(小6)、Mさん(小4)が、「それ作りたい。どこにあったの」と聞くので、私は、「こっちに生えているんだよ」と言って、一緒に畑のほうに降りて行った。茎を折って作ろうとするが、彼女たちもなかなか鳴らすことができない。さきほどしたようなアドバイスをするがそれでも鳴らないと分かったと、AさんとMさんはあきらめてしまった。Iさんは私の口元を一生懸命見ながら、「鳴らない」と言いつつ何度も挑戦していた。その後、何度も何度も「鳴らない」と言っては見せに来た。これら子どもたちの姿からも、ナズナを鳴らしたりタンポポ笛を作ったりする活動は子どもたちの興味を引いたようだ。これは、ナズナやタンポポは草花であるという概念を破り、音も鳴るのだという驚きから、自分たちもぜひ鳴らしてみたいという好奇心が生まれたからだろう。また、これらの遊びは伝承遊びの一つに分類されているように、人から人へ伝え受け継がれていくものである。本やテレビの情報を媒体とした一人遊びとは違い、人とのかかわり合いながら生まれる遊びの楽しさを、十分に味わうことができたと考える。

Kさん(3歳)は学生のKくんにかラスノエンドウの種を掌にのせてもらっていた。両手を合わせ、落とさないように慎重に掌にのせられた種を見つめている。そして、「ちっち



やなおまめがたくさん!」と笑顔で喜んでた。その後、みんなで鬼ごっこを始めるが、Kさんとその姉のHさん(小1)、Rさん(3歳)の3人はこれに加わずに土手で遊んでいた。私は途中で彼女たちに声をかけに行くが、「(ゲームに入らなくても)いい」と言われたので、その場は学生のKくんをお願いをして再びゲームに戻る。それにしても彼女たちの集中力には驚かされる。ずっと草で遊んでいる。よく見るとさきほどのカラスノエンドウの種をまだ集めているようである。これは、学生のKくんにかラスノエンドウの種を掌にのせてもらったことをきっかけに、Kさんがカラスノエンドウの種の大きさや、色、形など自然の美しさやよさに心を動かされたためだと思われる。このように、自然と触れ合うことで、豊かな感性は育っていくと考える。このためには、幼児が身近な自然と触れ合う機会を多くするとともに、他の幼児や大人の言動が重要な意味を持つということが言える。

#### (4) 田植え一思い出写真から見えるもの(2001.6.2 信大茂菅ふるさと農場)

活動の終わりにはほとんどの場合、子どもたち全員に思い出写真という形で、活動を通しての感想を絵と文字でかいてもらっている。これには、2つの意味があり、1つには子どもたちの思いを表現する場を与えるということ、もう1つは子どもたちの思いを学生たちがそこから読み取ったり、後から見返せたりするという点で今後の活動や研究に生かしていけるという利点がある。(以下は思い出写真より)

##### a. のうじょうにさんかしたりゆうをかいてください

- ・ 田うえをやってみたかったから。(小3 女)
- ・ 農じょうをやってみたかったから。(小4 女)
- ・ 信大の人と協力してやりたかったから。(小6 男)
- ・ しんだいせいと田うえをするのがたのしそだったから。(小6 女)

##### b. きょう、たうえをして、おもったこと(たのしかったことやがんばったこと)をかいてください

- ・ だろんこにさわったらきもちわるかった。(小1 男)
- ・ かえるをつかまえたこと。(小1 男)
- ・ かえるをつかまえておもしろかった。(小1 男)
- ・ だろんこになってなえをうえたので早く米になってもらいたい。(小2 女)
- ・ さいしょからさいごまでちゃんとやったからつかれた。(小3 男)
- ・ たうえをするとき土がきたなかったけどたくさんできた。(小4 女)
- ・ だろをふんだかんしょくがきもちよかった。(小6 女)
- ・ しんだいせいとたのしく田うえができてよかった。(小6 女)
- ・ みんなといっしょにいねをやったたのしかった。(小6 男)

##### c. たんぼやおこめのことで、もっとしらべたいことやべんきょうしてみたいことがあったらかいてください

- ・ たんぼは、日本中でなんこあるかしらべてみたい。(小2 女)
- ・ いつかるの?(小3 女)

- ・ おこめのしゅるい（名前）をたくさんしらべたい。（小4 女）
- ・ そだてた米がたべたい。（小4 男）

このように思い出写真を見ていて気付くことは、同じ活動をしていても、子どもたちが心を動かされる場面はそれぞれに違うということだ。泥の感触やカエルを捕まえることに楽しさを感じたり、早くお米になってもらいたいと願う子どもなど、様々である。小学校高学年では比較的、学生や友達と一緒に活動できたことが楽しいと感じている子どもが多かった。また、今回の田植えをきっかけに、各自で課題を持つこともできた。これらは、まさに田植えの活動という体験から田んぼや米に対する興味や関心が高まった証しである。小学校ではこれらを生活科や社会科、家庭科などにも発展させることができ、教材としても大きな可能性を持っていると考える。

#### （5）稲刈り一本物に触れる大切さ（2001.9.29 信大茂菅ふるさと農場）

後半一緒に活動をしたCくん（3歳）は6月に行われた田植えにも参加していたが、そのときは水の張った田んぼに入る恐怖と人見知りからなかなか活動には参加できなかったが、今回のCくんの鎌を持つ顔は真剣そのものである。最初は私が稲の上のほうを持ち、その下に彼が両手で持った鎌をあてて引いていたが、私が記録用の写真をとったり、刈り取った稲をまとめたりする際に少し手を離す場面があると、片手で稲を持ち、もう片方の手で鎌を持って刈っていた。なかなか稲が切れないと、また両手で鎌を持とうとするので、そのときには私が稲の上部を倒れないように支えるようにした。ものすごい速さで一帯の稲を刈り取ると、「もうないか」と言っとうろうろとあたりを歩き始めた。奥のほうにはまだ稲が残っていたので、一緒にそちらのほうに行ってみると、部分部分刈り取られ、そこだけ道のようにになっているところがあった。少しの間、鎌を持ったまま稲を刈るでもなく歩き回り、自分の背丈ほどもある稲に囲まれている様子は、まるで自然の迷路を楽しんでいるようだった。その後また稲を刈り始めるが、他の男の子たちが持ってきたカエルに興味を示し、あぜの方へ行く。するとあぜに生えている草を切るようにして、「はっ」と掛け声をかけながら鎌を振り回していた。

稲刈りが終わると、再びブルーシートのところにみんなで集まり、学生の作った紙芝居を見たり思い出写真の記入をしたりした。思い出写真をかいているとき、Cくんはお母さんから今日の感想を聞かれると、「かまでぎこぎこがつかれちゃって、それで…」と笑顔で今日の頑張りをお母さんに報告していた。Cくんの稲刈りの様子から、彼の鎌に対する興味や関心はとても強いものであったことが窺われる。鎌は刃物であるため、安全面には十分な注意を払わなければならない。しかし、危険だからといってこれを遠ざけてしまうのではなく、使い方さえ説明すれば、自分なりにその性質や仕組みに気付き、使いこなせるようになるのだということを彼の姿から教えてもらうことができた。それと同時に、本物に触れる大切さも実感した。

### 3. 考察

「信大茂菅ふるさと農場」での幼児・児童の活動の様子を観察し、分析・考察した結果から、まず第1点に、田んぼでの活動は幼児にとっても、児童にとっても、どの発達段階の子どもにとっても興味や関心を引き出すものが存在すると言えよう。農作業体



験や草花遊び、学生との交流、生き物との触れ合いなど、1年を通した活動の中で子どもたちは多くの場面で心を動かし、興味や関心を抱いたものに対して積極的に関わろうとする姿が見られた。これは、学びの根本であり、生きる力につながるものでもあると同時に、感性を育む上で、貴重な体験になったと考える。

また2点目に、田んぼは総合的な発達を促す環境としても優れているということが言える。これについては、『幼稚園教育要領』を例にとり説明したいと思う。『幼稚園教育要領』では幼児の発達の側面からまとめて5つの領域を編成している。これらは、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」であり、環境を通して総合的に指導されることが望ましいとしている。「信大茂菅ふるさと農場」での活動は挨拶に始まり、農作業や遊びを通して体を動かしたり、人とかかわったり、自然とかかわったりする。そして、その中で感じたことを最後に思い出写真などに表現するといった、上記5つ全ての領域を含んでいるのである。総合的な発達は環境を通して行われるべきであり、その環境として田んぼはとても優れていると考える。

3点目には、「信大茂菅ふるさと農場」での活動は、自然体験を中心にしたものであったが、それと同じくらい人とかかわりが重要な柱であったということが言える。なぜなら、農作業や自然遊びというものは、人から人へと伝えられることで今日まで残ってきた文化である。よって、「信大茂菅ふるさと農場」での活動も、人と人とかかわりを切り離して考えることはできないのである。活動の度に地域の農家の方やJAの方々に参加していただき、農具の使い方や作業方法、安全面について教えていただいた。学生や友達とは協力をしながら共に作業を行い、異年齢児と遊ぶ場面では、幼い子どもを思いやる姿や、年上の子どもたちに追いつこうと真似する幼い子どもたちの姿も見られた。最初は、自然体験を目的に応募してきてくれた子どもたちも、自然体験や農作業を通して、人と人との交流も学ぶことができたと思われる。このことは、核家族化や少子化などの影響で、老人や異年齢児との交流が減ってきている現代の子どもたちにとって、貴重な体験となったと考える。

#### 参考文献

- ・ 井上勝・深田昭三・山崎晃・米神博子・林よし恵・道下真穂・松本信吾「幼児の自然環境に対する関わり方の特質とその発達の变化」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第26号、1998年
- ・ 海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第2号、2001年
- ・ 土井進「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部・附属共同研究報告書』2001年
- ・ 富田陽子「幼児期にみる遊びのメカニズムと援助のキーポイント(Ⅱ)」『千葉経済大学短期大学部初等教育科学研究紀要』第22号、1999年、第23号、2000年
- ・ 深田昭三・堀池美菜子・松本信吾・井上勝・山崎晃・伊藤順子・米神博子・林よし恵・道下真穂「幼児の自然体験と心情世界」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第27号、1999年
- ・ 文部省告示174号『幼稚園教育要領』、175号『小学校学習指導要領』1998年
- ・ 安江多輔『レンゲ全書』農山漁村文化協会、1993年

## 8. 人間関係、そして「信大YOU遊広場」

—出会うことが出来た人から学んだこと—

西澤俊輔 理数科学教育専攻 3年

### Human Relationships And Shin-dai YOU-Yu Plaza

—What I Learned from People I Met—

NISHIZAWA Shunsuke : Major, Science and Mathematics Education, junior

This paper deals with the people I met at YOU-Yu Plaza farms and “Play-park” held by Shinshu University for elementary school students. It considers what is important for good communication and the meaning of human relationships.

【キーワード】 牟礼ふるさと農場 茂菅ふるさと農場 プレーパーク 他人との関わり  
スタッフ 地域の方々 親と子 あいさつ

#### 1. はじめに

わたしはこのYOU遊広場において、とても多くのことを学ぶことができた。

一番わたしに影響を与えたことは、他人と関わるということである。YOU遊広場の活動に参加すれば、自然と多くの人間と関わることになる。それはスタッフという仲間だったり、参加者だったり、その親という場合もあったし、協力してくれる地域の人たち、といったようにさまざまである。

スタッフとの関わりについてであるが、スタッフは主に同じ信州大学の教育学部で学んでいる仲間である。教師になるという同じ夢をもっている場合が多く、同じものを目指すということであまりうまく話がまとまることも多かった。しかし、逆にぶつかり合うときもあった。激しい口論となったときもある。しかし、それが自分にとって、また相手にとってもマイナスであったかという、そうではなかったように思う。むしろ自分以外の他人と口論することによって自分の考えを基にまとめようとする力、自分の意見をはっきり相手に伝え、相手を納得させようとする力、そして、相手の意見を聞くことによって自分の考えに新しい展開が見えたりと、自分の心が豊かになるということ、などプラスになっていることのほうが多いように思う。それに、自分も相手も、はっきりものを言うという行為をして初めてお互いを分かり合えるということもあるのではないだろうか。お互いの意見をぶつけ合ってお互いが磨きあってさらによいものが出来上がるということになるだろう。だからといって、ぶつかり合うことが良いというわけではない。意見がうまく合えばそこは協力してやっていけばよいのである。同じことを考えながら一緒に活動できる仲間がいるということが、喜び、励みになるだろう。また、いろいろな意見を取り入れるという点から見れば、信大は日本全国から学生が集まってきているため、その人たちと交流することでとても広い視野をもつことができるようになると思う。スタッフは先輩後輩という違



いはあっても学生という立場は同じであるし、年齢も近いので本音を語りやすいと思う。だから、ぜひこれからも学生同士の交流は大事にするべきだと思う。

## 2. 農場において

参加者との関わりについてであるが、このYOU遊広場の特徴として参加者は一年間通しての登録である。だから、活動しているうちにスタッフはみんなの顔や名前を覚えるし、参加者も他の参加者の名前や顔、スタッフの名前や顔を覚えてくれる。そうすると、二度目三度目の活動ともなれば子どもたちが来ると「〇〇ちゃん、おはよう！」という学生からのあいさつがあったり、「あー〇〇だー！」と子どもたちが笑顔で駆け寄ってきてくれたりする。相手の顔を見るだけで、自然と楽しい気分になって、声が出てしまうのである。そんなときは心と心のつながりが持てているような気がしてとてもうれしくなる。しかし、そのようなうれしさを味わえるのは仲良くなってからに限ったことではない。各プラザの最初の活動だったり、一年間を通しての登録とはいっても、「話を聞いた」と一年の途中から登録をしてくれたりして初めて活動に参加してくれる子どもたちは当然、緊張している。初めての活動のときはスタッフですら緊張しているのである。そんなぎこちない動きの中でも何とかうまく打ち解けるようにと「おはよう！」と声をかけたり、「一緒に遊ぼうよ！」と誘ってみたりしたときに、最初は母親の陰に隠れてしまうような子が、母親から離れて一緒に活動できたときは自分を信用してくれたのかなと、思ってうれしくなる。ただ、このときに自分はひざを折ったりして子どもの顔と自分の顔を同じ高さにもってくることが大切である。自分は立ったままで、いくらやさしい声をかけても子どもたちには上からの圧迫感のほうが強いのだろうか、なかなか心を開いてはくれない。小さな子どもの場合はむしろ余計に親の陰に隠れてしまう。よく子どもと同じ視線で、という言葉<sup>を</sup>聞くが、それにはまず物理的に視線を下げる必要があるということである。

このようなちょっとしたことでも、子どもは感受性が豊かなためにしっかりと感じ取ってしまうのである。同じようにわたしたちはなんでもないつもりでも、子どもにとってはとても重要な問題になりえるものがある。このエピソードは、私自身が体験したものである。牟礼ふるさと農場での初めての活動のときに、それ自体はうまくいった。そして、活動が終わったあと学生スタッフが片付けなどをしている間も家の人の迎えが来ないで、わたしたちと一緒に遊んでいる子どもがいた。子ども一人という状況と、その一日でそれなりに仲良くなれたという勝手な思い込みから、わたしはその子に対して冗談のつもりであることを言ったのだが、それはその子にとっては、とてもひどい、ナイフのように心を傷つけるものとなってしまった。帰り際にその子は泣いてしまうほど傷ついていた。そしてその後一度もその子は活動に参加してくれていない。それほどその言葉は言われた子自身や親を傷つけてしまったのである。このときわたしはその旨を土井先生に話し、お詫びの電話を入れていただき、自分自身もその日のうちにお詫びのはがきを送った。もちろんこれで完璧だとは思わないが、そのとき最善と思われる対応をしたつもりである。それでもわかってもらえなかったのだから仕方がないと考えることにした。しかし、ずっとどこかで気になっていて、農場パスポートが返ってこないたびにその子のことを考え、自分の行動を悔やんでいた。そして、最後の活動のそばうちが終わったあと、もう一度家までいき、採れた野菜とその子<sup>が</sup>書いた「おもいでしゃしん」を持ってお詫びと来年度の<sup>こと</sup>についてあいさつに行った。すると、その子は笑顔でわたしたちに手を振ってくれて、うれしそ

うに「おもいでしゃしん」などを受け取ってくれた。そのとき初めてわたしも心から納得できたし、晴れ晴れとした気持ちになれた。

このことを通して学んだことは大きく二つあり、一つ目は言葉の持つ力の大きさということである。上でも書いたように子どもはいろいろなことを感じやすいしまた、子どもに限らず自分の発した言葉が思った以上に人を傷つけているものなのである。そのようなことを無くすためにも、ちょっと考えてから言葉を選べるようになりたいと思う。もう一つは、自分が失敗したときにいかに頭を下げられるかということである。人間誰しも自分の非というものは認めたくないものである。しかし、そのときにうそを言ったり、ごまかそうとしたりすると余計に自分の立場は悪くなる一方である。このときもその日のうちに相手に電話をしたり手紙を書いたりしたことによって、一年もかかってしまったが納得できる結果を得ることができたのではないと思う。あのときに土井先生に打ち明けずにいたらこんなにうまくはまとまらずに、もっと大変なことになっていただろう。間違ったことをしてしまうことは誰にでもあると思う。いくら気をつけていてもなくすことはできないだろう。だったら、その後でどれだけ自分の誠意を見せて挽回するか、ということが大切なのだと思った。これらのことに気付くことができたように、失敗とは言ってもそこから学び取ることはたくさんある。ただ気に病むよりも一つの体験として大事にしていくべきなのではないだろうか。

活動していく中で忘れてはいけないことの一つとして、地域の人との関わりがある。わたしがプラザ長を務めた牟礼、茂菅の両農場では特に地域の方との協力が必要不可欠だった。牟礼ふるさと農場では、大学から離れた広大な畑の草取りや、畑の準備など細かい作業は、牟礼村ふるさと振興公社の方にやっていただいた。そうしなければ、とてもじゃないがわたしたちだけでは面倒見切れなかったと思う。また、何か作物を植えるときや、収穫するときにもわざわざ農場まで来てくださって、手順を説明したり、お手伝いをしたりしてくださった。そばうちの時には会場の手配などをしていただきとても助かった。茂菅ふるさと農場ではJAを通じて地主の方から農地を借りたし、田植えを始め、多くの作業のたびに近所で農家を営んでいらっしゃる林部さんのご指導をいただいた。田んぼに稲を植えた後では、水利組合の方に無理を言ってポンプの当番を教育実習からはずしてもらったりした。時には学生にさし入れを持ってきてくれる人もいて、とてもありがたかった。このように、いろいろな人と協力しながらやっていくことはとても大切である。わたしたちはあくまで学生であり、できることには限界がある。他の機関の手を借りなければできないこと、誰かに教えてもらわなければならないことはたくさんあり、そんなときには遠慮しないで協力をお願いすればよいと思う。ただ協力をお願いするだけではなく、こちらからはできる限りの地域貢献ができればそれでよいと思う。何か物で返すというのではなく、わたしたち学生ができることでよいのではないだろうか。採れた野菜をお分けするとか、何か体力的なことで作業を手伝うとかそれで十分だと思う。そういうつながりを持っていく中で、茂菅ふるさと農場に関係している多くの学生は、地域の農家の林部さんととても仲良くさせてもらっている。このような関係はこれからもたくさん持てるようにしたいし、大切にすべきだと思う。

また、いろいろな活動のときに、保護者の方からたくさんのさし入れをもらったこともあった。こちらで準備するものの足しにと家から持ってきてくれたりしてくれて、わたしたちはとても助かった。このようなちょっとした心使いはわたしも見習って、今後わたし



自身も気が付けられるようになっていと思う。

### 3. プレーパークにおいて

もう一つわたしが今まで主に関わってきたものに、プレーパークがある。プレーパークについての説明は別にあるのでそちらを参考にしてもらいたい。こちらでも多くの人との交流があり、とても考えることが多かった。プレンジャーとしてわたしはあの場にいるわけだが、いつもというわけにはいかないが、学校が終わってから、お昼を食べてから、それぞれ子どもたちは遊びにきてくれる。毎週木曜日と土曜日にオープンしているので、ほとんど毎日遊びにきている子はとてもなれた様子で遊びにくる。そういった場合は、わたしたちも子どもたちも大きな声でいつものようにあいさつをして、それぞれ好きなことをして遊ぶのである。たまに友達をつれて遊びにきてくれる子もいて、そんなときには両方を知っている子を中心に自己紹介があって、お互いの名前を覚えてから、遊ぶようにしている。このように、ある程度なれている場合には、子どももわたしたちプレンジャーもとてもやりやすい。しかし、初めて遊びにくる子たちにとってはあの広くて、大学生たちのいるスペースは入りにくらしく、出入り口のところでもぞもぞしていることが多い。そうしたときに、プレンジャーの出番である。せっかくプレーパークに興味をもってきてくれたのだから楽しく遊んでもらいたい、そんな気持ちを持ってわたしたちが呼びに行くのである。ここでプレンジャーが気負いしては始まらない。子どもたちは勇気を持って遊びにきてくれたのだから、それに対してわたしたちも勇気を返すように一言話しかけるのである。はじめのうちは緊張もしたし、何を言ってよいのかも分からなかったが、とても簡単なことだということが分かった。笑顔で「おはよう」の一言でよいのである。このことは農場についてのときにも書いたが、それほどあいさつというものは大切なのだということである。その一言さえ言えればそれまで硬かった雰囲気はやわらかくなる。それから名前を教えあえば、もう今まで遊びにきていた子どもたちと変わらない。思いっきり遊べるようになる。

プレーパークとは、基本的に何をしても自由だし、自分のやりたいことができる場を目指している。しかし、実際に遊びにきている子どもたちを見ていると、自分が同じ年頃だった時とは少し違っているように思える。それはどんなときかといえば、自分から遊べないということである。それでも最近子どもたちが自分から何かを始めることも多くなってきたが、こちらから「〇〇しよう」と持ちかけなければ「やることないから帰る」といって家に帰ってしまう子が何人もいたのである。プレーパークには何か作れるようにと木切れや、とんかち、竹なども用意してあるし、ある程度の広場もある。それだけあったら工作や、鬼ごっこ、草花もあるときにはそれを使った遊びなど、何でもできると思っていた。家からボールをもってきて、バットとグローブも持ってくれば野球だってサッカーだってできるはずだ。なぜ自分から遊ぶことができないのだろうか。プレーパークは自分が思ったことを何でも形にできる場所なのだから、もっと自分の自由な発想を生かしてもらいたい。そうやって自分で遊びを創造することを通して、自ら考える力が育っていくのだと思う。そして、いろんなことを体験し、学び取ってってもらいたいと思う。焚き火をしたり、思いきり走り回ったり、普段ではできないようなことができるのだから、それをぜひ体験してもらいたい。また、それができるようなプレーパークを目指していきたいと思う。

自分のやりたいことができる場所について、最近困っていることがあり、みんなで話すこともあった。わたしたちプレンジャーに対して主に子供たちはいたずらをしてくるわけだが、それがわたしにとってどのようなつもりでやっているのか判断しにくいのである。子どもたちの力はそんなに強いわけではないのでたいして痛くないから大概のことは笑ってすませられる。それに、わたしたちだからこそ大丈夫と思ってやっていることならば、一種の愛情表現として受け止めてあげたいと思う。しかし、たまに木の棒を使ったり、噛み付いたり、行き過ぎていると思われることや、プレンジャーに対して、首や手、腰にひもをつけてまるでペットや奴隷のようにしようとするというような、見ていてあまり良い気のしないようなことについてはどうすべきなのか迷うのである。もちろん周りの子どもたちに危険性がある時や、他の子に対してひどいことをしたときにはしっかりと注意している。しかし、それ以外の場合、上にもあるように愛情表現としてわたしたちは受け止めるべきなのか、それとも行き過ぎた場合にははっきりと拒否すべきなのかいつも答えが出ないままなのである。

どんなことでも子どもの愛情表現として受け止めるという意見も分かる。というのも、子どもたちがそのようなことをするのはわたしたちプレンジャーだけで、しかもプレンジャーの中でも力の強そうな男子や、女子の中でもごく限られた人なのである。ということは、子どもたちはしっかりと相手を見極めて、自分なりに考えながら遊んでいると言うことではないだろうか。そのように子どもたちが考えながらやっていくことやめさせてしまうことをわたしたちは望んではない。むしろ、そこから遊びの輪が広がっていくのであれば、わたしたちが多少の犠牲になるくらいは何てことはない。しかし、そうやって良い方に良い方にと考えて、全てを許すことにわたしとしては不安を感じるのである。なぜならば、いくら考えながらやっているとはいえ、暴力を許してしまっている状況をそこに作り出してしまっているのである。はたしてそれで良いのだろうか。プレーパークにはまだ小学校にも行ってないような小さな子どもも遊びに来る。そのようなこれから思考能力が成長していく子の前で、木の棒を振り回したり、人に噛み付いたり、というような行動はあまり良い影響を与えないものだろう。むしろ、そういった行動は許されることなのだと間違った認識をさせかねないのではないだろうか。周りで見ている人間だけではなく、やっている本人でさえ、そのうちに他人に対して叩くなどの行為はしてもいいものなのだと勘違いしかねないような気がする。普段行っていることは、ふとした拍子に思わぬところで出てしまうものである。そうならないためにも危ないことは危ない、痛いことは痛い、自分が嫌なことは人も嫌なのだというをはっきりと伝えて、やらないように言うことの方が本人にとっても、周りにとっても必要なことだと考えている。

このような話し合いをする中で、最近わたしが思うのは注意のしかたの問題ではないか、ということである。自分が嫌だと感じたことに関して遊びの延長のように、注意しているのかそうでないのかわからないような言い方では、子どもたちに本当に伝えたいことは伝わらない。注意するときにはしっかりと子どもの目を見ながら、理由を言ってからやめるように言うべきだと思う。ただ「やめて」というだけでは子どもは納得してくれない。子どもだからといっていい加減に扱って良い訳がない。同等に接する事で始めて相手に伝えられるのだと思う。このことはある人の受け売りなのだが、自由とわがまは全く別のものである。自由になんでも出来るからこそ、そこに関わるもの全てに共通のルールが必要なのである。そして、それは自然と発生するものである。それに逆らうものには何らかのべ



ナルティーがあるだろうし、こちらが何かしなくてはと変に構えるよりは、自然のままで行けば逆にうまくいくようになるのではないだろうか。

もう一つプレーパークにいて感じたことがある。それは親の意識の違いである。最近の子供たちは外で元気に遊ばなくなったとか、家の中にばかりいる、というようなことを耳にしたことがあるが、その原因の一つとして親からのプレッシャーがあると考えられる。プレーパークに遊びに来ている子どもの中にも泥遊びが好きで思いっきりやっている子や、その周りで羨ましそうにみているだけの子がいる。周りで見ているだけの子に対して一緒に遊ぼうと誘っても母親に怒られるからいやとか、この前汚して怒られたからいや、と言うのである。一度子どもを連れて遊びに来た母親が、子どもが泥遊びをして服が汚れている姿を見て、「もうここには来られないね」と言うことがあった。また、別の母親においては、自分の子どもに「走ったりしておいで」と言うておきながら、土に触ろうとすると「汚いからそんなことしないで」と言うのである。いったい子どもはなにをして外で遊べばいいのか。服が汚くなっただけ、洗えばすむことではないのか。子どもたちは自分で見るもの、触るもの全てから様々なことを吸収していくのである。何が子どもにとって必要なものだったのかなんて誰にもわからないのである。だったら大人の勝手な判断で取りあげてしまうことは言語道断である。親やわたしたち教師を目指すものというような、子どもと関わるものとしてはできる限りの手助けと、体験できるチャンスを与えてあげたいと思う。いろいろと偉そうなことを書いてきたが、結局わたしはプレーパークではプレーンジャーニッシーとして子どもたちと思いっきり遊ぶことが楽しくて仕方がない。

#### 4. 最後に

わたしはこの二つ以外にも、メンタルフレンドで城山中間教室に通っているし、長池診療所の健康祭りにもお手伝いをしに行ったこともある。どこに行ってもいろんな個性を持った素敵な人との出会いがあった。その度にここでは書ききれないような体験をし、いろんな事を学ばせてもらった。教師を目指しているわたしとしては、今後の生活に必ず生きてくるであろう貴重な体験だったと思っている。今のこの学生という立場でしか知ることができないこと、出来ないことはまだまだたくさんあり、それが出来る場所がこのYOU遊広場だと思う。ここでは自分の可能性を思う存分発揮できる。そしてそれを支えあうことが出来る仲間もいるし、サポートしてくれる素晴らしい先生方もいる。言葉は良くないが、これからの学生にはもちろん、私自身もまだ一年という時間があるのでYOU遊広場を利用して、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思う。また、シンポジウムや、全国フレンドシップ活動を通しての他大学生との交流はぜひ大事にしたいものである。他の大学の活動を通して自分たちの活動を見直すことによって、お互いがさらによいものになっていくからだ。また、他大学の学生と意見の交流することによって活動の幅も、自分の視野も広がる。自分が楽しむという面でも大切にしていきたい。

この一年間、頼りない農場長としてやってくることができたのは素晴らしい先生方、かけがえのない仲間たち、そして地域の方々が惜しむことなく協力して下さったおかげだと思っている。みなさんにこの場を借りてお礼をしたいと思う。本当にありがとうございました。

## 9. 農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力

### —「信大茂菅ふるさと農場」の実践の分析—

鹿子木愛 教育実践科学専攻 4年

## A Practice of the Effect of Agricultural Experience for the Growth of Children

### —Analysis of Practice at Shinshu University Farm “Mosuge-Furusato”—

KANAKOGI Ai : Major : Educational Science, senior

【キーワード】農作業体験 自然体験活動 信大茂菅ふるさと農場

#### 1. 目的と方法

子どもたちの自然体験が不足していると言われている今日、子どもたちに自然を感じてもらおうとあらゆるところで自然体験活動が行われている。そして、自然体験活動の1つである農作業体験も注目を集めている。子どもたちは地域で行われている農作業体験を通して、何を感じ、何を学んでいるのであろうか。「信大茂菅ふるさと農場」の実践から、農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力を明らかにしていく。

平成14年度の「信大茂菅ふるさと農場」に参加している子のうち、小学生44人を対象とした。平成14年度は、田植えとどろんこ遊び・田の草取りとフナを放す・かかし作り・稲刈り・脱穀を行い、年間を通してお米作りに取り組んできた。子どもたちの活動の様子を観察し、思い出しゃしん<sup>(1)</sup>とアンケートを分析し、考察する。

#### 2. 農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力

子どもたちが農作業体験を通して学んでいることは一人ひとり違うことが分かった。これは、同じ活動をしていても、思い出しゃしんに表われてくるものが違うこと、家に帰ってから家族に話している内容が違うことなどから明らかである。この点を踏まえて、農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力として次の7点が挙げられる。

##### (1) 多様な人とのふれあいの中から学ぶ

農場には、同年齢の友達はもちろん、異年齢の友達や大学生、地域の方やJAの方が参加している。このような環境の中で農作業体験をすることを通して、子どもたちはたくさんのことを学んでいる。

6月2日には、田植えが行われた。手作業による田植えが終わった後、田植えを終えた田を見ながらお昼ごはんを食べようということで、坂を登り、田全体が見渡せる場所での昼食となった。きれいに植えられた田を見ながらの昼食は本当に気持ち良かった。この時の様子について、思い出しゃしんには次のように書かれていた。「田植えではなえを植える



のが大変でした。おべんとうを食べるため、上にのぼった。田植えを終えた田んぼを見ると、とてもうれしかった。上から見るときていにそろっててよかったです。」(5年生I・Aさん)。田植えをすることは、I・Aさんにとって大変なことだったけど、大勢で1つのことをやり遂げた後の達成感は大きく、お昼ごはんを食べながら満喫したのだ。また、稲刈りの時のI・Aさんの思い出しゃしんには、「今日はいねかりをしました。なん回もやったことがあるけどこんなに大ぜいでやるのははじめてでした。手でやったのにとっても早く終わりました」と書かれている。I・Aさんは、今までにカマを使って稲刈りをしたことがあるけど、今回は大勢でやったので予想以上に早く終わったと感じている。みんなで協力しながら、この田んぼの稲を刈ったのだという達成感が表われている文である。

2年生のK・Nさんは、草取りの時の思い出しゃしんに、「今日、草とりをした。みんなと草とりをしてたのしかった。足がきもちわるかった。あめんぼとかいっぱいいてきもちわるかった。でもみんなでやってたのしかった」と書かれている。K・Nさんは、土の感触や田んぼにいるアメンボを気持ち悪いと感じているが、みんなで草取りをすることで今回の活動が楽しくなったと感じている。また、一緒に活動をした友達や大学生や先生の絵が名前入りで描かれていた。このことから、K・Nさんは友達や大学生と一緒に活動すれば、どんな活動でも楽しくなることを感じていることが分かる。

脱穀は千歯こきと足踏み脱穀機を使って行った。子ども6人、大学生3人で1つの班を作り、各班に1つずつ千歯こきがあった。1年生のO・Tくんは、待っている時も友達のやっている様子をじっと見つめており、自分の番になるととても嬉しそうにやっていた。そして、自分の番が終わると次の自分の番をとても楽しみに待っていた。O・Tくんは千歯こきでの脱穀が楽しくて仕方なかったのだ。でもその気持ちを抑えて、きちんと順番を守ることができていた。O・Tくんの様子から、子どもの人数に合わせて千歯こきを増やすのではなく、数は少なくとも、何人かで1つの千歯こきを使うことで、子どもたちは我慢すること、譲り合うことの必要性を感じてくれていると思った。

どの活動でも、年下の子の面倒を見る姿や、年上の子の真似をしてみようとする姿が見られた。異年齢の子と一緒に活動することで、子どもたちは異年齢の子との関わり方を学んでいる。

私たちは人と関わらずには生きていけないし、良い人間関係は人生を楽しくも豊かにもしてくれる。農作業体験を通して、良い人間関係を築いていく方法を子どもたちは自然に学んでいるのである。

## **(2) お米ができるまでの過程を知り、食べ物を大切にできるようになる**

子どもたちへのアンケートから明らかになったことを述べる。活動に参加する前、お米の作り方を知っていましたかという質問に対しては、「とてもよく知っている」「少しだけ知っている」と答えた子は38%だった。そして、田植え・草取り・かかし作り・稲刈り・脱穀という一連の流れを経験した後、「とてもよく知っている」「少しだけ知っている」と答えた子は83%になった。この結果から、「信大茂菅ふるさと農場」での活動を通して、子どもたちはお米ができるまでの過程を知ることができたことが分かる。また、活動への参加回数別に見てみると、5回参加した子の75%、4回参加した子の57%、3回参加した子の20%、2回参加した子の25%、1回参加した子の0%が、活動後に「とてもよく知っている」と答えている。このことから、継続的な活動の意義も明らかとなった。

保護者の方に、「活動に参加する前と後では、お子さんのお米に対する意識は変わりましたか」という質問をした。その結果、「ごはんの時、白いお米だけの味を味わうようになった。ふりかけなどをかけずにおいしそうに食べるのです」「ちゃわんに残ったごはん粒を、じいちゃんばあちゃんが作った米だから残すなと言われると、一粒残さず食べるようになった。自分たちも作業体験したからこそと思う」「お米作るのって大変なことなんだね。ご飯大事にしなきゃ。とつぶやいていました」「新聞に載っていた脱穀を見て、私もやったんだよなー。大変だったよな。お米を大切にしよう。と言っていました」などの回答が得られた。このことから、子どもたちが食べ物を大切にしようとしていることが明らかとなった。

5年生のY・Tくんの思い出しゃしんには、「今日は最後の仕事のだっこくをしました。あしぶみだっこく機はやったことはあったけど、少しむずかしかったです。でも、せんばこきは力があるので、むずかしかったです。でも、米になってうれしいです。よかったなあと思いました。ありがとうございました」と書かれていた。この文から、Y・Tくんはお米作りの大変さと喜びを感じていることが分かる。

これらのことから、子どもたちは実際にお米作りを体験していく中で、お米が作られるまでの過程や苦勞を身体で覚えたり、農家の人の偉大さに気付いたりして、それが食べ物を大切にしようという気持ちにつながっていくのではないかと思う。食べ物は私たちが生きていく上で欠かせないものであり、食べ物を大切にできるようになることは、豊かな心を育む上で重要である。

### (3) 自然とのふれあいの中から学ぶ

自然は自分の体で実感としてとらえるもので、自然から学ぶことは一人ひとり違う。ゆったりとした気持ちになれたり、心が落ち着いたり、自然というのは確実に何かを感じさせてくれる存在である。五感を使って土とふれあい、生き物とふれあい、田んぼの風景を感じることで感性が磨かれていく。自然とのふれあいは、豊かな心を育てるために欠かせない。

田植えとどろんこ遊びの日、子どもたちの思い出しゃしんには、太陽や空や土のように自然に関する描写がたくさん見られた。この日の活動は土とのかかわりをたくさんした活動だったので、土を描いている子がどの学年も多かった。また、太陽や空を描きたくなるような天気の良いさでもあった。思い出しゃしんに自然のものが表われてくるということは、子どもたちも自然を感じているからだと思う。

### (4) 体験することで、自分に自信が持てる

脱穀の日に使った千歯こきは、実際にやってみると思ったより難しいことが分かる。刃のところに稲穂をひっかけて引くのだが、かなりの力がある。「せんばこきは力があるので、むずかしかったです」(5年生Y・Tくん)、「せんばこきでもちからがなきゃできなかったです」(2年生H・Yくん)、「いねをひっぱるとき、力がいりました」(2年生M・Sさん)。このように、思い出しゃしんを見ても、子どもたちの多くが難しかったと感じていることが明らかである。実際に千歯こきを使っている子どもたちの様子を見ていても、「かたーい」「難しーい」と言いながら、かなり苦勞していた。しかし、ほとんどの子が諦めず、束を減らして少しずつやってみるなどと学生にアドバイスされながら取り組んでいた。また、「千ばこきをやる時、とってもお米がとれるかんじよくがしました。全部とれるととっ



ても気持ちがよかったです」(5年生I・Aさん)、「せんばこきでだっこするととても時間がかかったけど、しっかりお米がとれました」(4年生S・Aくん)のように、難しかったけどその分お米が取れた時には嬉しかったという気持ちが表われている。苦勞の分だけ喜びも大きいし、自信にもつながる。

このように、子どもたちは「信大茂菅ふるさと農場」で、今まで経験したことのないことを体験している。初めは戸惑いながら不安気にやっている子も多いが、友達の姿を見たり、大学生からの励ましの言葉をもらいながら、田植え・草取り・かかし作り・稲刈り・脱穀を経験し、自分にもできることが分かる。このような体験が、子どもたちの自信へとつながっていくのだと思う。

#### (5) 地域を知り、郷土愛を育む

自分の住んでいる地域で農作業体験をすることで、この地域に適している作物を知ることができる。また、地域にはどんな人が住んでいるのかを知り、自分の存在を地域の人に知ってもらう機会にもなる。地域で思い出に残るような楽しい経験を積んでおくことが、郷土愛を育むことにつながると思う。

#### (6) 自分の気持ちや活動の様子を表現できる力がつく

思い出しゃしんには、「きょう草とりたのしかったよ。きょう食べたじゃがいもがおいしかったよ。きょう一日たのしかったよ」(2年生M・Sくん)、「ぼくは、かかしを作りました。ぼくは、図工がとくいです。思ったよりは、かんたんでした！うまくつくれてよかったです」(4年生K・Yくん)などのように、活動を終えて自分がどんな気持ちでいるのかを表現している記述が多く見られる。また、アンケート結果からは、今日の活動の様子や感想を親に話している子どもがたくさんいることが明らかになった。自分の気持ちや活動の様子を表現することは大切なことである。これは生活科が目指している目標でもある。

『小学校学習指導要領解説生活科編』には、学年の目標の主旨として、「活動や体験したことを表現できるようになること」<sup>(2)</sup>と書かれている。

#### (7) 夢中になれる体験ができる

活動をしている子どもたちの表情を見ると、ほとんどの子はその活動に夢中になっていることが分かる。また、アンケートからも子どもたちがお米作りに対して夢中になっていたことが明らかになった。何かに夢中になれることで、さらなる探求心が子どもたちの心の中に芽生えることとなる。今の自分に満足せず、常に向上心をもつことにもつながり、これは生きていく上でも大切なことである。また、「信大茂菅ふるさと農場」に参加している幼稚園の子から小学生の子まで、全ての子が何かに夢中になっている姿から、田んぼにはどの学年の子も夢中になれるものが存在しているとも言える。

### 3. 終わりに

最後に、思い出しゃしんの分析・考察を行なって気付いたことを述べる。

#### (1) 低学年と高学年の違い

全体的な傾向として、1・2年生の子の思い出しゃしんには、「きょう、〇〇をしたのしかった」、「〇〇をしました。△△もしました。おもしろかったです」というような表現が多く見られる。一方、5・6年生くらいになると、「今日〇〇をして、△△だったので楽しかったです」のように、楽しかった理由も書けるようになる。また、5・6年生は

このような感想だけでなく、田んぼで発見したことや、次回への期待なども書いている子が多いという印象を受けた。

### (2) 文字には表われてこない子どもの気持ちを考える

今回、119 枚の思い出しゃしんの分析・考察を行なって、絵や文に表わされたことだけを見ていても、子どもたちの思いを理解することは難しいことを実感した。特に低学年の子に関しては、思い出しゃしんに書かれた文を何度も何度も読み返したり、絵をじっくりと見ることを通して、文字にはなっていない子どもの気持ちを考えることが必要である。その時に、子どもたちが活動の時に見せた表情やつぶやきなども考慮できると、より深く子どもたちの気持ちを理解することができる。一面だけで子どもを判断するのではなく、様々な見方をしてみるという姿勢が必要だと感じた。

### (3) 田んぼには子どもたちの興味・関心を導き出す題材がいっぱい

思い出しゃしんには、子どもたちの心に残ったことが素直に表われてくる。私は、思い出しゃしんの分析・考察を通して、同じ活動をしていても、子どもたちの心に残ったことはそれぞれ違うことに気付いた。言い方を変えれば、田んぼには子どもたちの興味や関心を導き出す題材がいっぱいだとも言える。

## 4. 参考文献

- ・今西祐行『土ってあったかいね』岩崎書店 1994 年
- ・宇根豊『「田んぼの学校」入門編』農山漁村文化協会 2000 年
- ・海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第 2 号 2001 年
- ・門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書 1999 年
- ・志村昌之・土井進「農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ支援」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第 3 号 2002 年
- ・土井進「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部・附属共同研究報告書』2001 年
- ・豊島安明『子供たちに感動体験を』信山社サイテック 2001 年
- ・中島克己『小さな田んぼから生まれた大きな夢と感動』文芸社 2000 年

他 20 冊

## 5. 引用文献

- (1) 思い出しゃしんとは、その日の活動が終わった後、参加した子どもたちが今日の活動の様子や感想を絵と文に表わしたものである。形式にはこだわらず、子どもたちに自由に描いてもらっている。活動の最後に描くので、毎回十分な時間が取れず、子どもたちは 10 分くらいで描いている。しかし、考え方を変えてみると、短時間で描くからこそ、本当に子どもたちの心に残ったことが絵や文に表われてくるのではないかと私は考える。
- (2) 文部省『小学校学習指導要領解説生活科編』平成 11 年 5 月、18 頁。



## 10. 教材としての農業

那須紋子 生活科学教育専攻 3年

### The Aguricultuer for Material of Education

NASU Ayako : Major : Life sience education, junior

【キーワード】 茂菅ふるさと農場 人集め 玄米 フナっこ 臨床の知

#### 1. はじめに

私がこの信大YOU遊広場に初めて参加したのは、大学二年の一月に行われた茂菅ふるさと農場のもちつきである。ずっと教育学部に來たら、こどもと関われるような活動をしたかったと思っていたのだが、なかなか踏み込めず、ずっと活動をやっている友達に「私も実はやってみたい」ということを話していたらこのもちつきに誘われ、ほとんど準備にも参加せずに当日いきなり参加したのだった。初めての参加ということで、他のスタッフの学生の配慮で、始めに一番こどもと関われる受付係を任された。しかし始まってみると係の仕事をごなすことばかり考えてしまい、こどもに自分から話しかけたり仲良くなって遊んだりできない私がいた。先輩に「もっと向こうまで迎えに行って行った方がいいよ。」と言われ、迎えにいったみたが、上手く話しかけれずこどもに無視される。ガムテープの名札をつけるため名前をきいてもおしえてくれない子、書いて貼ってもすぐにとってしまう子、「危ないから降りよう。」と呼びかけても積み重ねてある机から絶対に降りない子、疲れたと言っても「もっと!」と言っておんぶをせがむ子。一年間ずっと学生と一緒に活動してきた茂菅ふるさと農場のこどもたちは、私が今まで知っていたこどもではなかった。浪人時代、教育学部に行くことを迷ったとき、教師である母親の小学校に見学に行かせてもらった。そこでは、休み時間になると何者かもよく分からない私のところに、私が何もなくてもワーっとこどもたちが来てくれて、自分が描いたマンガを見せてくれたり、教室移動のときにわざわざ案内してくれたり、とても素直で良いこどもたちとふれあい、「やっぱり学校っていいな。教師っていいな。」と思い、教育学部に入学した。しかし、そこでのこどもたちのイメージが茂菅ふるさと農場でくつがえされたのだ。茂菅ふるさと農場のこどもは本音でおつかってくる。もちろん母の小学校のこどもたちの姿も本当のこどもの姿であるだろうが、もちつきに参加してみて、それはごく表面的な姿にすぎないように思えた。母の小学校でのこどもとのふれあいの中で、私は一度も「困らせられること」がなかった。しかし、もちつきで私はずっと「困られられっぱなし」だった。茂菅ふるさと農場のような学生による一年を通した継続的な活動は、「こどもの本音を引き出す」という作用もあるのだということを実感した。先生ではなく学生、初めてではなくよく知ったお兄さんお姉さんや活動内容。こどもたちの本音にどう対応していくか考えられるという点が、この活動の魅力だと感じた。また、二年次後期の生活科指導法で、「前期は授業で田植えをした」ということをきき、稲を作るという大規模な作業を授業でできたのかと思い、他人

の田で遊んだことはあっても作業をしたことのなかった私は、将来学校で農作業についても指導できるように農作業を行ってみたいと願うようになっていた。そこで茂菅ふるさと農場がその授業で行った田であり、信大YOU遊広場で活動を行っていることが分かり、実際に参加してみて以上のような魅力を感じたので、茂菅ふるさと農場を希望し、農場長となったわけである。

## 2. 土づくりは人づくり

農場長になったのはいいものの、農作業をほとんど体験したことのない私には、何から始めればよいのか右も左も分からない。しかしやりたいことはたくさんあった。私は希望に満ちあふれていたもので、去年はこどもたちを招いての田んぼの活動が、田植え、稲刈り、脱穀というように良いところ取りで、田おこしや草取りや水入れといった地味な作業は全部学生がやっていたということで、今年は一通りの作業をこどもたちと一緒にやりたいということで一年間の活動回数を増やしたり、あれも作りたいこれも作りたいと、様々な野菜や果物をあげ、今年はケナフやヘチマという教材化できるものも作ろうということになった。作物を作るということに重きをおくのではなく、できた作物を教材とし、それを調理してみたり何かを作ったりというように、作った後の活動に重きをおいて、自分たちの教材として作物を作るということもして行こうということだ。しかし、今年は農場の畑の部分も田にすることになり、野菜などを学校のプレーパークで作らなければいけなくなった。広場の端のクローバーがびっしりと生い茂っている大地を耕して、畑作りをすることになった。春休みの企画の段階では集まっていた学生も、授業が始まりいざ畑を耕そうという段階になるとなかなか集まらない。私は学生が集まるのは当然のことだととらえており、学生が集まらないという事態を予想していなかった。農場長になって大変なのはたくさんの学生スタッフをまとめることから始まると思っていた。メーリングリストできちんと呼びかけをしても、集合時間に集まるのは私以外に平均二人くらいで、私ひとりのときもたびたびあった。始めは、みんなはやる気がないという憤りを感じたり、ひとりで作業している姿を見られた土井先生に声をかけられると辛くて涙が出たりしていたが、そのうちスタッフは集まるものではなく、集めるものなのだとということに気づいてきた。

現代の日常生活の中で、たくさんの人間が集まることを必要とし、その作業に集ううちに自然と人がふれあう場ができる空間がいくつあるだろう。何をするにもたいがいのことは、家族内または家族の一部の人間だけで行うことができると思う。それは機械の普及によって、家庭内でも主婦ひとりで家事をこなすことがそこまで大変にならなくなったことにより、家族内で役割分担する必要がなくなったり、田を持っていたも地域の人の協力を求めずとも農作業ができるようになったりしたからだろう。しかし、人間の手で「土づくり」を始めようとするとうとう人間が集まらなければならない。昔は機械がなかったので、田の作業も全部人間の手で行わねばならず、そのためにはやはり人が集まらなければならない。しかし、しかたなく人が集まるのでなく、人の手が必要なときは互いに協力し合うと言う「結いもやい」の精神や、集まって共に汗を流して作業したり、休憩のときにおしゃべりに華を咲かせるという人間同士のふれあいの魅力によって、自然に人が集まるという結果になっていたのだと思う。しかし、現代ではそういう風習は忘れさられ、人が自然に集まることが難しくなってしまった。茂菅ふるさと農場の土づくりに人が集まらないのも、このようなことが原因なのかもしれないと感じた。



今の状況で人を集めるにはどうしたらよいのか。私にできたことは、自分ひとりでもいから諦めずに畑を耕すことによって他の人たちの心に訴えたり、他のプラザにも参加して「結いもやい」の精神を浸透させたりすることだ。そして何より、ただ作業するのではなく作業が仕事と感じないくらい楽しく作業できるようにし、また来たいなと思ってもらえるようにすることだ。このように結果的に自然と人が集まるように、人を集めなければならないのだと分かった。他のプラザへの参加は少ししかできなかったが、以上のように働きかけると少しずつだが人が集まるようになってきた。プレーパークで作業していると子どもたちも寄ってくることもある。こどもなので作業に集中しているのはつかの間、他の事に興味を示す。土を掘っていると「この幼虫はカブトムシの幼虫かな?」「これは何だろう?」と作業とは関係ない話題を持ち出す。そういう気持ちのゆとりが必要なかもしれないと思った。子どもたちは、何をするにも事務的ではなく、その作業を楽しもうとすることができる。私たち大人は、我慢することに慣れてしまって、作業はただ真面目に黙々とすることが当たり前だという感覚があり、このように力を抜いて作業することを忘れてしまっていた。子どもたちに人が集まる作業の基本を教えられた気がした。これは茂菅ふるさと農場の畑だけでなく田の方でも同じである。畑は学生だけで作って食べるのだが、田の方は、50人のこどもたちと一緒に月に一回くらいイベント的に作業を行うのだが、こども50人を安全に作業させるにはたくさんの学生スタッフが必要だし、準備の段階の話し合いにもたくさんの人間の協力が必要だ。当日参加のスタッフは、こどもとのふれあいやイベント内容の魅力によって集めることができるが、話し合いの段階に人を集めることがとても難しかった。そこで、話し合いにも人を集めるには、こども抜きの話し合いにも魅力を持たせるよう、楽しい雰囲気を出しながら作業したり、内容を決めるときに行き詰まらないようあらかじめきちんと考えて用意しておいたりすることが大切なのだ。やることがスムーズに決まってくると心にゆとりが生まれるので、作業に追われることなく楽しく準備することができる。これが実行できたのは12月7日のYOU遊フェスティバルのときで、話し合いへの出席率はそれまでと比べ物にならないほど良かった。

「土づくりは人づくり」と聞いていたが、その意味についてははっきりつかめていなかった。しかしこれまで述べてきたようにして、私なりにその答えを見つけられた気がする。土づくりを通して人が自然に集まり、そこに人間同士のふれあいが生まれる。私は農場長になったことで、人が集まる原点について考え、人が集まる意味や人を集める方法を学ぶことができた。まさに、土づくりを通して、人（ふれあい）づくりを学んだのだ。

### 3. こりゃうマイ！感謝をコメていただくベェリ

12月7日のYOU遊フェスティバルで、私は茂菅ふるさと農場から米を使った講座を出したいと思っていた。しかしずっと迷っていたのは、普段でさえ学生スタッフを集めるのに苦労していたのに、同じ日に同時に講座がいくつも行われスタッフが分散してしまうフェスティバルで、果たして十分な数のスタッフを確保できるのかという不安があったからだ。しかし、スタッフは実行委員の学生たちで集めてくれるという言葉に安心し、講座を出すことに決めた。ずっと活動ごとにスタッフ集めに苦しんできた私は、始めの実行委員の言葉に甘えて、スタッフ集めに対して特に取り組まず、自分から周りに働きかけたりしなかったし、講座名も適当に「Let's 米」というふうにつけてスタッフ募集をかけた。しかし、やはりスタッフの集まりは悪く、始めのスタッフ数をきいたときはただショックだっ



た。フェスティバルの初めての話し合いで、スタッフに自分の講座内容について説明するために、今までの茂菅ふるさと農場での活動後に、子どもたちが書いた感想などを読んでいると、「早くお米が食べたいです。」という感想をかなり前から書いている子が多いことに気づき、「こんなにもこどもたちは、お米が食べられる日を楽しみにしていたのだな。こどもたちは、やっと初めて自分たちで作ったお米を食べられるのに、私はスタッフを集められないでいるなんて、こどもたちに対して何て申し訳ないのだろう。米が食べられると期待に胸を膨らませながらやってくるこどもたちを、精一杯むかえられるように努力しよう。」と思った。こどもたちの声によって目が覚めた私は、まず講座名を考え直した。いくら楽しい講座を考えていても、それをやる前にその楽しさが伝わらなければ人は集まらない。自分が参加者の立場にたって、たのしそうだな、参加してみたいな、と思うような講座名が必要だと思った。そこで考えたのが「こりゃうマイ！感謝をコメていただくベェリ」である。学校の学習でも、こどもたちが学びたくなるような単元名は、こどもたちの意欲・関心を高めるのにかなり有効だと思う。実際、私は講座名を変えてスタッフを募集したら、「楽しそうな講座だね。参加したいな。」という反応が返ってきて、十分なスタッフと参加者を確保することができた。楽しい名前をつけられれば、始める前の段階で、人の心をつかむことができる。

このように大前提である、スタッフと参加者集めに成功したら、次は内容についてである。実習の経験も手伝って、それまでの茂菅ふるさと農場ではあまりやってこれなかった「学習」に焦点を当ててやりたいと思っていた。しかもこどもだけでなく大人でも勉強になるような内容で、かつそれを楽しく行えるような方法を考えたい。今回のテーマは「玄米」だったので、玄米というのがどういうものなのか、どんなパワーがあるのかということを知ってもらうことをねらいとした。まず、脱穀の段階ではまだモミの状態だったコメが、どのようにいつも食べている白い米の状態になるのかという学習をするために、三つずつモミを渡し、三つのうち二つのモミ殻を手作業で取らせ、殻を取った状態のものが玄米ということを伝えた後、さらに二つの玄米のうち一つをつめで削らせ、糠を取り除いたものがいつも食べている白いお米だということを伝え、モミ、玄米、白米の三つの段階を紙にテープで貼らせた。この三つの段階がどのように精米されているのかは大人でも曖昧な人が多いと思うので、こどもたちはもちろん大人も一緒になって真剣に取り組んでいた。その後、玄米の威力について劇を通して楽しく紹介し、次に昔ながらの方法でモミ殻を取って玄米を作る作業に入った。昔ながらの方法とは、一升瓶にモミを入れて上から棒で突付くという方法だが、こどもたちひとりひとりが充分に満足するまで作業できるように、手軽な物でひとりひとりに用意できる一升瓶に代わるものはないかと考え、500ml のペットボトルを思いついた。底が固くないと殻がとれないので、半分に切って底に折り紙で作った箱をはめて手作りモミ殻取りが完成した。これを使って作業させ、できた玄米を白米に二割程度まぜてさらに味を良くするためにサツマイモを入れてご飯を炊いた。また他にも別の炊飯器で、100%玄米のご飯もスタッフの方で炊いておき、玄米だけでも味わえるようにした。そして試食のときには、保護者の方から、「いつもはご飯だけで絶対食べない子どもが、今日はお米の味をじっくり味わうように食べていたのがすごいと思いました。」とか「玄米でもこんなにおいしく食べられるんですね。」というお言葉をいただき、こどもたちにもとても満足してもらうことができた。そして最後に今回の講座で最も重要視していたのが、家庭へのフィードバックだ。今回学習した内容を家庭でこどもたちが紹



介できれば、家の人にも学習内容が伝わったり家族とコミュニケーションする機会が設けられたりしてよいと思うし、またせっかく学んだことをその場だけで終わらせないよう家庭でも学習内容が活かされることが究極のねらいと言えるからだ。そこで、茂菅ふるさと農場の活動で初めて「学習カード」というものを用意した。そこにはモミ、玄米、白米の三つの段階を貼った紙を貼ったり、玄米の威力や自分や友達の感想を書いたりさせ、こどもたちが家に持って帰れるようにした。また、今回作ったサツマイモご飯のレシピとサツマイモと玄米をお土産に渡して、帰ってからすぐにでも作れるようにした。このように実習で考え得たことを生かして活動内容を考えたり教材研究をしたりしたので、いつもより内容の濃い活動を行うことができ、始めて茂菅ふるさと農場の活動を教師の目で学習材料として働かせることができたのではないかと思う。

#### 4. フナっこの話

この茂菅ふるさと農場で大変お世話になってきた林部さんという方がいる。この方は、ずっと農業をしてきているいわばプロの方であり、一年間を通して私たちの活動にアドバイスをしてくださり、作業面でも協力してくださった。この林部さんが、YOU遊フェスティバルが終わり、私たちの一年間の活動が一段らくしたということで、スタッフ一同の前で挨拶をしてくださったときの話しがとても印象的だったので端的に紹介する。

「今年の茂菅ふるさと農場は、新しいことにチャレンジする活動ばかりでいつも驚かされました。特に今年初めて田んぼにフナっこを放し稲刈りのときに成長したフナをこどもたちに持って帰らせるということをやろうと聞いたときは、本当に無事フナっこが田で生き延びることができるのか、田干しのときはどうするのかという不安をおぼえました。そこで一部うちの庭の池で稲刈りのときまでフナっこを育てることにし、稲刈りを迎えました。すると、ほとんどいなくなったと思っていたフナっこが生きていたんです。しかもうちの池で育ったフナっこよりかなり大きく成長していました。私はずっと農業をしてきましたが、まだ新しく学ぶことがあるのだと気づかされました。」

また林部さんは、自分のりんご畑のりんごの木を、何本か新しい苗木に植え替えるそうだ。その苗木から今と同じようにりんごが採れるようになるには、何十年かかるのだろう。「息子たちがりんご作りを引き継いでくれるかは分からないが、学生さんたちの前向きな姿を見て、植えなくなった。」と林部さんは言うてくださった。教育の活動は、地域の人々にも働きかけ影響を与えることもあるのだと知り感動した。そのような教育を行って行きたいと思う。

#### 5. 臨床の知

私たちの活動は体験中心の臨床の知と呼ばれる。「こどもはおんぶをしてあげると喜ぶ。そしてさらにおんぶをしたまま走ってあげるともっと喜ぶ。」という事実があるとして、そんなこどもについてどうとらえるか。そこに保育学の知識が加わると、「母親と父親にはそれぞれ違った役割があり、この事象で説明すると、おんぶが母親の役割でさらにそれで走るというのが父親の役割だと考えられる。よって、このこどもは母親のスキンシップを充分には受けておらず、さらに父親のはもっと不足していることが分かる。」という答えが出る。臨床の知+知識によって初めて、学生にとって本当の学びになるのではないだろうか。

## 11. 農業体験から学んだこと —子どもたちとのコミュニケーション—

高橋和之 理数科学教育専攻 3年

### What I Learned From The Farming Experience —Communication With Children—

TAKAHASHI Kazuyuki : Major : Science and Mathematics Education, junior

【キーワード】 牟礼ふるさと農場 茂菅ふるさと農場 食 農業体験 鮎 コミュニケーション

#### 1. 私がYOU遊広場に参加したきっかけ

私が今年度YOU遊広場に参加した理由は、YOU遊広場での活動が自分自身を高める機会になると考えたからである。YOU遊広場に参加し活動することで、子どもたちや保護者の方々、そして仲間たちと新しく出会うことができる。新たな出会いを通して、新しいものの見方や考え方に触れることができる。そのことは自分自身の世界を広げることにつながると考えた。

私は大学2年生の終わり頃から本格的にYOU遊広場に参加した。大学1年生の時には当時のYOU遊サタデーに2回参加し、大学2年生ではYOU遊フェスティバルに参加した。今まで、イベント的な活動には参加をしてきたので、大学3年生からの継続的な活動ではたくさんの経験ができると考え、活動をするのが楽しみであった。

私がYOU遊広場で今年1年間、主に活動してきたことは、牟礼ふるさと農場と茂菅ふるさと農場での農業体験だった。牟礼ふるさと農場では主にそばを作り、茂菅ふるさと農場では主にお米を作った。私は牟礼ふるさと農場の畑と茂菅ふるさと農場の田んぼを同時に触れることができるチャンスを持つことができた。両方の農場を同時に経験できることはとてもよい学びになると考えた。

#### 2. 子どもたちを取り巻く食の文化に対する問題

現在、私たちの食卓にあがっている食べ物のほとんどは諸外国から輸入されてきたものである。輸入に大きく頼っている食べ物は、牛肉や豚肉などの動物類や、えびやいくらなどの魚介類、大豆、小麦などがある。これらの食べ物の例は限りなく挙げることができる。私たちの食べ物に対する環境がそのような状況にある中で、唯一お米だけが自給率100%を保っている。私たちが毎日食べている日常的な食べ物の中では、お米だけが自給率100%を達成していると考えられる。このように私たちの食べ物が諸外国の輸入に大きく依存した状況の中で、子どもたちは毎日の食生活を送っている。

今、子どもたちは食べ物に関してどれだけの興味を抱いているのであろうか。子どもたちはスーパーマーケットに行けば、袋に包まれたにんじんやピーマンを見ることができる。



そして大きくてまっすぐに伸びた大根を見ることができるだろう。また、豚肉や魚は切り身にされていたり、ミンチになっていたりしている。大豆は豆腐、おから、きな粉、油などになっている。このように子どもたちがスーパーマーケットで見ている食べ物は、全て人の手が加えられたものであると考えられる。子どもたちは常に人の手の加えられた食べ物を見て育っていると思われる。では子どもたちはその食べ物がどのような過程で作られたものであるのかをどこまで考える機会があるのだろうか。お米に関して考えていくなれば、玄米と胚芽米と白米ではどのような違いがあるのかや、現在販売されている無洗米とは何なのかや、これらのお米を比較して、それぞれのお米のメリットやデメリットは何なのかを考える対象となるであろう。そしてお米はどうやって作られているのかが考えられる。子どもたちは飽食の時代において、その食に関する現実と面と向かい合って考えられているのであろうか。日本で作られたお米に関しても知らないことが多いのに、ましてや諸外国からの輸入品は知る由もないことである。では、子どもたちにとって農業体験をすることがどんな意味を持つのであろうか。今後そのことに関して考察をしていく。

現在、日本の産業別人口の中で農林業に携わって生活している人々はわずか6%である。6%という低い割合になっている理由として考えられることは、高度経済成長の時代に製造業へ出稼ぎという形で人々が田んぼや畑から離れてしまったことが考えられる。また、機械の大型化に伴い、少人数で大量の農作物を生産することができるようになったからとも考えられる。では、これからの農業を子どもたちが支えていくために、子どもたちは農業体験をするのであろうか。確かに、子どもたちは農業体験を通して農業に対する興味を抱き、農業を志す場合も考えられるであろう。農業を志すために農業体験をすることも目的の一つとして考えられるが、確固たる目的とはなりにくいと思われる。私が考える農業体験をする目的とは、実際に食べ物を作ることを通して、作ることの大変さと収穫に対する喜びを感じ、食べ物に対する興味・関心を抱くとともに、食べ物大切さをより身近に感じることであると考える。また、みんなで食べ物を作るということを行うことで、子どもたち一人一人のコミュニケーションをもつ機会になる。一つのことをみんなで向かい合うことは一つの共同作品であると考えられることもできる。もし仮に、田んぼでお米を作ることを体験するならば、一人ではお米を作ることができない。そのため、お米をみんなで作ることになる。子どもたちはお米を作るときに農家の方にお米の作り方を教わらなければならない。子どもたちはお米の作り方を学びながら作業を進めていく。そのような状況の中で子どもたちはみんなと会話をしながら作業を進めていくであろう。またお米の場合、子どもたちは半年間ほどお米を育てていく。子どもたちはお米を育てている間、お米が実るのを「待つ」ということが必要である。その期間の中で子どもたちの中からお米に関して興味を抱く場合があろう。この興味からお米のことに関して調べてみる機会を持つことができる。そして子どもたちはお米を育てて、四季を感じながらお米を収穫するであろう。

私は農業体験が子どもたち自身の世界を広げる機会になると考える。お米作りを経験したことがない子どもたちは、田んぼの泥を足でとらえた感触を実感することや、農薬を使わなかった場合は、雑草が生えてくることを学ぶことや、収穫の喜びをお互いに分かち合う機会を持つことが大切である。また、お米作りを既に経験していて、お米に関してはある程度知識を持っている子どもたちは、クラスの中でお米に関して知っているということが自信になり、お米のことをよく知らない子どもたちに対して教えることで、お互いのコミュニケーションの機会になる。



子どもたちの現在の生活は自然と大きな隔たりを持っていると考えられる。子どもたちは家庭に帰ると、テレビやテレビゲームなどがあり一人で遊ぶことができる。子どもたちは外で遊ぶことも少なくなり、お互いにコミュニケーションをとる機会が少なくなっている。そのような子どもたちの生活を取り巻く環境に対して、農業体験はお互いにコミュニケーションをとる機会と自然に対する触れ合いを持つ機会を与えることができると考える。子どもの頃に体で感じた経験は大人になっても忘れることはない。そのために農業体験をすることは大切であると考ええる。

### 3. 牟礼・茂菅ふるさと農場での実践

私はこの1年間、牟礼・茂菅の両ふるさと農場で農業体験をする機会を得た。始めのうちは農場がどこにあるのかも分からない状態であった。そのような状況の中で、土井先生や仲間にそれぞれの農場を案内して頂いた。そのとき見た初めての農場の光景は忘れられない。牟礼ふるさと農場はまだ雪が多く残っていて、畑が白く覆われていたのを覚えている。畑のすぐ近くには林があり雄大な環境であると感じた。晴れた日には飯綱山が間近に見ることができ素晴らしい自然であった。茂菅ふるさと農場では田んぼにたくさんの花が咲いていた。近くには裾花川と民家があり、旭山の雄大な景色を見ることができる農場であった。農場は山々に囲まれて緑豊かな環境であった。両方のふるさと農場とも自然に囲まれた雄大な大地であり感激した。

今年1年間は牟礼・茂菅の両ふるさと農場で月に約1回のペースの活動を行ってきた。私にとっては、農場での活動を月に2度行うことができたことは充実した生活を送る要因になった。私が初めて参加した活動は牟礼ふるさと農場でジャガイモとトウモロコシを植えることであった。私が、初めての活動への参加に伴って、自分自身に対する目標を設けた。その目標は子どもたちや保護者の方たちと笑顔でコミュニケーションをとることであった。私は初めての出会いで、お互いに何も知らない状況にあると思ったので、私自身から積極的に話し掛けるようにしていった。子どもたちは最初、寒さのせいもあってか、なかなか笑顔が見られなかったが、全員でゲームをして遊ぶ頃から笑顔がたくさん見られ、たくさんのコミュニケーションをとることができた。初めての活動だったが、とても楽しい思い出を作ることができた。この初めての活動の経験や自信が、今後の活動での自分の行動の支えになった。

その後の牟礼ふるさと農場での活動で、多くの作物を子どもたちと植えることができた。ジャガイモ、トウモロコシに始まりブルーベリーの苗、サツマイモ、そば、落花生を植えていった。サツマイモの苗の植え方は船底のように土を掘って植えていくのでとても感動した。このような植え方があることに驚きを感じた。このように私が楽しい感激を得ることができたことも、子どもたちと一緒に植えたからこそと考えられる。そしてこんなにも多くの作物を植えることができた経験はとても自信になった。

私の茂菅ふるさと農場での初めての活動は田おこしだった。しかしこの活動の当日の天気は雨になってしまった。そのため、活動はみんなの話し合いの結果、中止となった。私は活動が中止になったことに対する残念な気持ちとともに、仲間たちのこの日の行動に対して感動した。この日の仲間たちは活動が中止になったということを、活動に参加することが決まっていた参加者の家庭へ連絡するために、各自分担をして電話をした。30件近くもあった連絡を10分程度で終わることができた。このような仲間の行動から、お互いに



協力することで得られる力はすごいものだと感じた。更にその後、早速次回の活動である田植えとどろんこ遊びについての話し合いをした。今すべきことを一つずつしっかりとこなしていく姿は私も常に見習うところであり、今でもその光景を思い浮かべることができる。

その後の茂菅ふるさと農場での活動は、田植えとどろんこ遊び、田んぼの草取り、かかし作り、稲刈り、脱穀、精米などと、私が経験したことのない活動ばかりであった。私が経験したことの中で田んぼでのどろんこ遊び、田んぼの草取り、鳥よけネットをはるかなどがとてもよい経験になった。子どもたちと一緒に汗を流してお米作りに打ち込めたことは大切な思い出になっている。

茂菅ふるさと農場で育てた作物は大学内の畑で育てた作物も入れると、お米、大豆、サツマイモ、トマト、ナス、かぼちゃ、スイカ、メロン、ジャガイモ、ケナフ、ヘチマ、ウリなどが挙げられる。これらの作物を育てるために、本などを調べて学習したことは良い経験になっている。これらの作物に対して教材研究をしていったことは、とてもよい経験になっている。

私が茂菅ふるさと農場での活動の中で大切な思い出の一つになっていることがある。その思い出は田んぼに放した鮎の成長の様子である。茂菅ふるさと農場では農薬を使わないため、田んぼに雑草が多く生えてしまう。そのため雑草のほうが稲よりもよく生長してしまい、お米の収穫につながらない。そこで、鮎の稚魚を田んぼへ放し、雑草を小さいうちに食べさせることを考えた。鮎の稚魚たちは体長2~3cmでとても小さく、一見めだかのように見られた。私は小さな体をしている鮎の稚魚たちを見て、これからの田んぼでの生活ができるのかと考えた。鮎の稚魚を子どもたちと一緒に田んぼへ放し、鮎の元気な成長を期待した。しかし鮎を田んぼへ放流した後、生きた姿を見せた鮎はいなかった。そのため私たちは鮎が田んぼからいなくなり、ほとんど絶滅してしまったと考えた。そんなことを考えているうちに、田んぼの水を引く時期になった。私は鮎が田んぼにはいないであろうと考えていたが、わずかながら鮎が生きていた。私はそのことを知り嬉しかった。そして鮎を田んぼから救いだし、いよいよ田んぼの稲刈りをするということになったときに、更にまだ稲の間の水溜りで鮎が生きているということを確認することができた。鮎は足の大きさ程度の水溜りの中で生きていた。鮎の大きさは10cm程度までになっていた。私は鮎の生命力に感激した。泥まみれになりながら生きている姿から強い信念を感じた。

#### 4. 運営委員会での活動

私は1年間運営委員会に参加してきた。運営委員会では牟礼・茂菅の両ふるさと農場での活動だけでなく、他のあらゆるプラザの活動の報告であったり連絡を伝えたりする場であった。また、各プラザが直面する問題をみんなで一緒に考える場でもあった。一からみんなで築き上げていく運営委員会の中に、私が参加する上で大切にしてきた考えがある。その考えは、運営委員会にしっかりと参加し、牟礼・茂菅の活動の報告だけに限らないで、あらゆるプラザの活動の状況を把握することが大切であるという考えである。私は運営委員会のあらゆる状況をできるだけ把握し、何をどのようにしていけばよいのかということ状況を応じて考えていった。そのように考えることを通して、私自身が運営委員会に積極的に参加することができた。

## 12. 素敵な自分になるために

～茂菅ふるさと農場での思いから～

北川伸尚 障害児教育専攻 3年

### 1. 今年の自分

今年は自分人生の中で一つの「きっかけ」の年になると考えていた。理由は大きく二つある。一つは、教育実習での体験である。教育学部であるため教育実習は必ずあるということは当たり前である。誰もがそんなこと百も承知で入学してきているはずだ。しかし、大学に入学してから教育実習があることに気付いた1年生の頃の自分。まだ2年も3年も先のことなのに、不安で仕方がなかったことを思い出す。そんな教育実習も、気がつけば目の前のことであり、今となっては行き去ったこととなってしまった。教育実習は、先輩方の様子からみても楽しく、また自分が成長できると分かっていた一つのものであり、教員を志望するかどうか迷っていた自分にとって、そのいくつかの答えを見い出してくれる、そんな実習になるであろうことを予想していた。そういう意味で、自分の人生の、今後の自分の「進路のきっかけ」であったのだった。

もう一つは、今年の茂菅ふるさと農場で農場長という大役をすることである。きっかけとなる年であるが故に、色々なことを体験し、沢山のことを考え感じたい。そのような思いと、自分自身が農作業体験をしたいとの希望、この機会を逃せば一生できないような体験を目の前にしているという現在の状況、やりたい人(子どもも学生も)がいて自分が「やろうよ」と掛け声をかけることでその人達も楽しくできるのであれば、掛け声くらいいくらでもかけたいとの人の為にとの思い。こうしたいくつかの思いや考えから、農場長をやってみようと思ったのであった。これは、個人的な「成長のきっかけ」である。

いずれにしても、自分が今年行う様々な活動を通して、全体的として自分が成長できる、そうした「成長のきっかけ」となる年になると思っていたのだった。

では、どうして自分が成長したいと思うのだろうか。成長しないよりは成長したにこしたことはない、単にそうした思いがあるからではない。自分は自分なりに輝きたいが為に成長したいと思うのである。「輝きたい」と一言にいても、ただ何かの団体のリーダーとなってみんなの前で目立ちたいというものではない。自分の言いたい「輝きたい」というのは、「魅力のある人になりたい」という意味である。ある講義の話し合いの中で、「魅力のある先生ってどんな先生だろう。やっぱり、先生自身が輝いている先生じゃないかな。そういう先生に子どもたちは寄っていくだろうし、人も集まるんじゃないかな。」という意見を交わしたことがあった。確かにそうだ。人間は誰でも、魅力のある人には惹かれるものだ。今後、自分が教師として、またそれ以外の立場に立ったとしても、自分という人間が人として生きていく上で魅力ある素敵な人間でいたいのだ。自分は今まで、特にこれだけは誰にも負けない、これだけは自分が自慢できる、そういうものがなかった。そんな今の自分にとって、魅力ある素敵な人間になるための一要素となり得るもの、それが教育実習なり農場長であったのだった。



## 2. 始まるまでの不安…

農場での活動は、動き始めるまでは本当に不安で仕方がなかった。不安の要素は沢山ある。まずは、農場長という仕事の重大さである。自分一人のことであれば全然心配することはない。勝手に自分の時間の流れに合わせてやればよかった。しかし、農場というと、自然の為に、そしてやりたいと思っている子どもや学生の為にもやらなければならない。そういう沢山の期待を背負った役であったのだ。それ故、いくら大変であっても、いくら後ろを見たくとも前を見て進んで行かなければならなかったのだ。

二つ目には、自分の知識の無さである。私は農家の生まれでもなければ、子どもの頃どこかで農作業体験をしたわけでもない。ただ一度覚えていることといえば、小学5年生の時に小学校のすぐ横にある田んぼで稲刈りを数分間だけやったことがあるだけであった。こうした、本当にお米の作り方は何も知らない自分に、農場長などという大役が務まるのか、本当に分からなかったのだ。

そして三つ目としては、前農場長である那須紋子さんが、草取りや案山子作りといったお米作りの中心となる活動ばかりではなく、普段の作業も子どもたちと体験したという取り組みや工夫の凝らされた活動、そうした様子をわずかながらも目の当たりにしていたので、あんなに楽しい活動が自分にできるのか不安だった。前の活動が素晴らしいのであれば、次の活動では更に良いものをとの期待が自然と伴ってくる。少なくとも自分は更に楽しいものにしていきたいと感じていたのだが、それが逆に「本当にできるのだろうか」と不安要素にもなっていた。また、那須さんの苦勞した姿も表面的にはあるが知っていたので、人を集めること、農場で活動することは本当に不安以外の何者でもなかった。

こうした大きく三つのことから始まり、参加学生の少なさや先の見えなさなど沢山の不安があった。ただ、そんな不安の中にも「やらなければ。」「よし、がんばろう。」そう思うことができたのは、「後悔のないようなものにして欲しい。だから、やりたいことは極力できるように協力していこうと思っているから。」という、農場一の協力者である農家の林部さん、JAの大内さんの温かい言葉と、「いくらでも協力するよ。」と言ってくれた学生のおかけであった。

## 3. みんな一緒にやろうよ！

そんな期待と不安の中でも、何か新しいことをと考えるはいた。その中で思い立ったことは、やはり自分の専攻している障害児教育を少しでも生かした取り組みをしたい、ということであった。障害をもった子と一緒に活動を…この思いは、今年のYOU遊フェスティバルにさかのぼる。今年のYOU遊フェスティバルで、私は養護学校の子と一緒に活動できる講座を企画・準備した。しかし、募集の仕方、内容面等、いくつかの課題（と言うよりも問題）があった為に、結果的に障害をもった子は一人も参加することができなかったのだ。その時に残された課題もあり、また虹色アトムと一緒に活動している養護学校の子も達とも田んぼでお米を作る作業をしたいという思いがあった。

そうした、普段から少しでも知っている人にまずは声をかけて誘ってみる、こうした「身近なところから」と言うことは、学生を集めることに関しても参加者を募集することに関しても重要であったと思う。やはり人は、自分一人で全く知らない人達の中に飛び込んで行くのは相当な勇気がいるものだ。しかし、少しでも知っている人と一緒にあれば、また

少しでも知っている人の所へは行きやすい。そうした意味で、広く養護学校の方へ参加者募集をするのではなく、普段の活動から関わりのある人達から声をかけていくことで、参加者の側からすれば参加しやすくなるのではないかと、そう感じたのであった。

結果的に、田植えの活動では、兄弟姉妹も含めて計 15 名の子ども達が参加し、約 15 畝と一緒に田植えすることができた。当日は子ども一人に学生一人がペアとなって活動し、どろんこになりながらも一生懸命に植えている様子、楽しそうに農場を駆け回っている姿を見ると、声をかけてよかったと心から感じたのであった。

#### 4. 「慣れ」という形で感じる成長

農場での活動を今年は 6 回行った。わずか 6 回の活動であったが、始めの頃の自分と今の自分を比較するとやはり何か変わった。どこがどう変わったのか、はっきりと分からない。ただ、活動に「慣れ」てきたということから、少し自分の成長を考えてみたいと思う。

まず、慣れたことの一つに「人前で話をする」ということがある。話をするといっても様々な状況でのものがあり、色々な人に対してのものがある。だが、全体を通して言えば、以前は「～で、それで～で…」となかなか一文を区切れずに話していたが、今は幾らか一つひとつを短くまとめて話せるようになったような気がする。また、今から自分が話すことを考えながら話をするできるようになったようにも思う。これは、必ずしも茂菅の活動でのみ培われたことではないと思う。8 月 9 月にあった教育実習での経験も生きているであろう。いずれにしても、人前で「それなりに」話ができるようになった。子どもたちを意識した簡単な言葉使いに心掛けられるようになった。

二つ目として、「自分がやることが分かる」ということである。前に立っている自分として全体を見ていること、その様子を見て自分は動くということが必要なのだ。言ってしまうと、自分は何もせず、ただあれして、これやってと指示をしていれば組織としては動いて行くのかもしれない。しかし、そうした指示は簡単な事ではない。指示が的確にできるということは、自分がしっかりとやらなければならないこと、考えなければならないことを把握している必要があるのだ。一から全部をスタッフで考えてやっていけばいいことで、自分以外のスタッフにも自分のことを伝えればよいのかもしれないが、それもなかなかできたことではない。始めの頃はそうした指示やお願いがなかなかできずにいたのだが、そうしたことも活動を重ねることで強くなっていく信頼関係が成り立ってきたが故に、少しはできるようになった自分がいるのではないかと感じている。

三つ目は、「素直な自分のままで接する」ということである。子ども達を前にしたとき、以前であればどこか作った笑顔で接し、分かったような顔をして会話をしていたように思う。しかし、今では自分が接しやすい自分の姿で子ども達と向き合うことができるようになった気がする。自分が分からないことに対しては、素直に「何で？ どうして？」と聞き返すこともできるし、楽しい時は心から楽しむことができる。考えさせなくてはいけないような場面では、少々口調を強くして言ったりもするようになった。素直でいることで自分が自分でその場にいることができるのだ。

活動ごとに、何か感じることで、やってみることで少しずつ変わることができている。しかし、少しずつである為になかなかその形を捉えることができないでいる。こうして一つひとつ慣れてきたこと、今となってはできることをもう一度振り返って見ることで、以



前の自分と今の自分を比較でき、自分の成長を感じることができるように思う。

## 5. 一年を終える今…

一つには、1年間農場長として役を務められたこと、1年間お米づくりをして無事に収穫を終えることができたこと、そうしたことに對して胸を張って「やったぞ」と言うことができる。確かに、お米づくりのことを知ったからと言って何の役にも立たないかもしれないし、知識として得ることができたものも本当に表面的なことなのかもしれない。農家の方から言わせれば、「たった1年やったぐらいで何を分かったような顔をしているんだ。」程度のこともかもしれない。しかし、自分にとっては1年間最後まで諦めずに頑張ることができたこと、茂菅の子どもたちとも障害をもった子どもたちとも活動できたこと、学生と準備して企画・運営できたこと、それ自身が自分にとっての自慢だ。確かに辛い時はいくらでもあった。最初の方で人が全然集まらなかったこと。田植えの2日前に田の水を溜めすぎてあふれてしまい、農場に隣接している畑の方にご迷惑をかけてしまったこと。活動日の日程が何度も変更して、その度に参加者にも学生スタッフにも連絡し直すことになったこと。2年生が準備からも参加してくれるようになり、嬉しい反面何だか自分がどの程度までリードしていけばよいのか見えなく、自分の位置が見えなくなったこと。フェスの後の活動で準備に一週間しかなく、限界まで眠たくなりながらも準備したこと。人がいてもなかなか上手く仕事を分担できずにいたこと。挙げればきりが無いが、しかしこうした辛いことがあったからこそ「やったぞ」と言えるのであろうし、楽しかったと思えるのだろう。

## 6. 沢山の人との出会い

農場長をやったことで、一スタッフとして関わる以上に多くの方々、学生、子どもたちとの出会いがあった。今年の活動を地域と参加者の両面からサポートして下さった、茂菅地区育成会の方。苗をただでいただく関係で、稲の種まきのお手伝いに行った時に作業を共にした、農家のおじいさん、おばあさん。田植えの直前で田んぼから水が溢れてしまった時に、ご迷惑をかけたにも関わらず温かく助言と応援をして下さった、農家の方。その水の溢れた時に、困っている自分の様子に見かねて「こうすればいいよ」と声をかけて下さったおじいさん。ポンプの当番の際に、毎朝様子を見に来てくれたJAのおじいさん。その当番の帰り道で話をし、元気に挨拶をした地域のおじいさんや高校野球部の学生さんたち。脱穀の時に古道具を快く貸して下さった、試験場の方々。お米を精米に行った時に、自分の方がお米の量が多かった関係で順番を先に譲ったら、お礼に美味しいりんごを5つもくれた、優しいおばあさん。そして、今までの自分の経験を踏まえて色々意見をくれ、大きな心の支えとなってくれた4年生。立ち上げの時から一緒に考え、一緒に苦労してきた3年生。積極的に活動にも準備にも参加してくれ、活気付けてくれた2年生。毎回活動を楽しみにして農場に来てくれ、笑顔を振りまき、一生懸命に作業をしてくれた子どもたち。わが子の様子を遠くから見守ったり、一緒になって作業したりしてくれたお父さん、お母さん。そして、今日こうして活動ができる、その始まりときっかけを下さった土井先生と、協力して下さった藤沢先生。そして、無理なお願いも聞き、誰よりも農場を支援してくれた農家の林部さん、JAの大内さん。今年出会った全ての人に感謝するばかりである。

### 13. 教育学部学生と地域の高齢者との継続的な交流体験活動の実践

－「信大茂菅ふるさと農場」における学生と高齢者との協働によるカリキュラム開発－

信州大学大学院教育学研究科 2 年 白井克典

はじめに

今日、地域社会や家庭において子どもと高齢者との交流の減少が指摘されている。平成 9 年 6 月、中央教育審議会は「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第二次答申）」を発表した。この答申では 21 世紀の社会を展望すると高齢社会という問題は避けては通ることができない重要な課題であるとし、高齢社会を生きていく子どもたちをどのように育てていくのかという問題は極めて重要な課題であり、高齢社会に対応する教育の在り方を提言している<sup>(1)</sup>。答申では、子どもたちと高齢者との交流することは両者にとってさまざまなメリットがあることから、幼稚園から高等学校までの各学校段階において子どもたちと高齢者との実際に交流し、触れ合う体験活動が必要であると述べられている。この答申や総合的な学習の時間の導入により、学校教育においては児童・生徒と高齢者の交流活動が積極的に取り組まれるようになってきている。しかし、交流活動が継続的なものにならず単発的・イベント的なものになってしまうという問題が各種実践記録から報告されている。

「信大茂菅ふるさと農場」は教育学部学生と地域の高齢者との交流体験活動の実践である。そして、この交流体験活動は 5 年間もの間継続して行なわれている。なぜ、「信大茂菅ふるさと農場」の活動は単発的・イベント的な活動に終わらず、5 年間もの間、継続して実践されているのであろうか。本稿では「信大茂菅ふるさと農場」での活動が 5 年間も継続して行なわれている要因を明らかにしたいと考える。

最初に、「信大茂菅ふるさと農場」の概要について述べる。そして、「信大茂菅ふるさと農場」での活動が 5 年間もの間継続して行なわれている要因を明らかにするために、学生と高齢者との協働してカリキュラムを開発していく過程において、両者がどのような学びをしたのかについて、「信大茂菅ふるさと農場」の過去 4 年間の実践記録の分析と活動に参加した学生 5 名と林部信造氏への聞き取り調査の分析をもとに明らかにしていく。

#### 1 「信大茂菅ふるさと農場」の概要

ここでは「信大茂菅ふるさと農場」の概要として、「信大茂菅ふるさと農場」の創設目的、農場での活動概要をまとめ、世代間交流の場としての「信大茂菅ふるさと農場」について考察する。

##### ①「信大茂菅ふるさと農場」<sup>(2)</sup>の創設目的

「信大茂菅ふるさと農場」は平成 12 年度（2000 年）に、①子ども、学生、地域の人々が外での農作業体験を通して、相互に触れ合う機会をつくる、②地道な土づくりの大切さ



を通して、人づくりに関わる教師としての実践的指導力を身につけるという活動主旨のもと開設された。

この活動主旨のもと「信大茂菅ふるさと農場」が開設された背景にはさまざまな要因がある。「信大茂菅ふるさと農場」は学生の自主的な活動として始まった「信大 YOU 遊サタデー<sup>(3)</sup>」の一環として始まった。「信大 YOU 遊サタデー」は単発的なイベント的傾向が強く、また、子ども達を大学に招いての活動であった。平成 14 年度からの学校完全週五日制の導入を目前にして、大学に子ども達を招く単発的な活動ではなく、大学が地域に出向き大学と地域とが継続的に関わり、地域の子どもは地域で育てることを目的とした活動への移行が迫られていたことが一つの要因である。学生側にとっては「信大茂菅ふるさと農場」での農作業体験を通して、平成 14 年度から導入された総合的な学習の時間を構想する力を身につけるというねらいもあった。最も大きな背景は 1960 年代前半から始まった高度経済成長によって日本は世界の中でも屈指の豊かな国になったが、その反面、大きな社会構造を変化により子ども達が自然と関わったり、人とコミュニケーションをする機会が減少してしまった。そこで農作業体験を通して、子ども達が自然と関わったり、同年代の友達だけではなく多様な世代の人々と触れ合う活動の場を設ける必要があったのである。

「信大茂菅ふるさと農場」の活動は教育学部学生及び教員、JA ながの（担当者は大内清氏）、地元農家の林部信造氏夫妻、茂菅地区育成会の連携により運営されている。（図 1）なお、「信大茂菅ふるさと農場」の活動は平成 12 年度においては「自然体験研究特講」（前期）、「自然体験研究演習」（後期）として、平成 13 年度以後は「社会体験実習」（通年）として信州大学教育学部の授業科目に位置付けられている。

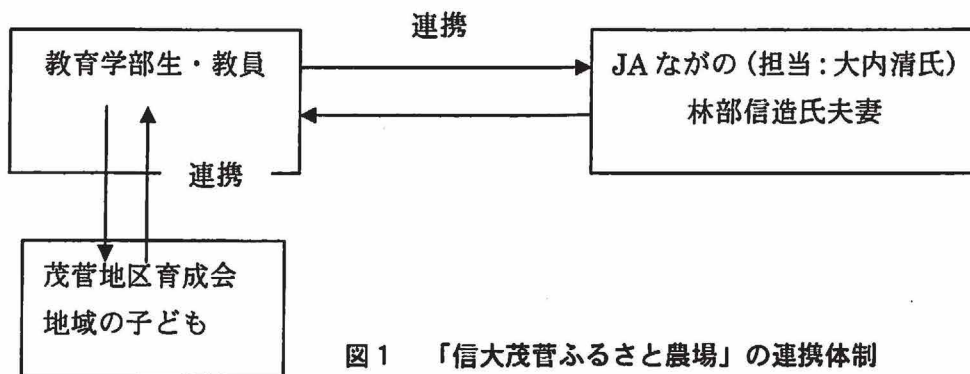


図 1 「信大茂菅ふるさと農場」の連携体制

## ②「信大茂菅ふるさと農場」の活動概要

平成 12 年度に始まった「信大茂菅ふるさと農場」の活動の概要について平成 14 年度を例にとって示すと以下のようなになる<sup>(4)</sup>。

### 平成 14 年度活動内容

3 月下旬 今年度の活動についての話し合い

5 月 18 日 田おこし

6 月 2 日 田植えとどろんこ遊び。参加者は学生・教官、子ども、保護者、大内清氏、

林部信造氏。

7月7日 田んぼの草取り。参加者は学生・教官、子ども、保護者、大内清氏、林部信造氏。

8月3日 鳥よけネットはり。

8月7日 かかし作り。参加者は学生・教官、子ども、保護者、大内清氏、林部信造氏。

9月22日 稲刈り。参加者は学生・教官、子ども、保護者、大内清氏、林部信造氏。

9月23日 残った稲の刈り取り。

10月13日 鳥よけネット外しと脱穀。参加者は学生・教官、子ども、保護者、大内清氏、林部信造氏。

12月7日 新米をいただく。参加者は学生、子ども、保護者、大内清氏、林部信造氏。

なお、活動への協力者である地元農家の林部信造氏、JA ながの大内清氏とは上記の活動の計画や準備段階、日々の農場の管理に関してアドバイスをいただくなど年間を通して活動に協力をしていただいている。また、農場での一連の活動と並行し、一部の学生は「林部農場支援隊」として林部信造氏のりんご作りを手伝っている。また、毎年必ず年度の初めに協力者である地元農家の林部信造氏、JA ながの大内清氏、学生・教員で顔を合わせての打ち合わせ会が行なわれている。

### ③世代間交流の場としての「信大茂菅ふるさと農場」

「信大茂菅ふるさと農場」には子ども、保護者、学生・教員、JA ながの大内清氏、林部信造氏夫妻など多くの人々が関わっている。「信大茂菅ふるさと農場」は農作業体験を主とした活動ではあるが、他面では農作業体験を通した子ども世代、青年世代、親世代、高齢者世代など多様な世代が結びつく世代間交流の場としての活動ととらえることができる。農場に参加する保護者からも「娘と一緒に何かをするということがないのでいい思い出になる。さまざまな人が農場に関わっており、家や学校で関わることのない世代の人と交流できて大変貴重な時間となっている」（44歳男性）や「子どもは学生と触れ合うことが楽しみの一つとなっています。地域でもこのような活動はなく、子どもに学校以外の集団関係を学ばせたかった」（43歳男性）という声が聞かれることから、「信大茂菅ふるさと農場」が多様な世代の人々と交流することのできる場となっていると考えられる。

## 2 学生と高齢者の協働によるカリキュラム開発

「信大茂菅ふるさと農場」での世代間交流の大きな特徴としては次の2点が挙げられる。1点目は継続して活動が行なわれている点である。2点目は学生と高齢者とが協働して農場での活動を企画、実施、見直しをしている点である。言い換えるならば、学生と高齢者とが協働したカリキュラム開発をしているということである。農場開設当初は学生が大内氏や林部氏に農場への協力を依頼するという形態であった。しかし、農業の知識が全くない学生が農場での活動を企画することはできず、高齢者と協働して農場での活動を企画、実施、見直すという形態、いわば学生と高齢者とが協働してカリキュラムを開発する必要があった。（図



2)

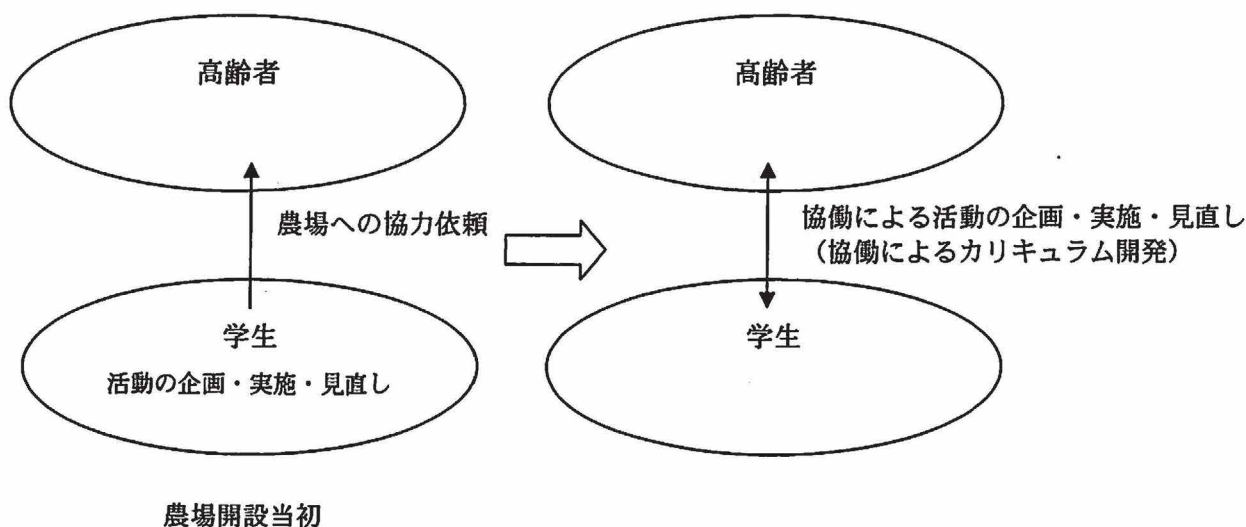


図2 学生と高齢者による協働のカリキュラム開発

ここでは、教育学部学生と地域の高齢者との交流体験活動の実践である「信大茂菅ふるさと農場」での活動が5年間もの間継続して行なわれている要因を探る。そのために農場での活動に参加している学生を将来の教師として捉え、高齢者とが協働してカリキュラムを開発していく過程において、両者がどのような学びをしたのかについて、「信大茂菅ふるさと農場」の過去4年間の実践記録の分析と活動に参加した学生5名と林部信造氏への聞き取り調査の分析をもとに明らかにしていく。

#### (1) 活動に参加した高齢者の学び

この節で述べる高齢者とは林部信造氏(75歳)と大内清氏(61歳)の2人である。林部信造氏は農場開設当初から指導・支援をいただいている方である。農場での活動以外にも学生たちが林部氏のお宅を訪れ、お茶をいただくなどご夫婦で学生を受け入れていただいている。また、JAながの営農指導部の大内清氏には平成13年度から指導・支援をいただいている。

##### ① 学生の前向きな姿に感動

「信大茂菅ふるさと農場」の実践記録への4年間の林部信造氏の寄稿全てにおいて学生の姿をみて感動したという記述がみられる。それは、「鍬や鎌、ナタ、ノコギリ等で毎日少しずつもくもくと汗を流しながら耕す姿には深く感銘いたしました」「会食が始まり、和やかな雰囲気の中、学生の皆さんから報告、反省、感想等が次々と発表されました。それは原体験を味わった人のみが語り得る言葉であり、また責任を果たした喜び、信頼と協調にYOU遊広場の目的を果たしたという充実感が人々に感動を与えてくれました。私も久しく味わうことがなかった感動を覚え、感無量でございました」「過去にとらわれず三年目にふさわしいりっぱな計画が立案されました。・・・いずれも初めての取り組みとなり、いくつ

かの課題を乗り越え、新しいものに取って代わる勇気と積極性に感銘を受けました」「米づくり未経験の学生の皆さんが、その場面ごとで、いろいろなことを研究、調査されたことを即実行する前向きな姿勢とその情熱に感服しました。・・・私も社会生活の中でいろいろな体験をして参りましたが、年に一度の全員参加による報告会には、それぞれの立場で反省、感想などが発表されますが、この場面は毎年、生涯忘れることのできない感動を与えてくれます。不安をかかえながらも一年間無事、目的を果たした喜び、お互いにそれぞれの立場をたたえ合える豊かな連帯感、信頼と協調により築き上げた一年間、全員がひとつになるこの美しい光景は、深い感動と感涙を与えてくれます」という記述である。学生は林部氏に自分達の姿から何かを学んでもらおう、自分達の姿を見せて感動させようとは考えていない。しかし、農作業体験を通して学生の一生懸命に田を耕す姿や、学生同士が協力しながら一年間の活動を成し遂げる姿が林部氏を感動させるのではないかと考える。

また、林部氏に対する聞き取り調査においては「定年を過ぎてから若い人、孫のように歳の離れた人と触れ合うことができ、学生の皆さんの健康な姿をみて自分も歳をとってられない健康でありたいと思うようになった」「学生が畝を担いで田を耕している姿や本当に米づくりを体験したいという前向きな姿に触発され、自分も熱心になって学生の皆さんと米づくりに関わることができました」という返答があった。大内氏の寄稿においても、「苗作りの時に土井教授が紺色のつなぎ作業服で学生さんと雨の中を農家の皆さんと種まき、仕込みをしている姿でした。これは本物だ、YOU 遊広場に取り組む意気込みが伝わってきました」という記述がある。「前向きな姿に触発され、自分も熱心になって学生の皆さんと米づくりに関わることができました」という林部氏の言葉から分かるように学生の前向きな姿は林部氏を感動させるだけでなく、林部氏や大内氏の行動力の源にもなっていると考えられる。

## ②共に活動できた喜び

学生の姿に感動したという記述とともに4年間の林部氏の寄稿全てにおいて、「共に」に活動できた喜びが記述されている。それは、「土井先生をはじめ大勢の学生の皆さんと年齢差を感じながらも若いエネルギーを吸収し楽しみながら共に農作業することができましたことに心から感謝申し上げます」「私も農業が好きです。若い人たちのエネルギーを吸収させていただき、楽しみながら共に汗を流した一年間、これが皆さんの活動の一助となれば、この上ない幸せです」「健康である限り信大茂菅ふるさと農場で、夢多いプラザの皆さんと力を合わせ共にがんばりたいと思います」という記述である。聞き取り調査においても「農場が取り持つ縁で、学生の皆さんと交流することができ、一緒に活動できたことが一番の喜びです」という返答があったように、「信大茂菅ふるさと農場」で学生と「共に」活動し、共に汗を流したり、喜びを味わうことができたことが林部氏にとって一番の喜びとなっていることが分かる。

## ③学生の成長を見る喜び

林部氏への聞き取り調査では「茂菅の田んぼでの活動を通して、いろいろな人との人間関



係が広がり、人間関係が深くなったことも良かったと思います。学生の成長を見ることができると嬉しいことです。卒業してからも手紙をだしてくれる学生がいて本当に嬉しくなります」という返答があった。

また、大内氏の寄稿には「私にとって、嬉しく思ったことは景気低迷、学童減少などの就職難のなか、この活動に関わり、苦楽を共有した多くの学生の皆さんの教員採用が決まったことです」という記述がある。

両氏の言葉には学生の成長を見ることができた喜び、農場での出会いを通じ、継続的に連絡をとってくれる学生がいることの喜びが記述されている。このような両氏の言葉は継続的に関わってきたからこそ発せられる言葉であり、一度だけの交流では聞くことができなかった言葉であると考えられる。

## （２）活動に参加した学生の学び

「信大茂菅ふるさと農場」に参加した学生の実践記録には活動で学んだことが多く書かれている。「稲を植えるところからかかしをつくってすずめよけをして、稲刈り、脱穀まで、自ら経験することの大切さを学ばせていただきました」と一年間通して、自ら経験することの大切さに気付く学生。「米一粒つくるにしても、いろいろな人の苦勞があり、努力がある」と多くの人の苦勞、努力があり米が作られていることを実感した学生。「この活動に参加するようになって思わぬところで大きな壁にぶつかりました。それが子どもとのコミュニケーションです」と農場に参加する子どもとの関わりの難しさに直面する学生。このように農場に参加した学生の学びはさまざまであるが、ここでは、実践記録及び学生からの聞き取り調査から、学生が林部氏、大内氏から学んだことに焦点をあて学生の学びを明らかにしていきたいと考える。

### ①農業の知識、農業に対する姿勢

平成 16 年度、農場長を務めた学生への聞き取り調査では「農業について全く分からなかった私ですが、農場長として一年間、林部さんや大内さんと接する中で農業についての知識をたくさん教えてもらいました」とや副農場長を務めた学生への聞き取りでも同様に「たくさんの農業の知識を教えてもらったこと」という返答があった。平成 15 年度、農場長を務めた学生からは「大内さんや林部さんがいなかったら茂菅の田んぼはできなかったと思います。前年度から農場には関わってきましたが、一年間通しての米づくりはしたことがなかったので農業についての知識や、米づくりの手順など米づくりに関する農業の知識を全て教えてもらいました」という声が聞かれた。また、「田んぼでの活動や林部さんのりんごの作業を作業を手伝うことで林部さんとたくさん話ができて、長い人生の経験や昔の知恵を聞く楽しさを感じるようになりました」という返答があった。

平成 14 年 5 月 14 日には農具使用についての講習会、9 月 27 日、28 日には稲刈りに向けての作業・講習会が林部さん、大内さんを講師に開かれた。参加した学生からは「鎌を研ぐときの押さえ方や刃に合わせた角度に砥石を滑らせることなどが分かった。林部さんが手を添えてくれたので体で覚えることができた」「天日干しは米の味がよいと聞いた。手

間にかかるかもしれないが機械に頼らないこの方がかえって有効なこともあると思った」という感想が述べられていた。農業のプロである大内氏や、林部氏から学生は農業の知識や、昔の知恵を学んでいることが分かる。

### ②高齢者の温かさ

学生への聞き取り調査においては「農業の知識だけではなく、林部さんや大内さんのあたたかさを感じました。お金にもならないことを、汗を流して協力してくれる姿をみて、自分の利益のためではなく、人のために動いてくれている姿に感動しました」「祖父母とは一諸に住んでなくて、なかなか話をしたことがなかったし、特別養護老人ホームでの介護体験にしても高齢者は苦手で自分から高齢者と積極的に関わろうとする気持ちは全くなかった。人への心遣いや親身になって話を聞いてくれる林部さんの人間性を学んだ。林部さんが親身になって話を聞いてくれるので自分の気持ちや身の上話まで話すことができた」という返答があった。学生は損得勘定なしに快く活動に協力し、親身になって話を聞いてくれる林部氏や大内氏の温かい人間性に感化されていることが分かる。

### ③高齢者の生き方

学生への聞き取り調査では「林部さんの田んぼへの取り組みやリング作りへの取り組みを見て農業は人間が自然に適応しなくてはならないことを学んだ」「林部さんの田んぼに対する姿勢から自然には逆らえないことを学んだ」「林部さんの田んぼに対する姿勢から自然には逆らえないことを学んだ」という返答があったように、農業の知識や昔の知恵だけではなく人間が自然に合わせるといふ農業に対する姿勢から林部氏の生きた哲学を学んでいる。

また、聞き取り調査において「林部さんの自分達の次の世代を育成することに真剣に取り組む姿勢、生き方に学びました」という返答があったように真剣に次世代を育成しようとする林部氏の姿に触れ、林部氏の生き方に触れる学生もいた。

### ④高齢者の励ましによる勇氣

「年度が始まる前に林部さんや大内さんから「今やりたいことをやればいい」「いくらでも協力するよ」という言葉を聞いてとても嬉しかったし、勇氣づけられました」と聞き取り調査において話してくれた学生の実践記録には次のような文章が書かれている。「ただ、そんな不安の中にも「やらなければ」、「よしがんばろう」そう思うことができたのは、  
「後悔のないようなものにして欲しい。だから、やりたいことは極力できるように協力していこうと思っているから」という、農場一の協力者である農家の林部さん、JAの大内さんの温かい言葉と、「いくらでも協力するよ」と言ってくれた学生みんなのおかげであった。」

また、平成16年度、農場長を務めた学生からも「林部さんや大内さんが田んぼにとっても協力してくれるので、こちら頑張らなければと思いました」という返答があった。農場開設当初は大内氏や林部氏に協力をしてもらおうという関係であったが、共に農場を運営し



ていく中で学生が林部氏や大内氏から勇気づけられたり、農場に惜しみもなく精を出してくれる姿に触発され、学生が励まされていることが分かる。

#### ⑤学生が高齢者の役に立てているという喜び

農場での活動を通して林部氏が学生と交流することについてどのような思いを持っているのかを知った学生もいる。平成 15 年度、農場長を務めた学生からは「林部さんと話をする中で林部さんから「学生の皆さんと共に農業ができ、学生と話すことで元気になる」と話してくれました。こちらが手伝ってもらってばかりなのにそんな風に思ってくれたんだと思ってとても嬉しくなりました」という言葉を聞くことができた。林部氏から協力をしてもらってばかりだと感じていた学生が、「学生の皆さんと共に農業ができ、学生と話することで元気になる」という言葉を聞いて、自分達も林部氏の役に立てているという認識を持てたことが分かる。また、平成 14 年度に農場長を務めた学生も実践記録に次のように記している。多少長くなるがそのまま引用したいと思う。

「この茂菅ふるさと農場で大変お世話になってきた林部さんという方がいる。この方はずっと農業をしてきているいわばプロの方であり、一年間を通して私達の活動にアドバイスをしてくださり、作業面でも協力してくださった。この林部さんが、YOU 遊フェスティバルが終わり、私達の一年間の活動が一段落したということで、スタッフ一同の前で挨拶をしてくださった時の話がとても印象的だったので端的に紹介する。『今年の茂菅ふるさと農場は、新しいことにチャレンジする活動ばかりでいつも驚かされました。特に今年初めて田んぼにフナっこを放し稲刈りの時に成長したフナを子ども達にもって帰らせるということをやろうと聞いた時は、本当に無事フナっこが田で生き延びることができるのか、田干しのときはどうするのかという不安をおぼえました。そこで一部うちの庭の池で稲刈りのときまでフナっこを育てることにし、稲刈りを迎えました。すると、ほとんどいなくなっていたフナっこが生きていたんです。しかもうちの池で育ったフナっこよりかなり大きく成長していました。私はずっと農業をしてきましたが、まだ新しく学ぶことがあるのだと気付かされました。』また林部さんは、自分のリング畑のリングの木を、何本か苗木に植え替えるそうだ。その苗木から今と同じようにリングが採れるようになるには、何十年かかるのだろう。『息子達がりんご作りを引き継いでくれるかは分からないが、学生さんたちの前向きな姿を見て、植えたくなった』と林部さんは言うてくださった。教育の活動は地域の人々にも働きかけ影響を与えることもあるのだと知り感動した。そのような教育を行っていききたいと思う。」

この学生は林部氏のいつまでも学び続ける姿に触れたと共に、自分たちの前向きな姿が林部氏を勇気づけていたことを認識している。自分たちの活動が林部氏に影響を与え、林部氏を勇気づけていたことを知り、また、学生が感動する。ここに相互の学びの姿が見られる。

#### ⑥地域との連携の重要性

ある学生は地域とのかかわりの重要性について次のように述べている。「私は、YOU 遊

プラザの活動で多くの子どもとのコミュニケーションの場を求めた結果、それを観察し実行することができました。しかし、実際の活動に参加してみて一番考えさせられたことは学校と地域のかかわりです。この活動の運営のほとんど全てを学生がやっているため、地域の人たちの協力がとても重要だということが分かりました。特に私が参加した「茂菅ふるさと農場」での活動では、場所を提供してくださる農家の方が作業の仕方や道具の使い方の説明、それに参加者の子どもについてなどのことまで一緒に考えてくださり、ときには厳しい意見もありましたが、いつも我が子を見るような温かいまなざしで見守ってくださいました。学校と地域のかかわりというよりもここでは個人と地域のかかわりと言った方が良いのかも知れませんが、私はこの活動を通して、あらためて地域の人との関わりということにも目を向けていきたいと思いました。・・・中略・・・「地域の人と関わりながら、共に体験を通して子どもについて学んでいく」というこの YOU 遊プラザを、今後も改善を重ねることでさらによい活動をつくってほしいと思います。」

さらに林部氏と大内氏との交流から地域との連携の在り方を学んだという学生もいる。平成 13 年度に農場長を務めた学生は実践記録に次のよう記述している。「茂菅ふるさと農場では JA を通じて地主の方から農地を借りたし、田植えを始め、多くの作業のたびに近所で農家を営んでいらっしゃる林部さんのご指導をいただいた。田んぼに稲を植えた後では、水利組合の方に無理を言ってポンプの当番を教育実習からはずしてもらったりした。このように、いろいろな人と協力しながらやっていくことはとても大切である。私達はあくまで学生であり、できることには限界がある。他の機関の手を借りなければできないこと、誰かに教えてもらわなければできないことはたくさんあり、そんな時は遠慮しないで協力をお願いすればよいと思う。ただ協力を依頼するだけではなくこちらはできるだけ限りの地域貢献ができればそれでよいと思う。何か物で返すというのではなく、私達学生ができることでよいのではないだろうか。取れた野菜をお分けするとか、何か体力的なことで作業を手伝うとかそれで十分だと思う。そういうつながりを持っていく中で、茂菅ふるさと農場に関係している多くの学生は、地域の農家の林部さんととても仲良くさせていただいている。このような関係はこれからもたくさん持てるようにしたいし、大切にすべきだと思う。」この学生は自らの限界を認め、謙虚な姿勢で協力を依頼する重要性を学んでいる。また、協力を依頼するだけではなく地域貢献として自分達にできることをしていくことの必要性を記述している。農場での活動を通してお互いにしてもらい、してあげるという相互の関係を構築していくことが継続した深い交流を展開していく上で重要であるということとを学んでいると考えられる。同様に、聞き取り調査においては学生から「林部さんや大内さんと連携しながら農業をすることで、こちらからの要求ばかりではダメで時期や時間の調節など密に連絡をとっていくことが重要であると思いました。また、たくさんの協力をしていただいているのでリンゴの手伝いや林部さんの田んぼなど少しでもお役に立つことがあったらしたいと思いました。いつも協力してもらってばかりなので、何か林部さんのお役に立てることをしたいと思いました。そのような関係の中でとても林部さんと親し



くなりました」という声が聞かれた。この学生は時期や時間の調節といった連絡を密にしていくことが地域連携にとっては重要であること、さらに、上述した学生と同じように、お互いにしてもらって、してあげるの相互の活動を通して林部氏と深い交流ができたことに気付いている。

一方、相互に働きかける関係、活動の重要性の他に、連携には一緒に働いたり、語り合うことを通しての相互理解が重要であると答えた学生もいる。この学生への聞き取り調査においては「連携には一緒に汗を流したり、話をするることによる相互理解が重要であると思いました。連携とはどちらか一方が他方に尽くすのではなく、お互いに尽くしあうことだと感じました。林部さんとの付き合いの中で長野県での『お茶』の時間の重要性を学びました。お茶を飲みながらたわいもない話をするなかでさまざまなことを学びました。地域連携にはこのような語り合う時間が重要であると思います」という返答があった。

上述した2名の学生と同様に、連携とは単にしてもらっただけではなく、相互に働きかける関係であるということ学んでいる。同時に、連携には語り合う時間が重要であることを指摘している。

### (3) 学生と高齢者との協働のカリキュラム開発

以上、学生と高齢者が協働してカリキュラムを開発していく過程において両者がどのような学びをしたかについてそれぞれまとめた。学生と高齢者が協働してカリキュラムを開発していく中で、高齢者は学生の前向きな取組や姿を見て感動しており、そのような学生の姿が高齢者の農場へのさらなる協力や支援の行動力の源となっている。また、学生は農業の知識だけではなく高齢者の行動や言葉に勇気づけられている。高齢者の行動や言葉に勇気づけられた学生はさらに活動への意欲を持つ。そして、「学生と一緒にいると元気になる」という高齢者の言葉を学生が聞き、自分達が高齢者にとって大切な存在であるということに気付く。このように学生と高齢者が協働してカリキュラムを開発していく中で、両者が相互に学び合い、影響し合っていることが分かる。このことが活動が継続的に行なわれていく要因となっていると考えられる。(図3)

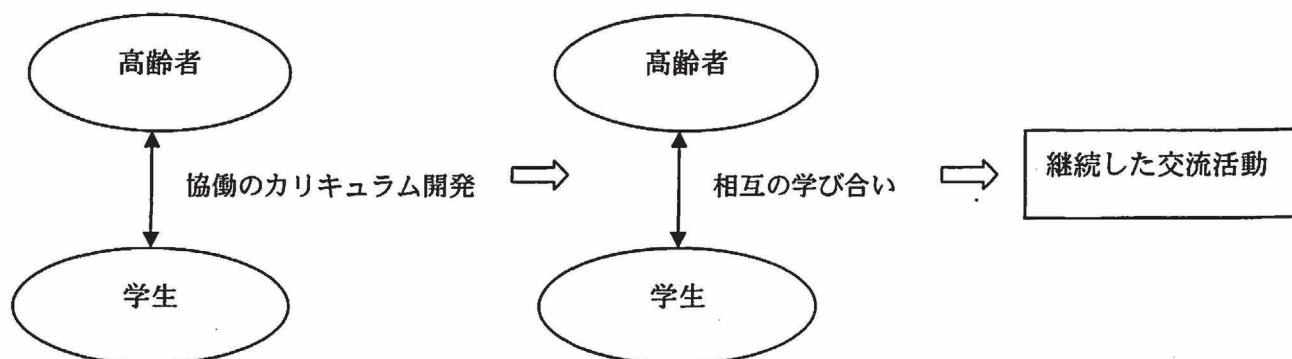


図3 協働による学生と高齢者の学び

つまり、「信大茂菅ふるさと農場」のカリキュラム開発に協働で取り組んでいる学生と高齢者の双方に掛け替えのない学びが成立している。このような学びが創出され続けているところに「信大茂菅ふるさと農場」が5年もの歳月の試練に耐え、さらに発展していく継続性を持ち得ている大きな要因があると考ええる。

#### おわりに

本稿では、「信大茂菅ふるさと農場」での活動が5年間もの間継続して行なわれている要因を探るために、学生と高齢者とが協働してカリキュラムを開発していく過程において、両者がどのような学びをしたのかについて、「信大茂菅ふるさと農場」の過去4年間の実践記録の分析と活動に参加した学生5名と林部信造氏への聞き取り調査の分析をもとに考察した。その結果、学生と高齢者とが協働してカリキュラムを開発していることが相互の学びあいにつながり、その学びこそが「信大茂菅ふるさと農場」が継続して行なわれている要因となっていることを究明した。

このことから示唆されることは、高齢社会を迎えた我が国の学校教育において、世代間交流を継続的に推進していくためには、若い教師が地域の高齢者と協働して地域の伝統文化等のカリキュラム開発を実現していくことであると考ええる。

#### 注・参考文献

- (1) 文部省『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について：中央教育審議会第二次答申、文部時報7月臨時増刊号第1449号』ぎょうせい、1997年。
- (2) 長野市茂菅地区にJAながのを通じ、地元農家から農地を借り受け開設された。『第七期「信大YOU遊サタデー」の実践』信州大学教育学部附属教育実践総合センター、2001年。『第1期「信大YOU遊広場」の実践－臨床の知－を求めて』、信州大学教育学部、2002年。『第2期「信大YOU遊広場」の実践－臨床の知－を求めて』信州大学教育学部、2003年。『信州大学における「地域貢献」の教員養成－第1期「信大YOU遊世間（ワールド）」の実践』信州大学教育学部、2004年に詳しい。
- (3) 平成6年に、①学生生活の活性化を図る、②大学の持つ優れた教育力を地域社会に開くことによって、社会に貢献する、③学校週5日制の完全導入に備え、教育学部が率先してモデルを提示し、地域社会貢献する、④学生が子どもと関わることにより、教師となるための実践的指導力の基礎を身につけること－を活動目的として、信州大学教育学部学生の自主的な活動として始まった。『第七期「信大YOU遊サタデー」の実践』信州大学教育学部附属教育実践総合センター、2001年に詳しい。
- (4) 平成14年度の活動については『第2期「信大YOU遊広場」の実践－臨床の知－を求めて』信州大学教育学部、2003年、37～38頁。  
海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義－「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して－『教育実践研究』No.2、信州大学教育学部附属教育実践総合センター、2001年、123～132頁。



## 14. 5年目の「信大茂菅ふるさと農場」の実践記録

農場長 神林彩井(生活科学教育専攻3年)

副農場長 吉澤あすか (言語教育専攻3年)

### 1. これが信大茂菅ふるさと農場です！

信大茂菅ふるさと農場は、信大から自転車ですぐ 15 分のところにあります。何気なくこいでいるとついでに遠くのような距離なので、初めて行った人はみんなとてもびっくりします。周りは山に囲まれていて、見上げれば青空。耳を澄ませば川のせせらぎや、鳥のさえずり、鹿の鳴き声まで聞こえてきます。自然に囲まれたこの地に、休耕田になっていた荒地を開拓して茂菅ふるさと農場ができて今年で5年目。想像もつかないくらい先輩方の苦労の上に、私たちは立って、今年も一年間活動してきました。

茂菅ふるさと農場は上下3区ずつ、計6区の広さがあります。昨年度は6区全て稲を育てましたが、今年度は、上の農地は水田として稲を、下は畑としてさつまいもとじゃがいもを育てました。子どもが行う農作業は、基本的にすべて昔ながらの手作業によるものです。

また、茂菅ふるさと農場は国際協力田になっていて、収穫されたお米60kgが、JAを通してマリ共和国に送られます。マリ共和国の農村部には飢餓の人が80%もいるそうです。

今年度は、子どもたちと一緒に、一年間を通して7回の活動をしてきました。単に「活動をしてきました」と言っても、私たちのできることは限られています。農業の専門的な事を教えてくださったり、肥料や苗などの手配をしてくださったJA長野営農指導部の大内さん。機械を貸してくださったり、自らの経験から多くのことを教えてくださった林部さんご夫妻。そして、日々の管理、全体的な責任を一手に負ってくださった土井先生。学生の「やりたいこと」に、無償の愛情で多大な力を貸してくださり、私たちも安心して悩み、遊び、楽しむことができました。本当にありがとうございました。

### 2. 今年度の活動概要。

今年度ははじめに、昨年度、茂菅ふるさと農場ならびに牟礼ふるさと農場に参加した子どもたちに募集要項を送り、今年度は約40名の子どもたちが登録してくれました。活動をするにあたっては、大内さん、林部さん、土井先生と相談して日取り等を決め、活動ごとに子どもたちに応募はがきを送って、タイムテーブルや活動内容など手作りで作っていました。

活動はたいがい午前中に行われ、暑い日も、一生懸命遊び、農作業をしました。至らない点が多々あるにもかかわらず、保護者の方々にはご理解とご協力をいただき、温かい目で見守っていただきました。おしゃべりをしながらの農作業体験も本当に楽しかったです。

また、子どもたちとの活動は全部で7回ですが、その活動と活動の間にも、たくさんの方にご協力いただきながら田んぼや畑の管理をしてきました。以下がこの一年間の活動概要です。

月	日(曜日)	活動内容	参加者数	学生
4月	6日(火)	田起こし		1名
	10日(土)	第1回「春だ！なかよしじゃがいもうえ♪」	子ども26名	15名
	16日(金)	土寄せ		5名
	28日(火)	種まき		2名
5月	1日(土)	伏せ込み		3名
	12日(水)	田起こし、あぜ作り		6名
	16日(日)	第2回「いもいもパラダイス レッツさつまいもうえ！」	(雨天中止)	17名
6月	3日(木)	草刈り、田起こし、あぜ作り		5名
	4日(金)	代かき		3名
	5日(土)	ひるとり、準備		10名
	6日(日)	第3回「うえよう！みんなのモスゲ米♪」	子ども28名	15名
7月	7日(木)	ポンプ当番(朝6時に開けて、夕方6時に閉める。)		10名
	～26日(月)	(周辺の5つの田んぼ共通のポンプです。)		
	25日(日)	田んぼネット張り		
	31日(土)	第4回「みんなでたからさがし！じゃがいもコロロ」	子ども15名	13名
8月	3日(火)	くいうち		3名
	6日(金)	ネット張り		5名
9月	28日(火)	草刈り		3名
10月	2日(土)	第5回「みんなでかろう モスゲ米」	子ども26名	13名
	18日(月)	シートかけ		2名
	19日(火)	脱穀(半量)		2名
	22日(金)	試験場へ(千歯こきを借りに。)		1名
	24日(日)	第6回「やきいも&脱穀！モスゲ米」	子ども24名	11名
1月	8日(土)	第7回「Let's cooking!! 茂苔を味わおう♪」	子ども19名	12名
	19日(水)	国際協力田のお米の発送式		5名



●たくさんの思い出、学び……。茂菅が育てるのは、作物だけじゃ、ない。

今年も茂菅の土に多くの人に触れ、何かを感じ取っていきました。

今年度茂菅ふるさと農場の活動に参加した学生の想いを紹介します。

「千歯こきによる力作業」

「農作業を通した子どもとのふれあい」

「先輩たちの企画力と生まれる笑顔」

「人とつながっていける場」

「人生2度目の稲刈り」

「子どもとのスキンシップ」

「体験して実感！！」

～誰もが楽しめる活動作りの重要性～

「環境からみた茂菅」

「農作物に合わせて人が動くことと

継続して関わること」

「笑顔を作り出せる『茂菅ふるさと農場』のいいところ」

「茂菅の活動に参加して」

「茂菅で見つけた私の中の子ども像の変化」

「自分で気づき、進んで動き、思いっきり楽しむ」

「自分を囲む輪の外にいる子ども」

「コメムスメ」

「後輩の姿から素直に学ぶ」

「これからの社会を発展させる『社会力』育成の場」

「実際に体験してみることが大切」

「人と人をつなげる農業の魅力」

教育実践科学専攻2年 川端 智子

理数科学教育専攻2年 原 千恵

理数科学教育専攻2年 末松 辰規

理数科学教育専攻2年 大塚 一哉

理数科学教育専攻2年 矢竹喜美子

生活科学教育専攻2年 松井 泉樹

障害児教育専攻 3年 岩羽 純一

生活科学教育専攻3年 中河 亜実

教育実践科学専攻3年 原 絵里

障害児教育専攻 3年 遠藤 宇寛

社会科学教育専攻3年 仲埜 皓介

社会科学教育専攻3年 別府 紀佳

生活科学教育専攻3年 松澤 栄美

社会科学教育専攻4年 石関 千絵

生活科学教育専攻4年 長野 幸恵

生活科学教育専攻4年 藤田 優子

社会科学教育専攻4年 丸山 大輔

言語教育専攻 3年 古澤あすか

生活科学教育専攻3年 神林 彩井

## 千歯こきによる力作業

教育実践科学専攻 2年 川端 智子

茂菅ふるさと農場も今日で閉場...そんな日に私はこの活動に初めて参加した。この日行われたのは焼きいもと脱穀だった。イモ掘りではもう掘れそうもない場所を真剣な顔つきで掘り続けたり、焼イモの準備になると一番大きなイモを誰よりも先にとろうとしたりする子どもたち。1つ1つの活動に熱中し、はしゃぐ子どもたちの姿がとても印象的だった。同時にこの日、お米に対する私の意識を変える出来事があった。機械を使わずに昔の脱穀機を使う作業をしたことである。子どもたちの補助として脱穀してみたのだが、見るだけでは想像もつかない大変な力作業であった。それも一度にたくさんは脱穀できないのである。これには驚き、お米は収穫までが大変なのはもちろんのこと、精米を終えるまでにかかるの労働力と人手がいることを実感した。「米を粗末にすると目が潰れる」とよく祖母に言われて私は育った。ご飯を残せば叱られたがその意味するところはずっと知らず、あるいは考えずにいたことにこの時初めて気づかされた。

同じ体験活動をする中で子どもたちはどのような事を感じていたのだろうか。もちろん楽しさを味わってくれることが第一に大切だと思う。しかし、それだけに終わるのではなく、今の子どもたちにはイメージと実際に味わえば分かる苦労の度合いとのギャップを感じてほしいと思った。体で体験したことは頭でなく心で実感が湧き、人の心を育てると私は思う。茂菅のふるさと農場での一日は私にとっても貴重な体験を与えてくれた。

## 農作業を通した子どもとのふれあい

理数科学教育専攻 2年 原 千恵

「茂菅ふるさと農場」で、農作業を通じ子どもと接してきた。1年生のころは、初対面の子どもと最初に何を話していいのかわからなく、戸惑うことが多かった。しかし、茂菅では、農作業を接しているせいか、自分が初めて出会った子にもすんなりと話すことができた。とても成長したなと思った。でも、やはり子どもの予期せぬ行動に対しては、うまく対処できず子どもとの接し方の難しさを改めて実感した。

その点、先輩たちは慣れていて子どもの接し方もうまく、学ばせていただく点が多かった。例えば、叱るときにはしっかり叱るといったことだ。また、先輩方の企画力。自分たちで企画して、子どもを誘導することは本当に大変なことである。先輩たちの企画力はすごく、私もできるようになりたいなと思った。

みんなで苦労して植えた作物はとても美味しかった。特に、無農薬でやっているために、サツマイモはとっても甘かった。しかし、一番大変な手入れの作業は地域の方々が大半をやってくれていた。地域の方々の支えに本当に感謝したい。

茂菅での体験は、学校では学べないこと、食べ物の大切さ、企画力のすばらしさ、自分の力のなさを学ばせていただいた。



## 先輩たちの企画力と生まれる笑顔

理数科学教育専攻 2年 末松 辰規

茂菅では3回活動させてもらった。最初はサツマイモの苗植えだった。最初の活動が雨で子ども達が来れず、スタッフだけで活動を行った。雨という悪条件だったにも関わらず、スタッフがたくさん集まり短時間で活動が終わった。これが最初の活動だったため、すごくスタッフがしっかりしている活動だと感じた。その後も、田植えと、稲刈りに参加させてもらった。そこから、しっかりした組織だということを感じた。学生スタッフの人数は多いし、子どもに対して「学習」という学びの時間を設けていたり、約束ごとをつくってから活動していた。そのため、鎌などの危険な道具を使ったりするにもかかわらず、大きな怪我をする子もいなかったし、子ども達が安全に活動できていた。

活動中の子ども達のように、作業に一生懸命でとてもいい顔していた。特に稲刈りの時には稲を持って「こんなにいっぱい取れたよ。見て見て〜。」と言って話しかけてくれた子ども達のうれしそうな顔は今でも鮮明に覚えている。また、農業からだけでなく環境からも色々学んでいたようだ。カエル、アメンボやイモリなどの生き物を見つけて遊んでいたり、草で舟を作ったりしていた。自然のものを使って遊んでいるときの子ども達は生き生きしていてとても楽しそうだった。

茂菅の一年での僕の収穫は、両手いっぱいの作物とそれに負けない経験である。また、振り返ると、活動の準備・計画をし環境を整えてくれた先輩方と、たくさんの笑顔を見せた子ども達への感謝の気持ちでいっぱいになる。本当に楽しい活動をありがとう。

## 人とつながっていける場

理数科学教育専攻 2年 大塚一哉

茂菅ふるさと農場では様々な体験ができた。きっと将来、子ども達とやるだろう活動だと思う。そのために「こんなことが必要だな」、「こんなこともできそうだなあ」と思った。また、まわりの危険を考えることもあった。

活動中の子ども達は元気いっぱいだった。農場に来たときからいろんなところで遊び始めて、集合させるのに少し苦労した。子ども達は、はじめは夢中になって活動していた。いろんなことを言いながら、少し遊び気分にもなりながらその子なりに活動していた。また、自分とは違う学校、学年の友達との活動だけど楽しそうだった。これは子ども達にとってとても大切なことだと思う。確かに、はじめは学生が間に入って交流が必要だけど、あとは子ども同士でうまくやっていたと思う。農場体験だけでなく、人とつながっていけるということを感じてくれているといいなと思う。何よりはじめは作業に熱中しているけど。

しかし、子どもにとっては大変なこともあったみたいだ。稲刈りでは作業が長引いたために飽きたり、疲れてしまった子どもが多かった。これは仕方がないことだから作業の量を工夫するといいかもしれない。ぼくはこの活動が、「学生の成長の場」というより「参加した子ども達にとって楽しい活動」というものであって欲しい。

## 人生2度目の稲刈り

理数科学教育専攻 2年 矢竹 喜美子

人生二度目の稲刈り☆子どもたちに稲刈りの上手なやり方を教えてもらいました。どんどんどんどん刈り進めていく子どもたちを見て、びっくりでした。途中から、多くの子どもたちの関心の的がカエルへと移っていましたが、自然と触れ合うという面で考えれば、それもそれでよかったと思います。でも、あんなに大量のカエルを一度に見たのは、人生初でした!(^^)!

茂菅での稲刈りを通して思ったことは、みんなで同じ作業に取り組むってことはスバラシイ!!ということです。茂菅の活動に参加するのはこのときが初めてだったけど、子どもたちともすぐ仲良くなれました。同じ目標に向かって、同じ時間を共有することで、多くの仲間ができることを実感しました。

## 子どもとのスキンシップ

生活科学教育専攻 2年 松井泉樹

茂菅活動に初めて参加したのは、サツマイモ植えでした。残念ながら雨が降ってしまい、学生だけで植えたのですが、子どもたちが笑顔いっぱい楽しそうにイモほりをする日が来ることを願って植えることができました。そして、いろんな活動に参加してきて、あっという間に10月24日の茂菅の最後の活動「サツマイモほりと脱穀」になっていました。

この活動を通して、本当に様々なことを学んだり実際に体で感じることができました。まず、子どもたちとの関係は、最初はどう接したらよいのかと考えるばかりで、なかなか自然に触れ合うことができなかったのですが、子どもたちも最初は緊張していて私と同じ様子でした。しかし、子どもたちは次第に緊張がとけて、わくわくしている表情が見えてくると、私もその表情につられて知らず知らずのうちに、笑顔になっていました。また、名札があったことによりお互いを名前で呼んだり呼んでもらったりと親近感がわきました。そして、活動の回数が増えると同時に名前を覚え、私自身が最初に比べどんどん自分から子どもに話しかけたりスキンシップをはかれるようになっていました。子どもたちはとても敏感で、私の変な緊張感がなくなるのを察したかのように向こうから全身でぶつかってきてくれるようになりました。その時は、とても嬉しかったです。こんな喜びがあらわれた頃には、茂菅の活動も幕を閉じようとしていて残念でしたが、きっと子どもたちの心にも私の心にも、何かが残ったのではないかと思います。そして、先輩方の「準備→実行→反省→次の活動への準備」という活動の流れの動きはとても参考になりました。それと同時に私の考えの甘さにも気づくことができました。今後は、先輩方のこういった姿に少しでも近づけるように、新たな活動に積極的に参加していきたいと思いました。いろんな学生みなさんと、茂菅の活動に参加できたことをとても嬉しく思っています。ありがとうございました。



## 体験して実感！！ ～誰もが楽しめる活動作りの重要性～

障害児教育専攻 3年 岩羽純一

大きな希望を胸に信州大学に入学した私は、さまざまなことに挑戦しようと決めていた。だが、まさか休日に田植えをするとは思っていなかった。私だけでなく、多くの大学生が農業をやるとは思っていなかっただろう。しかし茂菅の活動にはスタッフの学生がたくさんいた。何がそこまで学生を惹きつけるのだろう。その答えは自分が参加してみて分かった。活動がおもしろいのだ。学生が夢中になって活動しているのである。当然のことながら、子どもたちは夢中になって稲やさつまいもを植える。そして自分が植えた作物は、収穫したくなる。そして収穫の喜びというものは、何事にも代えられない。このような気持ちになるのは、子どもも大人も一緒である。だから茂菅には多くの子どもたちと学生が集まるのである。

そして忘れてはいけないのは、このような楽しい活動の裏に田畑を管理し、活動の日には、朝早くから学生の昼食となるおにぎりを作っていた人たちのがんばりがあるのだ。

私は、茂菅ふるさと農場で子どもたちとの関わりを通し、さまざまなことを学び、経験した。これからの人生の中で、このような活動をする機会に恵まれたなら、この活動を思い出し、茂菅ふるさと農場のような誰でも楽しめる活動を作り上げたい。

## 環境からみた茂菅

生活科学教育専攻 3年 中河亜実

茂菅の活動を振り返って、今年の夏の教育実習で学んだ環境が子どもに与える影響、環境の重要性について改めて考えた。幼児は遊びや生活を通してさまざまな感情や行動の変化を遂げていた。それを支えているものとして、遊びの道具や場所、保育者の直接的・間接的な働きかけによるものなど、人的・物的な環境が多く関係しているということを感じた。茂菅での活動は、学校や家庭ではなかなか作り出すことのできない自然という学びや発見の多い場所で行われている。その中で子どもたちは自然に自分から関わろうとし、そこで発見や楽しみを見つけて遊んでいる姿を多く目にした。この姿こそ学校教育において求められている理想的な姿なのではないかと思った。ただ自然の中に子どもたちを連れて行くだけでは戸惑いを感じてしまうと思う。安全や子どもたちの興味や欲求に合わせた遊ぶための環境や道具を、どのようなものをどこにどのように置くのかということに気をつけながら環境構成をすることが重要だと思う。

また、男の子たちがカエルを捕まえることに夢中になり、低学年の子達は『捕まえる』という行為に楽しさを感じていて、手にいっぱいのカエルを握り締めていた。それを見た高学年の子が、「そんなふうのにぎったらカエルが死んじゃうよ。」といって子どもたち同士で命の尊さについて考え、学んでいた。このようなふれあいも兄弟が少なく、異年齢の子と遊ぶことが少ないという今、とても大切なことだと感じた。子どもたちと一緒に遊び、作業をし、喜びや楽しさを共有できたことが何よりも嬉しかった。ここで感じたこと、子どもたちとの思い出をいつまでも大切にしたいと思う。

## 農作物に合わせて人が動くことと継続して関わること

教育実践科学専攻 3年 原絵里

この一年、茂菅ふるさと農場のじゃがいも植え、さつまいも植え、田植え、じゃがいもほり、稲刈りに参加させてもらいました。

茂菅から、私は主に二つのことを学んだように思います。

一つ目は、農作物に合わせて人が動かなければならないこと。さつまいも植えの時、スタッフが中心になって一生懸命企画したにもかかわらず、当日は雨。子ども達には安全を考え中止と連絡し、活動は学生が中心になってその日のうちに植えました。雨の中、しかも子どもがいない中の活動でしたがその日の反省会では「雨の中で辛かったけれど、いい経験ができた」「裏があるから表がある。今回はその裏の活動をみんなでできてよかった」

「この日のことも子ども達にちゃんと伝えていきたい」などの意見が出ました。農作物のために雨の日の茂菅、つまり“裏”の活動に参加した学生がそう感じることができ、辛い経験乗り越えて、みんなでよかったといえる場が作れるのは、農場長や副農場長、林部さん、大内さん、そしてスタッフ達の頑張りや信頼関係が、そして農作物、子どもに対する愛情があるから成り立つんだなと思います。そんな場を作れる“茂菅ふるさと農場”はすごいと感じました。

二つ目は継続することの大切さ。徐々に活動を続けていくうちに、子どもや農作物に愛着がわいてきて、前回関わった子どもが気になって違う班の子なのに「何してるの？」と声をかけてしまうこともしばしばです。そんな一人ひとりのかかわりの中で、子どもも私に慣れてくれたのか、こんなことがありました。S君が「僕、紙すきが得意なんだ。今度のときに作ってきてあげるね！何色がいい？」と聞いてきました。私は「じゃあピンク！」と答えてその時は活動を終わりました。そして約一ヵ月後、次の活動のときに、S君は本当にピンクの葉書を作ってきてくれました。“活動が一ヶ月もあいてしまっているのに、S君はちゃんと約束を覚えていて、作ってきてくれたんだ！”そう思うとうれしくてうれしくて仕方がありませんでした。また、茂菅は一年かけて収穫の喜びが味わえます。前に植えたジャガイモがこんなにたくさん実った！！この実感は1回限りの農作業の体験を数種類行なうXYサタデースクールではなかなか味わうことのできない感覚なのでとても貴重な体験です。こんな、子どもとの関係や、最後に収穫する喜びは、継続することによって生まれるものであり、「1年間続けること」の大切さを知りました。

これら以外にも茂菅から学んだことはたくさんあります。最後になりましたが、これらの学びができたのは、この茂菅に参加させていただくためにお世話になった、神林さん、吉澤さん、林部さん、大内さん、土井先生、茂菅スタッフの皆さん、クッキング隊の皆さん、茂菅に来てくれた子ども達、お父さんお母さん、その他たくさんの人たちのおかげだと感じています。本当に感謝したいと思います。ありがとうございました。



## 笑顔を作り出せる『茂菅ふるさと農場』のいいところ

障害児教育専攻 3年 遠藤宇寛

『茂菅ふるさと農場』のいいところ。ジャガイモを植えて、収穫して食べるところ。田植えをして、稲刈りをして、脱穀をするところ。泥にまみれながら、虫探しをしながら、学生やおじさんとおしゃべりしながらの活動。子どもの笑顔。学生の笑顔。大人の笑顔。『茂菅ふるさと農場』は笑顔を作り出せる。作物が作られる過程を体感する場、人と人との交流の場。それらの大切さをこのプラザで体験できました。

## 茂菅の活動に参加して

社会科学教育専攻 3年 仲埜皓介

私はこのYOU遊世間に参加するのは今年で2年目になりますが、子どもと交流するという貴重な経験ができたと思います。また、この2年間でじゃがいもや米など色々な作物を育ててきて非常に大変であったと思い、そしてそれゆえにとっても達成感がありました。この茂菅で経験したことは自分自身にとって大いに実りのあるものとなることを祈っており、できればこの経験を教師になった際にぜひとも活用したく思っています。

## 茂菅で見つけた私の中の子ども像の変化

社会科学教育専攻 3年 別府紀佳

私が気付かないだけかもしれないが、大人になると、目に見えて「成長した」と感じる事なんてないと思っていた。活動を通しての子どもの姿、作物の様子を見ると、大きく変化していることに気付く。これは私だけではなく、全員のスタッフが感じていることだろう。子どもの表情や言葉遣いがどこか大人っぽくなり、作物は小さな苗から立派な稲やサツマイモになる。私は、茂菅の活動をするまで、幼稚園児やその下の3・4歳の子どもと接する機会がなかった。そのため、(悪い言い方をすると)幼稚園児は意思疎通の取りづらい・何もできないから手助けをしなくてはならない、私にとって「手のかかる宇宙人」みたいな存在だと思っていた。今は、なんて変な見方をしていたのかと自分に呆れてしまう。そんな私でも去年の活動で、一部の幼稚園児の子どもと仲良くなることはできた。でも、同じ班になったのに話すことができなかった子どももいた。私は「やっぱりだめだ〜(涙)」とショックを受けた。でも、もしかしたら私から壁を作り、それを敏感な子どもが感じたのかもしれない。「その子とまた同じ班になったら話せるといいな」と思いながら臨んだ今年。そんな私の気持ちを神様が知ったのか、今年は、幼稚園児やさらに下の子どもと同じ班になる機会が多かった。小さい子どもたちが一生懸命農作業している姿を見て「手助けしなければいけない子ども」ではなく「私を助けてくれる・大切なものを教えてくれる子ども」だということに気付いた。去年より身構えることなく活動ができ、自分自身も心から楽しめた。あの子どもと同じ班になり、今度は話すことができた。成長したというのも変だが、私の中の子ども像が変わったことは確かだ。これからも色々な経験をして自分を変えていきたい。本当に茂菅の活動に参加してよかったなと今心から思う。

## 自分で気づき、進んで動き、思いっきり楽しむ

生活科学教育専攻 3年「えみんこ」こと松澤 栄美

今年は、「じゃがいも植え」「さつまいも植え」「じゃがいも掘り」の3つの活動に参加させていただきました。私は、当日参加、あるいは前日に少し準備を手伝うくらいしかできませんでしたが、みなさんが温かく迎えて下さったおかげで、毎回楽しく活動できました。

3年生のみんなや2年生からは、自分で気づき、進んで動くことの必要性や、子どもと一緒に思いっきり楽しむことの大切さを学びました。先輩方（先生・保護者の方々・地域の方々）の姿から、「支える」ということや「見守る」ということの意味を学びました。

また、子どもたちは、「なぜ？」と思ったらとことん追究していく「やる気」や、ちょっとしたことにも感動できる心を持っていました。私が忘れつつあった気持ちを、子どもたちは思い出させてくれました。そして「自然は、待ってくれない」とことや、茂菅の畑は、人間だけでなく沢山の生き物に恩恵を与えてくれているのだということを実感しました。

なお、私の中で特に印象に残っている活動は、耕運機で畑を耕す体験をさせていただいたことや、芋が面白いくらいにゴロゴロ出てきたじゃがいも掘りです。収穫の喜びを体全体で表し、袋に穴が開きそうなほどたくさんの芋を詰めこんでいた子どもの姿を今でも鮮明に覚えています。

こんなに楽しい活動ができたのは、見えないところで支えてくださった方々や農場に関わった全ての方々のおかげです。皆さん本当に有難うございました。

最後になりましたが、茂菅ふるさと農場の活動のお手伝いをさせていただくことができ、本当に感謝しています。そして、農場長の彩井ちゃん☆ごくろうさまでした！

## 自分を囲む輪の外にいる子ども

社会科学教育専攻 4年 石関千絵

竹の部屋の電話の横に、毛涯章平先生の言葉が貼ってありました。その中に、「自分を囲む輪の外にいる子どもに目を向ける」とあります。「自分を囲む輪」の中にいる子ども、つまり自分から近づいてきてくれる子どももいるし、私が近づいていけば受け入れてくれる子どももいます。そういった子どもはかわいいし、つい気にしがちです。しかし、近づいていっても受け入れてくれない子ども、「いい子」なのでついほったらかしになりがちになる子どももいて、それが「自分を囲む輪の外にいる子ども」なのだと思います。

私は「自分を囲む輪の外にいる子ども」に目を向けているだろうか、そんな問いを自分に投げかけながら今期の活動に取り組むようにしました。でも、実際にやってみるとこれがなかなか難しい。学生はみんな気を配っているつもりなのですが、よくよく見ると子どもが違うところに行ってしまうのに気づかなかったり、一人で作業したり、保護者とばかり話しているという子どももいました。自分の視野の狭さ・力のなさを目の当たりにして悩む時期もありました。しかし、そこで悩んだからこそ、自分自身の子どもとのかかわり方を見つめなおすきっかけになりました。



## コメムスメ

### 生活科学教育専攻 4年 長野幸恵

私にとって今年は、2年目の茂菅の活動だった。2回目のさつまいも植えから参加した。あいにく、雨の中学生だけでの活動となったが、200本の苗を植えた。次に、田植え。テープに沿って、次々と植えた。続いてじゃがいも掘り。日も強く、熱くて汗がどんどん出てくる中、宝捜しをするように、みんな夢中でお芋を掘り出した。大豊作で、お芋の絨毯ができる程だった。いつのまにか秋、収穫。それぞれ鎌を持ち、ざくざくと刈っていく。いつのまにか、田んぼはすっきり。その後、脱穀とさつまいも掘り。充実した活動だった。

今年は、活動後におにぎりを食べながら反省会の時間が設けられた。全体を見て、ある子と過ごして、とそれぞれ、その日の活動で感じたことを話していった。この時間は、みんなの考えを聞いて、さらに話し合える、非常に勉強になる時間だった。互いに、一つの活動を共有しあえてとてもよかった。また、林部さんのお宅に何度かお世話になった。とても温かく受入れられて、一人暮らしの私にとって、まるで実家に帰った時のようなひと時だった。林部さん、ありがとうございました。

去年から茂菅を始めて、私は、かなりお米に魅せられてしまった。そもそも新潟人だから米は馴染みがあったが、ますます好きになってしまった。早朝に作って、活動後の昼食となるおにぎり〜かなりの量なのに本当においしくて、ペロリと食べてしまう。実は、卒業研究も米のことでやっている。米娘になってしまった。

最後に農場長、本当におつかれさまでした。とても楽しい日々だったよ。ありがとう。暑い日のあのアイスの味、忘れません。そして、茂菅っ子みなさん、ありがとう。

## 後輩の姿から素直に学ぶ

### 生活科学教育専攻 4年 藤田 優子

私が、3年間 YOU 遊のさまざまな活動に参加して感じたことは、例え同じような活動に参加したとしても、毎年感じ方が違うということだ。今年は、大学生最後の年ということもあり、私の中には「楽しみたい」「長野での思い出を作りたい」という気持ちがあった。また、学部最高学年として、自分自身がどのように関わっていけばよいのか、という気持ちもあった。特に、昨年の実行委員の経験から、活動を支えていく仕事の大変さも理解しているつもりであった。3年生を中心に YOU 遊のメンバーが頑張る様子を、本人たちが頑張る過ぎない程度に見守り、協力していけたらいいなあという気持ちで様々な活動に参加してきた。私が昨年の活動を通して一番感じていたことは、前年まで活動の中心で活躍していた人が、4年生になると、なぜか YOU 遊の活動への参加率が低くなっているような気がしていた。それは、進路のことや大学生活のうちにやりたいことがあるからかなあ、とか、上級生がいて口出ししすぎたら、逆に後輩のためにならないという遠慮もあるのかなあ、と思っていた。しかし、当時3年生の私としては、それまでさまざまなことを教えてもらい、助けてもらった先輩がいないのは寂しかった。

茂菅農場の活動だけでなく、今年の活動を振り返ると、中心になって活動している3年生や2年生のおかげで、本当に一つひとつの活動を楽しむことができたと思う。それは、2年生のときに感じていた、ただ、子どもたちや仲間や先輩と過ごすことが楽しい、という気持ちとは少し違い、楽しい中にも、みんな（2・3年生）の姿から学ぶことを素直に

吸収できたような気がする。そして、やはり私をこれまで成長させてくれた経験の源はYOU遊の活動であり、そのきっかけは「楽しい」「同じような気持ちを持った仲間がいる」ということであると気付いた。これまで一緒に過ごしたみんな、本当にありがとう！

## これからの社会を発展させる『社会力』育成の場

社会科学教育専攻 4年 丸山大輔

二宮尊徳は、「国家最大の損失は人心の田畠の荒れたる事也。其の次は田畠山林の荒れたる事也。」と述べている。おかげさまで、信大茂菅ふるさと農場が始まって今年で5年目を迎えることができた。先輩方が、休耕田であつた土地を開墾し、林部さん、大内さんなど多くの方々のお力添えを頂き、今年度も無事収穫をすることができた。本当にありがとうございます。

では、なぜこのような活動をするのであろうか。それは、先輩方や、現在の学生スタッフ、支えてくださる多くの方々、そしてここに集う子どもたちやその親御さんたちに、共通の願いや問題意識があるからであろう。

茂菅ふるさと農場の背景にある今の社会の現状は、かつて二宮尊徳が憂えた状況に直面しているのではないか。わが国の人心の荒廃は言うに及ばず、田畠山林の荒廃は世界的規模で進行しつつあることを日々実感しているのは、私だけではないであろう。こんな現状を注視していると、無力感や失望感に苛まれるが、この現状に立ち向かおう、変えようという意欲、意識がこの活動の根底にあるように思う。国家最大の損失を補うために、大学生がそして地域の方々が、休耕田を開拓し、そこで米や野菜を作り、それを通じて子どもや次代を育成する役割を担うであろう人材を育成する。現在の社会を維持することのみに心血を注ぐだけではなく、これからの社会を発展させようとする「社会力」育成の場がここにある。

## 実際に体験してみることが大切

副農場長 言語教育専攻 3年 吉澤あすか

“大学の近くに、こんなにのんびりしたところがあったんだあ。ここ、いいねー!!”

初めて茂菅に行ったときの気持ちを今でも忘れることができません。山がほんとに近くて、目の前に川が流れて、近くのグラウンドからは野球部の声が聞こえてきて…なんとなく、別世界にきたような感じがして、これから、ここで活動するんだと思うと、ワクワクしました。

あいにくの雨で、学生だけで行なったサツマイモうえの活動から、最後の脱穀の活動まで、農場での一年間はあっという間に過ぎてしまった気がします。どの活動も、子どもや学生との触れ合いが楽しかったということはもちろん、自分自身が初めて経験することも多くて、活動を終えるごとに、満足した気持ちになりました。特におもしろかった活動は、ジャガイモ堀りでした。掘っても掘っても、次々と出てくるのがうれしくて子ども以上に夢中になって作業をしていました。まさに、“宝探し!!” 子どもの顔よりも大きなおイモもあって、大地の力のすごさに驚き、感動しました。自分たちで育てたおイモは、やっぱりおいしかった!! 茂菅での活動を通して今思うことは、“実際に体験してみることが大切”ということです。私は農業のうちの始めと終わりの部分にしか関わっていないので、育て



る過程の本当の苦労や努力を体験してきたわけではありません。しかし、そこだけでも経験することで、農業の大変さを少しでも知ることができ、それを実際に毎日やっている人たちを尊敬することができたのは、自分が体験したからこそ得られたことだと思います。一年間、土井先生や大内さん・林部さんを中心に、多くの人たちに支えられることで活動ができたことを本当に感謝したいです。ありがとうございました。

最後に、農場長のアヤイ、一年間、本当にお疲れ様でした!! 役不足な副で申し訳なかったけれど、茂菅で一緒に活動できて、ほんとに楽しかった☆ありがとうございました!!

## 人と人をつなげる農業の魅力

いつでもまったりやの農場長 生活科学教育専攻 3年 神林彩井

私がこの茂菅ふるさと農場の地を初めて踏んだのは去年の春。私はそれまでまったくといっていいほど農業というものに関わったことはありませんでした。初めての農業、たくさん子どもやすばらしい人々との出会い。何もかもが新鮮で感動的で、去年一年間の活動を終えて、私はその感動を次のように表現しました。「晴れの日も雨の日もありましたが、この一年は私にとって、今までの人生の中で一番とっていいほどの豊作の年となりました。」

昨年12月のYOU遊フェスティバルで、茂菅ふるさと農場で収穫したお米を使って、子どもたちと一緒にもちつきをしました。初めて長として活動を作り上げ、人を率いたり指示を出したりする大変さを経験しました。そこで様々な反省点がうまれ、もっと実践的な力をつけたい!と思いました。さらに、一年間関わってきた茂菅ふるさと農場を自分が中心となって引き継ぐことで、また多くの感動や出会いをうみだすことができたなら…大好きな子どもたちに会うことができたらいいなあ、という思いがありました。これが、私が茂菅ふるさと農場の農場長をやってみようと思ったきっかけです。

去年の初めの頃は受身的に活動に参加していましたが、次第に積極的に活動の企画にも参加させていただきました。当日は目の前にいる子どもと精一杯関わって、本当に楽しみました。今年一年間は「農場長」という役割を担ったわけですが、何があってもやり抜かなければならないという責任感があったり、当日に臨機応変の対応を迫られたり…ジレンマとプレッシャーの中で去年とは比べものにならない大変さを感じ、時には一番大切な「楽しむ」ということを忘れてしまったときもありました。

そんな中で、いつでも温かく迎えて助けてくださる大内さんや林部さん、茂菅地区の農家の方や工事現場のおじさん、いつも支えてくれる副農場長のあすか、同じように茂菅ふるさと農場と一緒に作り上げていこうと協力してくれる多くのスタッフ、参加してくれる子どもの笑顔や保護者の方の理解、そして農場のことをいつも気にかけて足を運んでくださる土井先生…。数え切れないほど多くの方々に励まされ、パワーをもらって何とか7回もの活動を作り上げていくことができました。

農業は天候にも左右されるし、腰も腕も痛くなるし、夏場はありえないほど汗だくになるし、本当に大変だということを、改めて実感しました。今年の活動でも、子どもたちが、ただ楽しいだけでなく少し辛そうな顔をしているのも見られました。しかし、農業にはそれを上回る魅力があると思います。それは、「人と人をつなげることができる」ということです。子どもが、学生が、地域の方が、保護者の方が、多くの人が茂菅ふるさと農場を

通じて複雑に繋がっている、そう感じられました。異年齢同士、けんかをし、相談をし、支えあい、笑いあい…なんて楽しくてわくわくして感動的な体験でしょうか。かつては当たり前であったのに、多くの現代人が忘れてしまっている大切なことがここにある、そんな風に感じられました。

茂菅に来る子どもたちの中には、黙々と農作業をする子もいれば、虫やカエルに夢中な子、大人と同じ作業をしたがる子、甘えん坊な子…本当に様々です。(本当に危険と思われることをしているとき、大切なことを説明している時以外、)彼らが何をしていようと、私は彼ら自身の興味や関心、内側からのやる気に任せていました。それは、目の前の成果ではなく、この茂菅ふるさと農場は、子どもたちの心のもっと、奥の…根っこの方に栄養を与え、ゆっくりとじっくりとじんわりと大切なことを育ててくれている、そう思ったからです。

私もこの小さな小さな農場で2年、何人もの人と心を通わせながら、色々なものに触れ、たくさんの栄養をもらって、不格好だけれど何にも変えがたい大きな大きな宝物を得ることができました。これらをこれから出会うたくさんの子どもたち、多くの人みんなに分けていきたいと思います。

最後になりましたが、今まで支えてくださったすべての人に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。



## 15. 食の安全と教育

(財)長野県農業開発公社 JAながの営農指導部駐在 大内清

「信大YOU世間」の実践体験に係わって、3年目となり、年度初めに土井先生と林部さん宅に伺って、本年度の基本的運営方針を話し合い、又北川新農場長も選出され「茂菅ふるさと農場」の実践が開始されました。

農業生産は繰り返してありますが、前年と同じくありません。「茂菅ふるさと農場」では当初から環境にやさしい有機（減肥）無農薬による、お米生産に取組み、作業節目にはプラザが主催し育成会とも提携し近隣の児童、保育園児が参加して体験と学びの場のイベントが開催され、この体験を通じて農業を理解できる大人に育ってほしいと思いますし、ISO14001を取得したJAながのとしても当然の支援でもあります。

最近牛のBSE問題や、偽装表示問題、無登録農薬問題など食の安全、安心の思想が高まっていますが、有機、無農薬栽培は実は大変で学生の皆さんも、堆肥づくりや、肩、腰を痛くしての田の草取り作業など“今どき”“農学部”などと思ったかもしれませんが、今経済合理型農業から自然循環型農業へ除々に進んでいる事も事実です。この事は地産地消や食糧自給とも大きく係わってきます。

JAでは県と連携してカドミウム米（自然界にある物質で多く含有すると廃棄となる）対策として管内27箇所で、水田の用水、田の土、生産された米の3点セットで採集し県の調査機関に調査依頼し、この結果この地域のお米は安心して食べられる事がわかりました。また本年度よりりんごや野菜、米などの生産に当たってトレーサビリティ（栽培や防除の生産履歴）により消費者にむけ情報公開に取組むと同時に生産物出荷に当たって、残留農薬検査が義務づけられ基準値以下でないと販売が出来なくなりました。この様に安心・安全の生産は労力と記帳管理が必要となり、特に高齢農家の方は戸惑いがあります。

併せて本年の異常気象（夏期の低温、日照不足、多雨等）の気象災害は管内高冷地中心にお米では不稔（稲の花粉ができる時期の低温により花粉の受精能力消失し実らない事）が発生し東北地方は大減収となり県下は作柄96、当農場でも前年比27%の減収となりました。この様に食糧生産は自然条件と大きく係わり結果にも大きな差が生じます。「茂菅ふるさと農場」での取組み主旨も別な意図もありますが、このような実態、体験を体のどこかに残してほしいと同時に教育現場でも共通するものがあると思います。

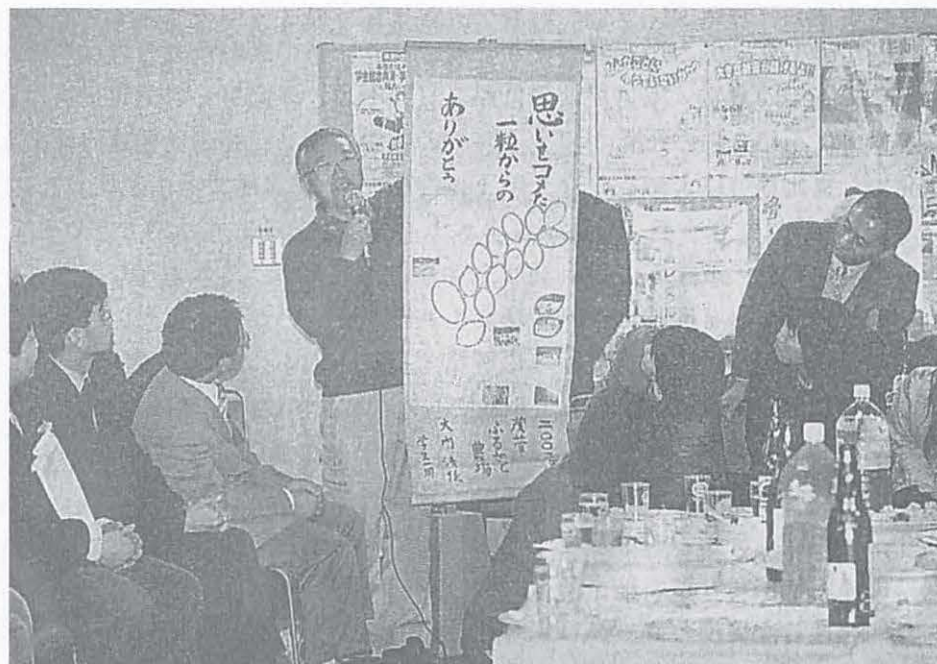
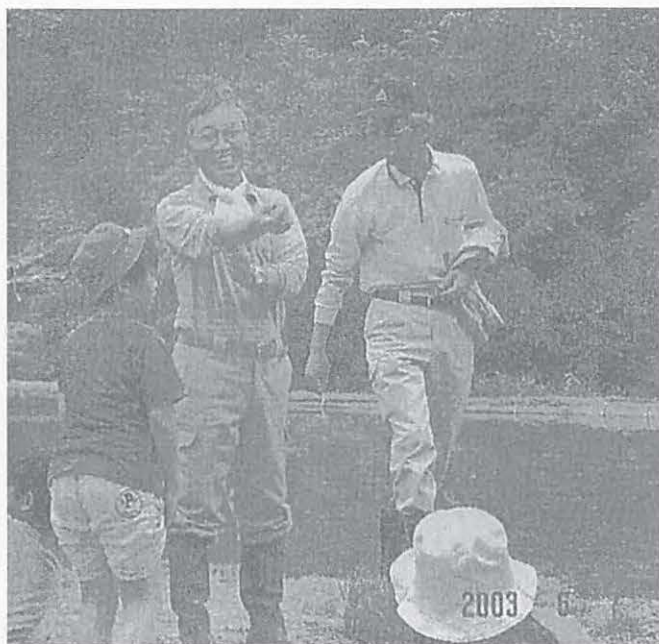
昨年より長野市教育委員会からの要請で長野市内小、中学校初任教員（先生）の体験実習の内農業体験1日にも関わり、6月でしたので「学校の花壇づくり」「田、畑を耕すこと」「りんごの摘果をすること」「農業現場の実態として農作業受委託作業の取組み」等体験と学習をしていただきました。当プラザOBの先生も元気にやっていたらいいました。

今年度の「茂菅ふるさと農場」の新しい取組みとして農場長の配慮で障害児の皆さんも共に田植えや稲刈りに参加する様になり、付き添い保護者も加わり楽しくできました。

年間を通じ直接携わり、高い視野から指導していただいた土井先生はじめプラザの執行部スタッフはこの準備や当日の段取りに、また日常的管理に大変ご苦労様でした。ただ協力スタッフが若干少ない様にも思えました。後に続く皆さんも、地域との係わり、幼児、

児童と係わる機会を通じ社会力を身につけてほしいと思います。

更に私にとって、うれしく思った事は景気低迷、学童減少など就職難のなか、この活動に加わり苦楽を共有した多くの学生の皆さんの教員採用が決まったことです。教育現場ではこの様な先生が求められているのだと思います。学力、社会力、食の大切さ、自然の大切さ、また信州の人情を持ち帰ってほしいと思います。1年間の活動大変ご苦労様でした。





## 16. Y O U遊フェスティバルと学生シンポジウムに参加して

農業 林部信造

歴史の流れは早いもので10年も前から、フレンドシップ事業が全国の大学に先がけて、信大教育学部で行われていたと知り、先覚者のすばらしい英知と決断に対し、深い敬意と感動を覚えました。

私も縁あって平成12年から、当事業の延長である「Y O U遊サタデー」、「信大Y O U遊広場」に地元の農家ということで、お手伝いさせて頂き、このようなことから今回の記念事業に参加できましたことを、非常に光栄に存じ、心から感謝申し上げます。

10年の節目に当たり、事業の一端として開設した「信大茂菅ふるさと農場」の4年間を振り返り、思うままに記したいと思います。

毎年このような立場でシンポジウムに参加させていただき、また学生の皆さんと家族ぐるみで親しくさせていただいているのも、4年前に土井先生との出会いがあったからです。「ふるさと農場」開設に伴う先生の情熱、学生に対する教育理念、先生の人柄などに感銘し、およばずながら開設のお手伝いを決心した次第です。今こそ、立派な水田に復元していますが、当初は休耕田として数年間放棄され、A地は道路工事現場の土の堆積場のあと地のため、グラウンドのように固く、小石も多く、またB地は雑木、雑草が繁茂し、いずれも人力による三つ又、スコップ、のこぎり、ナタなどで抜根し、開墾しました。先生の開拓魂、チャレンジ精神、「人づくり」のための「土づくり」に汗を流し、机上の理論だけでなく、身を挺して感じ得ることの大切さを学び、そこから立派な水田に生まれ変わり、「信大茂菅ふるさと農場」として、歩み始めました。

この水田には人の心があり、数々の課題をかかえながらも、一年にして学生の皆さん、大勢の地域の子ども達、そして保護者の皆さんと収穫の喜びを味わい、また国際協力田として、その目的を果たし、充実した一年であったと思います。

2年目以降は内容の充実重点を置いた企画が立案され、各年の農場長のユニークで豊かなアイデアが子ども達に与えた影響も大きかったのではないのでしょうか。

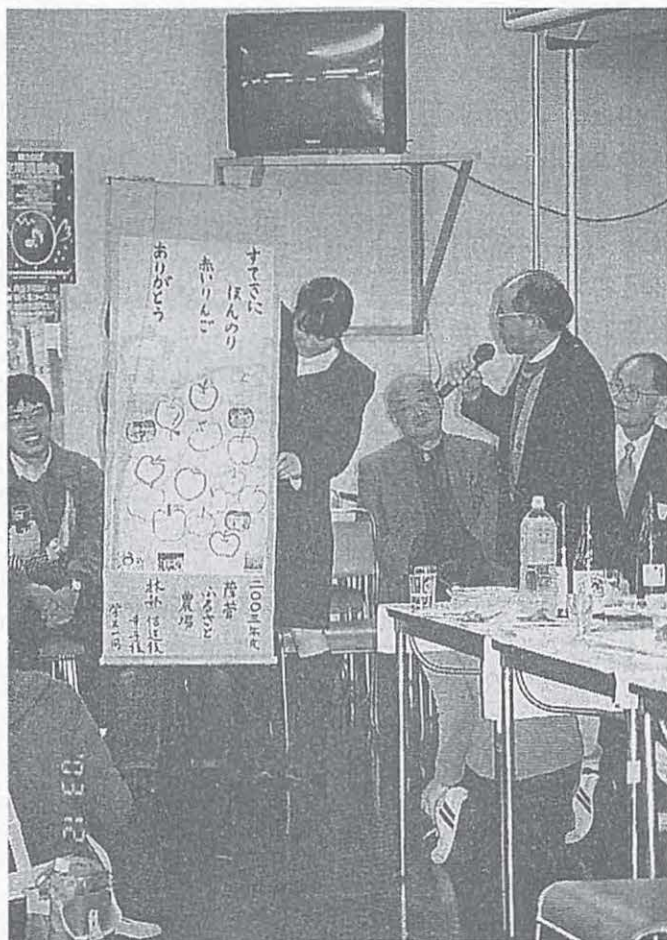
主な行事を例記します。

1. 代掻き後の子ども達とのどろんこ遊び……土の感触、はだか同士のふれあい
2. 田植え後、田んぼに「ふなの稚魚」の放流、飼育  
……自然の中で自由に生きる小さな生命力の観察
3. 千刈穀、トミーの古代農具の実体験  
……古代人の農具と近代化された機械の比較
4. 玄米、発芽米、白米など食の変化……玄米食の体験、視覚、味覚の違いを研究
5. 国際協力田の役割  
……食に飢え、苦しむ子ども達に愛の救援米、国境を越えた助け合い運動
6. 子ども達のかかし作り……自由な発想によるユニークなかかし作り
7. 茂菅ふるさと音頭  
……作業開始前に農場長自作による「ふるさと音頭」に合わせて準備体操

このように米作り未経験の学生の皆さんが、その場面ごとで、いろいろな事を研究、調査されたことを即実行する前向きな姿勢と情熱に感服しました。

また、15名の基調体験報告は、それぞれ原理、原則を守り、人格と見識、個性豊かな大変素晴らしい報告会であり、21世紀のたくましい教員像として期待されることと確信しました。私も社会生活の中でいろいろな体験をして参りましたが、年に一度の全員参加による報告会には、それぞれの立場で反省、感想など発表されますが、この場面は毎年、生涯忘れることのできない感動を与えてくれます。不安をかかえながらも一年間無事、目的を果たした喜び、お互いにそれぞれの立場をたたえ合える豊かな連帯感、信頼と協調により築きあげた一年間、全員がひとつになるこの美しい光景は、深い感動と感涙を与えてくれます。

10周年記念事業フェスティバルが成功裡に終わりましたことを、心からお祝い申し上げ、「信大茂菅ふるさと農場」が末永く継続されん事を願っております。





#### 出典一覧（目次順）

1. 『平成 12 年度信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』 pp.211-215 2001 年 3 月
2. 『平成 15 年度信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』 pp.144-146 2004 年 3 月
3. 佐島群巳・高山博之・山下宏文編『エネルギー環境教育の理論と実践』 pp.19-26 国土社 2005 年 1 月
4. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No. 2 pp.123-132 2001 年 7 月
5. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No. 3 pp.97-106 2002 年 7 月
6. 『第 1 期「信大 YOU 遊広場」の実践－“臨床の知”を求めて－』 pp.181-186 信州大学教育学部 2002 年 3 月
7. 同上 pp.175-180
8. 同上 pp.127-132
9. 『第 2 期「信大 YOU 遊広場」の実践－“臨床の知”を求めて－』 pp.198-202 信州大学教育学部 2003 年 3 月
10. 同上 pp.143-147
11. 同上 pp.138-142
12. 『信州大学における「地域貢献」の教員養成－第 1 期「信大 YOU 遊世間」の実践－』 pp.211-214 信州大学教育学部 2004 年 1 月
13. 白井克典 信州大学大学院教育学研究科修士論文「学校教育における世代間交流に求められる教師の力量－地域の高齢者との継続的な交流体験活動の推進－」第 3 章 2005 年 1 月
14. 平成 16 年度『信州大学における「地域貢献」の教員養成－「信大 YOU 遊世間」の実践－』（第 11 集）信州大学教育学部 2005 年 3 月
15. 『信州大学における「地域貢献」の教員養成－第 1 期「信大 YOU 遊世間」の実践－』 pp. 11-12 信州大学教育学部 2004 年 1 月
16. 同上 pp.13-14

Web上では非公開



## 学生よ、教室を飛び出して米を作ろう！ 土を耕し、魂を育てる五左衛門先生の人づくり

教育学部 教育科学講座  
教師教育学

土井 進 教授



土井 進 (とい すずむ)

1948年富山県立山町生まれ。東京教育大学教育学部、同大学大学院教育学研究科修士課程修了。東京都の社会教育主事補、公立中学校教諭、お茶の水女子大学附属中学校教諭などを経て、1992年より信州大学助教授、1998年より同教授。2002年より附属松本小学校長を兼務。

### どうしたら、いい教師を育てられるか

旧附属長野小学校の校舎を利用した研究室、入口には「信大YOU遊世間（ゆうゆうワールド）」と書いてある。外の棚には、何十足ものゴム長。物置の裏には薪がたくさん積んである。ここが土井進教授の研究室だ。

土井教授は、教育学部教育科学講座で、教育実習等の臨床経験科目を担当している。

「私は信州大学に来る前は、東京で中学校の教師をしていました。だから、学生が教員になったときにどういう問題に直面するかがよくわかるんです」

土井教授は、13年前に着任し、学生が当時のカリキュラムに満足せず、子どもたちと一緒に「ものづくり」や科学実験などに取り組む体験型の授業を求めていることを実感した。5年前からはJAの仲立ちで近くの休耕田を借り「小作人」となって本格的に米作りにも取り組み始めた。これが「信大YOU遊世間（授業科目名は「社会体験実習」）」だ。

「今の学生は、いろんな情報や知識をもっています。でも体験がない。昔なら大人になる過程で自然に体験できたこと……たとえば全身を使って暗くなるまで外で遊ぶとか、額に汗して働く苦労と喜びとか、そういう社会体験や自然体験・生活体験がないんです。だから、とても頭でっかちでバランスが悪い。大学ににいるのに学問の必要性もわからない人が多いのです」

どうしたら、いい教師を育てられるだろうか。そのことを考えたとき、耕作を放棄した水田と生きる力をなくした子供たちの姿が根っここのところでつながっていると、土井教授は感じた。

米を作ろう！教室を出て、太陽の下で農業をする五左衛門先生の誕生だった。



米作りはすべて手作業。田植えは初めての学生も多い



教育学部から徒歩20分の「信大茂菅ふるさと農場」（面積：6a）にて

### 人づくりのための土づくり

「女子学生たちが長靴はいて鍬かきで田んぼに行くんです。地域のお年寄りや縁側でおしゃべりもする。学生たちは直観で自分たちに欠けているものを知っているんです。実はこういう体験を求めていたんだ、ということを見つけて驚きました」

米作りは田起こしから食べるまで全て手作業。採れた米の3割はJAに収め、途上国に贈られる。運営の経費はゼロ円。だから農作業のおやつは自作のイモをゆでて食べる。火力は薪だ。田んぼでは、コンビニで売っているおやつよりも、このイモがとびきりうまい！

「お金があっちゃダメなんです。ない方がいい」

土井教授は田んぼではトレードマークの「つなぎ」を着て、泥にまみれる。通勤は365日自転車に雨合羽姿。雨の日や冬は辛いけど、自転車に乗れなくなったらお終いだと言う。農作業のときは五左衛門と名乗り、教授は偉いなんて絶対に思わない。

「人間はみんなかけがえない存在なんです。だから尊い。苦労して土を耕して米を作ると、自然にそういうことがわかってくる。そして自分の存在への自信が芽生えてくる。これが教師としてやっていくための大切なアイデンティティなんです。ここから「師弟同行・師弟共育」の実践が生まれてくる」

土づくりによる人づくり。「信大YOU遊世間」には教科書では学べない大事なものがギュッと詰まっている。

#### 執筆者紹介（目次順）

土井 進（信州大学教育学部教授）  
海沼正典（須坂市立墨坂中学校教諭）  
志村昌之（千曲市立屋代小学校教諭）  
杉山雅幸（有限会社ネイチャーセンター）  
相磯素子（伊東市立伊東幼稚園教諭）  
西澤俊輔（須坂市立森上小学校教諭）  
鹿子木愛（長野市立朝陽小学校教諭）  
那須紋子（信州大学教育学部附属幼稚園講師）  
高橋和之（茅野市立永明中学校教諭）  
北川伸尚（信州大学教育学部4年）  
白井克典（信州大学大学院教育学研究科2年）  
神林彩井（信州大学教育学部3年）  
大内 清（JA ながの営農指導部）  
林部信造（農業）

#### あとがき

2000（平成12）年3月15日、JA ながの営農指導部の北村典子さんが長野市茂菅に休耕田を探し求めてくださり、地主の若松孝太郎様と私たちを農場で引き合わせてくださいました。その折に素人集団の私たちに対して若松さんは、「どうぞこの農地を活用してください。肥えたい土地ですよ」と話してくださいました。今は故人となられた若松孝太郎様の墓前にささやかな本冊子を捧げさせていただきたいと思います。

私は茂菅の田んぼに立ち、畦の石垣を見るたびに、一つひとつの石を裾花川から担ぎ上げて一枚の田んぼを作り上げた先人たちのご苦労が偲ばれます。曇り無き精神をもった学生たちは、茂菅地区の子どもたちはもとより、障害をもった子にも、不登校を克服しようと励んでいる子どもたちにも声をかけて一緒に農作業に取り組みました。学生たちは茂菅の大地からエネルギーを吸収し、人間群像の中でもまれながら教育者への堅固な志を育んでいきました。5年前の「信大茂菅ふるさと農場」の開設に汗を流した学生たちが2003（平成14）年3月に巣立ちましたが、その教員就職率が69.8%で全国の教員養成大学・学部で第1位でありました。

我が国の農学博士第1号となった新渡戸稲造は、学位論文『農業本論』（明治31年）において次のように述べています。「天地偽らず、農は天地に交わること近し。故に農は偽らず。」これからも豊かな人間形成のために大地に交わりながら、地道に教育実践研究を進めていきたいと念願しています。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。（土井進）



「信大茂菅ふるさと農場」における教育実践研究  
－JA ながの・長野市茂菅地区農家との連携－

編集発行責任者：土井進

発行：信州大学教育学部 教師教育学研究室

発行日：2005（平成 17）年 2 月 11 日

連絡先：〒380-8544 長野市西長野 6－口

信州大学教育学部教師教育学研究室

TEL 026-238-4260 FAX 026-238-4260

E-mail doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

印刷・製本所：信教印刷株式会社

